

若き創造者たちへ

「第73回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年（1954年）から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年も、青年技術者選考委員会を設けて、計画・設計・構造・設備・施工管理およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有識者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

- 応募できる人は満35歳（2026年3月31日現在）以下の本会個人会員に限ります。
- すいせん者を併記し、すいせん者1名につき被すいせん者（青年技術者）1名とします（同一すいせん者が複数の応募者をすいせんすることはできません）。すいせん者は被すいせん者の勤務する組織の上司か上長とします（組織の代表者や所属部署の長でなくとも構いません）。すいせん者が学校教官である場合はこの限りではありません。本人が組織の代表者である場合は自せんとします。
また、組織内で専門分野ごとのすいせんは1名のみとし、複数名のすいせんは不可とします。ただし、組織内の同一分野であっても職種が異なる場合はそれぞれのすいせんは可能です（例：設備分野における「設計」と「施工」、設備設計分野における「電気設備」と「機械設備」、施工分野における「現場での施工管理」と「店社での技術開発・施工計画等」など）。組織の単位は支店もしくはそれに類する営業所を1単位とします。
- 応募分野は特定しません（建築に関するあらゆる分野を対象とします）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工管理、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、成し遂げたすぐれた実績について、下記の提出資料をPDF形式とし、期日までに申込先のメールアドレスへご提出ください。
なお提出資料の返却は行いません。
応募資格・応募分野に関して不明な点があれば本会事務局までお問い合わせください。
- 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考します。
- 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第73回青年技術者特集号」（2026年7月号予定）に掲載します。
- 提出資料（下記の順に資料を構成すること）

■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードしてください。



■略歴・業務経歴（A3版1枚／書式は任意）

本人の顔写真、氏名、生年月日、最終学歴、保有資格、業務経歴等を記載してください。

■選考資料

A：青年技術者の思い（A3版1枚／書式は任意）

青年技術者の思いを端的に表すタイトルを記載してください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢と将来展望等についてまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限ります。

B：業績資料（A3版1枚／書式は任意）

これまで関わったプロジェクトや取り組みについて概要をA3版1枚にまとめてください。各プロジェクトは時系列にまとめ、概要や特徴を端的に記載するほか、プロジェクト毎に本人の関わり方や果たした役割について明記してください。

C：特に注力したプロジェクトに関する資料（A3版4枚以内／書式は任意）

Bに記載したプロジェクトのうち、本人が中心となって特に注力したものを1または2選定し概要をまとめてください。プロジェクトにおける本人の立場や役割のほか、特に貢献した、力量が活かされたと思われる成果について詳細に記載してください。

※A～Cの資料について書式は任意としますが、鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、概念図等を用い、プロジェクトや計画の内容がはっきりわかる表現としてください。

7. 選考基準

提出資料をもとに、これまでの業績に対する評価と共に、本人がどのように貢献し、力量を発揮したか、どのような姿勢や想いで取り組んだか。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望を総合的に評価します。

8. 提出期限 2026年3月31日（火）

9. 申込先 （一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31
OMM7F
TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaaj.or.jp

10. 提出方法 PDFデータで3月31日23時55分までに送信

11. 青年技術者選考委員会

委員長 三宗 知之／(株)東畑建築事務所本社オフィス大阪副代表
委員 駒井 陽次／(株)Style-A一級建築士事務所代表取締役
橋本 修／(株)昭和設計理事
水方 秀也／(株)竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）
安福 健祐／大阪大学D3センター教授
秋田 智／(株)安井建築設計事務所大阪事務所構造部部长
瀧野 敦夫／大阪工業大学工学部建築学科准教授
澤村 晋次／(株)日建設計エンジニアリング部門
設備設計グループ副代表
高橋 満博／清水建設(株)関西支店設備設計部部长
青木 康造／大成建設(株)関西支店建築部技術室長
湯浅 肇／(株)大林組大阪本店建築事業部生産技術部部长



撮影：五十嵐太郎

23



4



8

建築と社会

Architecture and Society
Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2026 01

Vol.107 No.1246

- 特集予告
- 2月号/第32回 会員特集「私の空間作法」
- 3月号/東海支部

ひと・まち・建築 gallery

12

468

構造
の頁

37

664

法令
コーナー

38



©東京建築祭

50



54

56

ご意見ご要望は
こちらから



2025年度 年間特集テーマ「未来」

特集 「EXPO2025は何を拓くのか」 —2025年大阪・関西万博を終えて 23

| | | |
|------|--|----|
| 総論 | 大阪・関西万博を振り返る●五十嵐太郎 | 24 |
| 各論 1 | 大阪・関西万博における脱炭素技術を振り返る●下田吉之 | 28 |
| 各論 2 | 大阪・関西万博の公共空間におけるユニバーサルデザインの実態—トイレ・休憩所・サインにみる“共に使う場”の状況— ●田中直人 | 30 |
| 各論 3 | 大屋根リング「一部残し+α」の提案●吉村英祐 | 34 |

年頭の言葉 2026年を迎えて●指田孝太郎 2

本年の抱負 常設委員会
●三宗知之、本田孝子、中尾勝悦、橋寺知子、中村文紀、寺岡宏治 3

project 神河町図書コミュニティ公園 桜空 4
ローム株式会社 本館 8

gallery 学校建築のアート●長尾須美子 12

大阪・関西万博の風景 2/3 13

会告 若き創造者たちへ「第73回青年技術者顕彰」のご案内 表2
CCCフォーラム主催 第11回 青年技術者交流会 第72回青年技術者顕彰者によるプレゼンテーションと座談会、会員の集いIN TOKYO<開催予告> 20
講習会委員会主催 2025年度 建築工事実務講習会 21
協会誌『建築と社会』掲載文における「著作権」についてのお知らせとお願い 22

構造の頁 グラングリーン大阪～ゲートランタン～●堀本明伸 37

法令コーナー サーキュラー・低炭素建材検索システム●海野玄陽 38

デザイン コンクール 第71回工高生デザインコンクール
設計課題/まちなかの「アートスペース」 41

建築と社会を 建築の楽しみ方●甲斐みのり 50
考える

「再読 関西の建築」は休載します

Member's Forum 活動報告：建築次世代委員会主催 第10回 学生のための現場見学会 株式会社村田製作所 守山イノベーションセンターPJT見学会 54
YODOYABASHI Station One見学会 56

第106集 2025年(令和7年)1月号～12月号 63
目次一覧

information クロード・モネ 風景への問いかけ/ソル・ルウィット
オープン・ストラクチャー/動き出す浮世絵展 OSAKA/
特別展「大原美術館所蔵 名画への旅 — 虎次郎の夢」 70

月間の動き 2025年11月 72

表紙及び特集扉 写真撮影・デザイン：吉村英祐

2026年を迎えて

一般社団法人 日本建築協会 会長 指田孝太郎



あけましておめでとうございます。
2026年の年頭にあたり、謹んで新年のごあいさつを申し上げます。
会員の皆さまには平素より当協会の活動にご理解とご協力を賜り、
心より感謝申し上げます。

さて、協会誌「建築と社会」の昨年の特集テーマは「未来」。「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとして開催された「2025大阪・関西万博」は、惜しまれつつ成功裏に閉幕しましたが、万博関連の記事も含めて様々な情報発信を行ってまいりました。委員会活動では、出版（協会誌「建築と社会」、協会企画による書籍）・事業（見学会、講演会、新入会員ガイダンス）・講習（施工計画実務講習会、仮設見積実務講習会）、顕彰（青年技術者顕彰、工高生デザインコンクール、片岡安賞）の分野で、意欲的な取り組みを進めることができました。また、「教育に資する団体正会員」制度のさらなる周知と勧誘、公式インスタグラムを活用した情報発信など、昨年度に種を播いた施策に継続して取り組みました。

会員の皆さまとの交流では、青年技術者交流会に続く、若手技術者フォーラムの創設・開催、恒例となった新入会員ガイダンス、各種見学会、及び、会員の集い IN TOKYO など、6月の定時総会後の交流会だけでなく、年間を通して、開かれた協会活動を積極的にアピールする機会を設け、いずれも好評を得てまいりました。京都・中国・東海各支部との連携はますます深まり、各支部主催のイベントにも参加することができました。京都支部の見学会、中国支部の講習会、東海支部の出版事業など、各支部それぞれで特色ある活動が行われていますが、今後、企画の相互乗り入れなどによる協働も進めていきたいと考えています。

そして、今後さらに活用を期待したいのは、協会本部オフィスの各種スペースです。大川が一望できる窓辺のワークスペースを、タッチダウンオフィスとして、あるいは相互交流のプラットフォームとして、常に会員の皆さまに役立つ「場」となるようにしたいと考えています。利便性向上のため、使用予定をスケジュール表にして公式インスタグラムで情報開示、随時更新しています。ぜひご活用いただきたいと思います。

さて、「建築と社会」2026年度の特集テーマは「再生」としました。これは「変化」「共創」「トランスフォーメーション」「未来」という歴年のテーマを後継し、1年後に控える協会創立110周年や、世に「皇寿」とされる111年目を見据え、協会の更なる発展の願いを込めた言葉でもあります。今年の干支「丙午（ひのえうま）」には、「勢いとエネルギーに満ち、活動的になる」という意味があるそうです。大正6（1917）年以来、109年間に及ぶ協会の歩みを、今一度、力強く躍動させる年にしたいと思います。

今年はスポーツイベントが目白押しで、3月には冬季オリンピック／パラリンピックとWBC（ワールドベースボールクラシック）、6月にはFIFAワールドカップ（サッカー）が開催されます。日本選手の活躍を期待するとともに、昭和100年、戦後80年、阪神大震災30年を経て、東日本大震災から15年を迎える今日、私たちはこれまでの歴史や経験の上に、未来を見据えて、様々な社会課題にどのように応え、建築や社会を「再生」していくことができるのか、共に考えていきましょう。

会員の皆さまの一層のご支援、ご協力をお願いし、年頭のごあいさつといたします。

以上

万博が遺した建築の在り方

編集企画委員長

三宗知之



2025年逆風の中始まった大阪・関西万博は気が付けば大盛況のうちに幕を閉じました。「建築と社会」誌では2023年より3年に渡って開催に向けた特集記事を1月号で掲載してきたことに加え、開催年となった昨年は特集テーマを「未来」とし、各分科会による特集のほか、projectページでのパビリオンの紹介、編集企画委員による現地レポート「EXPO column」、アーカイブとしての「大阪・関西万博の風景」などの記事を通じて、万博の様子

を伝え・遺すことを目的に会誌制作を行いました。

さて、2026年度の特集テーマは「再生」です。万博を終えた今、資材のリサイクルに限らず循環型社会と建築の在り方について広く考えていきたいと思います。編集企画委員会では多くの委員のみなさんが誌面の作成と魅力向上のため活動しています。会誌に関するご意見を頂くとともに、興味のある方は委員会活動にもぜひご参加ください。

交流が紡ぐ、新しい風景

事業委員長

本田孝子



事業委員会は、見学会や講演会を企画する情報見学小委員会と、会員同士の積極的な交流を目的としたCCCフォーラムの二つの小委員会を持ちます。

昨年は大阪・関西万博が建築界にも大きな刺激を与えました。CCCフォーラム主催の若手技術者フォーラムでは、パビリオン設計に携わった設計者たちが語る「消えゆく仮設建築に何を託すのか」、その葛藤と挑戦の言葉は、参加者に

深い印象を残しました。さらに、青年技術者交流会や施設見学会、イケフェスでの連携事業など、多彩な企画を実施しました。

2026年のテーマは「再生」です。交流は、知識や経験を再生し、新しい価値を生み出す原動力です。事業委員会は、世代を超えた対話をさらに深め、若手技術者の挑戦を支えながら、ともに未来を切り拓いていきます。皆さまの積極的な参加をお待ちしています。

サスティナブルな出版委員会

出版委員長

中尾勝悦



前期までの8年間事業委員長を務め、今期より任期2年を条件に出版委員長を受けました。出版委員会は1951年に発足し、この間167冊の出版物を企画し、セミナーを47回開催しています。年平均にすると2.2冊の発刊と0.6回の開催をしており、今も同様のペースで積極的に活動を続けています。昨年は『外装材の耐風設計・施工』に関する書籍の発刊に至り、『地盤』と『木造住宅』に関するセミナーを開催しました。しかしながら現在の委員数は9

名、平均年齢は60歳を超えており、この先10年を考えると、継続が危ぶまれます。そこで昨年の抱負にある『他の委員会活動との連携を強め、新しい著者の創出を図る』ため、各小委員会等の有志が集まっていただき座談会を行います。当協会の出版についての意見交換も行います。これまで以上に委員の増員も念頭にして活動してまいりますので、皆様の積極的な参加とご協力をお願いいたします。

手描きか?CAD/BIM/AIか?

教育委員長

橋寺知子



日本建築協会主催の工高生デザインコンクールは、昨年、手描きに限定していた規定を外し、PCを用いた表現が可能になりました。設計の現場で手描きは激減、建設現場でもタブレットを介したやり取りがあり、時代に応じた変更と見えますが、意外なことに、設計の現場にいらっしゃる審査員の方々から強い懸念が示されました。PCならではの造形は確かにありますが、頭は手に直結して、手描きによる新鮮なアイデアを大人は見たいと思

うのかもしれない。あらゆる所でAIが急速に導入され、人が考える場面はどれだけ残るだろうか、日頃接する大学生は自分で「決める」ことに慎重です。25年度の応募作は、手描きもあればPCで綿密に作図されたものもありましたが、道具の違いを超え、高校生の柔らかい発想に注目できてほっとしました。今年は日々進化する新しいツールと共存していきたいものです。

一層語らう一年に

未来創生プロジェクト委員長

中村文紀



35歳以下のメンバーで運営されるU35委員会は、トークイベントなどを行いながら、協会事務所リニューアル計画を担当し、見事に完成させました。実際、委員会活動や会員の相互交流の活性化に効果が表れ始めています。2040年の社会を考える2040委員会は、通常の委員会に加え、今年も協会の枠にとられない様々な分野の方々を交えたオープン委員会やメンバーによる万博視察会を実施し、思索を深めています。ものづくりの面白さを伝

える「建築次世代委員会」は、学生のための現場見学会を複数回開催し、さらに「今協会に求めるものは？」と題して現役学生との意見交換会を実施しました。

また、「建築と社会」誌の昨年のテーマが「未来」であったことで、当プロジェクトを構成する3委員会の初めての合同企画となる座談会が開催され、横断的な議論ができたことに意義深いものを感じました。

新テキストによる講習会の実施

講習会委員長

寺岡宏治



講習会委員会は昨年度より独立した委員会となり、7名の委員の方々より充実した講習会をめざし議論を重ねて参りました。本年も1月に建築工事を担う実務の講習会を2回に分けて開催します（施工計画と積算・仮設講習）。数年ぶりにテキストも刷新しており、新しい法令への対応や工法など盛込んでいます。また講習会では講師オリジナルのPP資料で補完も行い、さらに参加者の満足度を高め

てまいりたいと考えます。昨年12月には震度6強の青森県東方沖地震が発生し、広範囲で大きな被害が確認され改めて建物の安全性が問われることとなりました。異常気象や台風大型化などにも備え、施工関連の安心と安全をさらに高めていくことが求められています。今後も講習会参加者の期待に沿えるべく、委員一同知見を高めてまいります。

神河町図書コミュニティ公園 桜空

建築主 神河町
設計・監理 東畑建築事務所
施工 大鉄工業

多世代が集う「まちのリビング」

兵庫県中央にある雄大な山並みや観光資源に恵まれた神河町。

祭りや盛んな地域活動を支える交流の中心になる「はらっぱ」を中心にお茶を飲みながらゆっくり読書できる場所、静かに集中できる場所、子どもを見守る軒下空間など公園と建物に様々な居場所をつくることで、多世代が集う「まちのリビング」を目指しました。

[東畑建築事務所]

松森織江(まつもり おりえ)



1993年京都大学工学部建築学科卒業、1995年京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了、同年東畑建築事務所入社

大西広朗(おおにし ひろあき)



2003-04年L'universite Bordeaux III l'art et société actuelle 聴講生、2007年大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻修士課程修了、同年東畑建築事務所入社

森下春香(もりした はるか)



2013年武庫川女子大学大学院生活環境学研究科建築学専攻修士課程修了、同年東畑建築事務所入社

尾上果帆(おのうえ かほ)



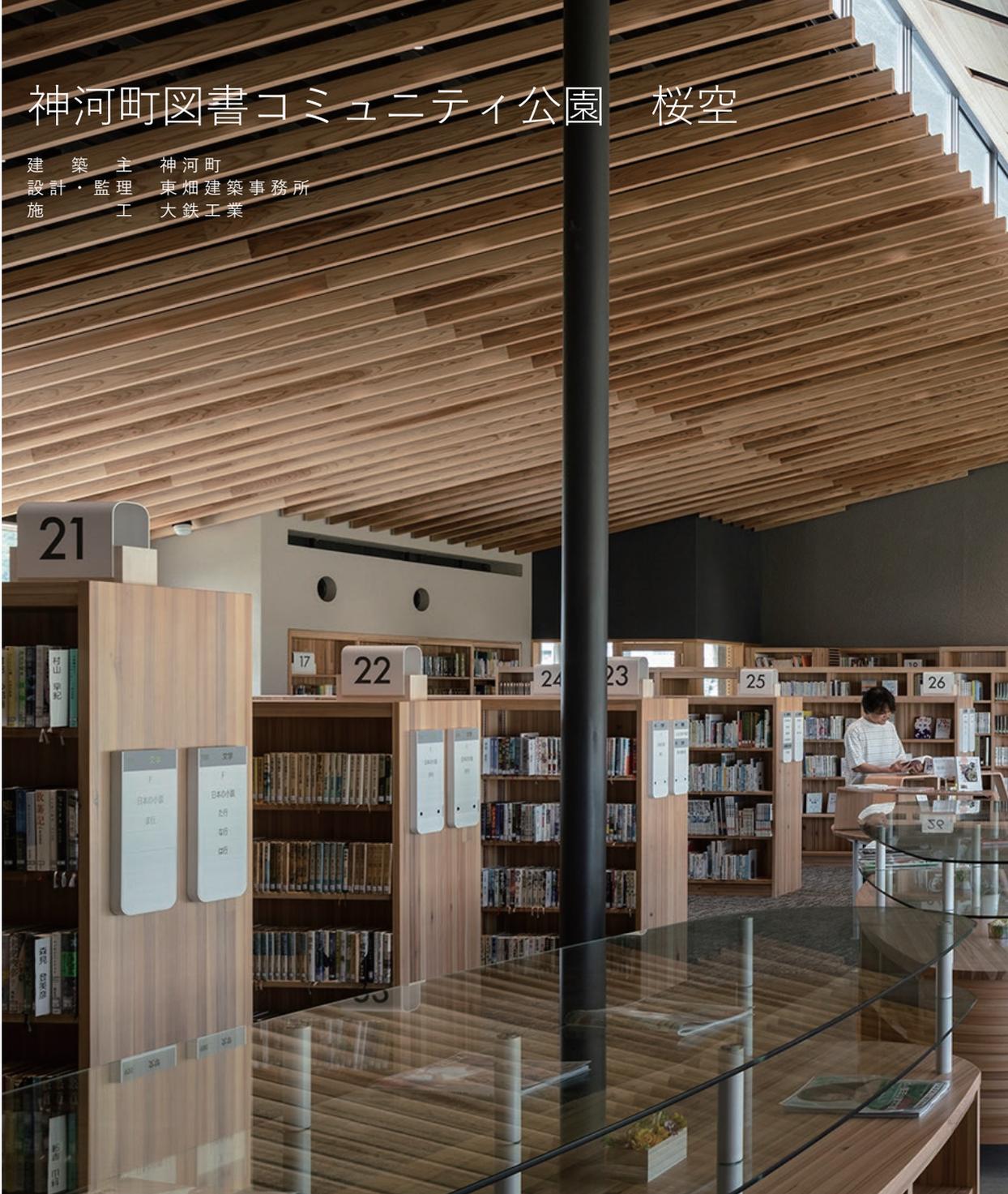
2021年武庫川女子大学大学院生活環境学研究科建築学専攻修士課程修了、同年東畑建築事務所入社

[大鉄工業]

川原一郎(かわはら いちろう)



1993年大阪工業大学短期大学部建築学科卒業、2006年大鉄工業入社 現在、同社名古屋支店 作業所長



雄大な山並み・歴史的なまち並み（日本遺産「銀の馬車道」）と調和するリズムカルな屋根



生野銀山と飾磨港を結ぶ日本遺産「銀の馬車道」が通るこのエリアは、街道村、宿場町として発展した歴史があり、かつての雰囲気伝える歴史的なまち並み景観を残しています。雄大な山並み、歴史的なまち並みと調和するように、建物を分節し、軒高を抑え、勾配屋根の重なりで深い陰影を創出しました。南側には深い軒庇を設け、はらっぱと一体的に利用できる「えんがわ」を形成しています。天気に左右されず、ミニライブやワークショップの開催や、はらっぱのイベントを眺める観客席としてなど、多目的に利用できる計画とし、まちの活動が公園と一体的に行える計画としています。



互い違いの屋根が生み出す「えんがわ」



神戸町産材に包まれたぬくもりのある光



建物を貫く「本のみち」から、「えんがわ」と「はらっぱ」を見る。床には「銀の馬車道」をイメージした真鍮の鞆が打ち込まれている。



本を手に取りやすい多様な座席

町産材に包まれたぬくもりのある空間

市場に流通している地域産材は兵庫県産材に限られていましたが、森林組合や木材調達業者に協力を仰ぎ、神戸町で伐採された木材を選別してもらうことで、内装の全ての木部を神戸町産材で統一しました。スギ製材を天井ルーバー・天井板張・鎧張壁・内部木製建具に、スギ集成材と練付材を書架・家具に活用しています。少し赤みのある町の杉が引き立つよう、取合う壁や床の素材にはニュアンスのある落ち着いた色合いを選定し、町民に安らぎと心地よさをもたらす、素朴で温かみのある交流空間を実現しています。

(東畑建築事務所)



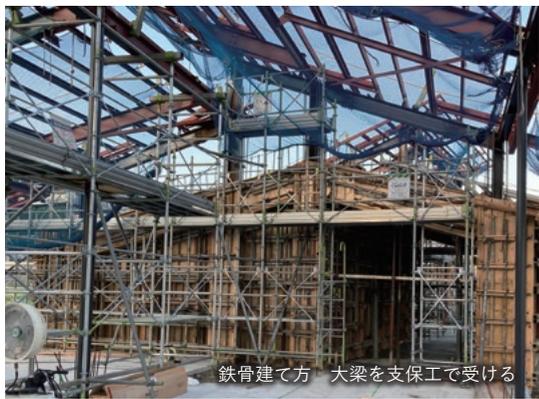
町民の想いをかたちに

ユーザーである町民の皆さんに親しまれる公園・居場所づくりを行うため、地域活動者や子育て世代とのワークショップ、学校・病院・図書関係者へのヒアリング、中高生や町民アンケートを行いました。この場所でどんな過ごし方をしたいか、これからここで何をしてみたいか、大切にしたいことは何かなど、町民の想いを取り入れた神戸町ならではのコミュニティの場となるように、「まちのリビング」というコンセプトを立て、一緒に考え進めました。ウォーキングコースやキッチンカースペース、くつろぎコーナーやえんがわ、町民の想いを、公園全体に散りばめています。

(東畑建築事務所)



子育てWS



鉄骨建て方 大梁を支保工で受ける

複雑な形状の混合造

本プロジェクトは、各スパンが扇形の形状をしたRC造・S造・SRC造の混構造となっており、取り合い部分が複雑でした。その為、限られた工期のなか工事が円滑に進むよう施工計画を行いました。

①躯体構築において、初めに鉄骨建て方を行います。構造上本締めが完了しても鉄骨が安定しない為、RC部分が完了するまで建ち直しワイヤーが撤去できません。RC施工時の施工性・安全性を担保するため、S造部分の大梁を支保工で受け、ワイヤーを取り外し、RC部分構築後の強度確認を完了したのち、支保工を解体する計画としました。

②次に工事ステップを作成し、鉄骨建て方順序、RC部の構築順序等を決めて施工にあたりました。

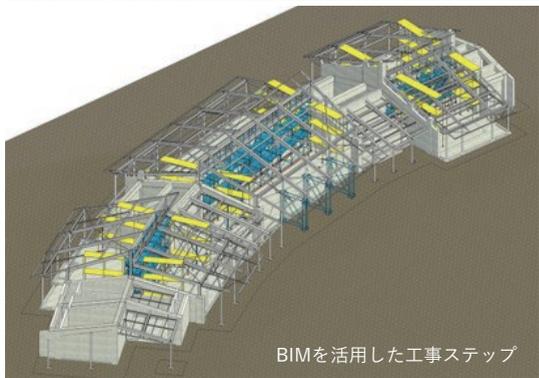
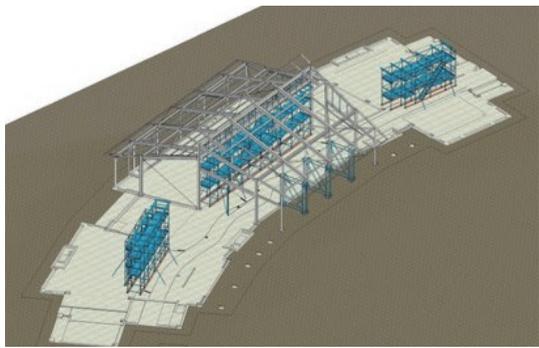
BIMを活用した複雑な屋根納まり

建物が扇型の形状をしている為、屋根部分も複雑な形状となっています。設計図では表れてこない箇所が多数あったことから、BIMを活用し屋根及び天井部分の納まりを検討しました。3D図面を使用することにより屋根、天井及び鉄骨の納まりを検討し、確実な施工へとつなげました。

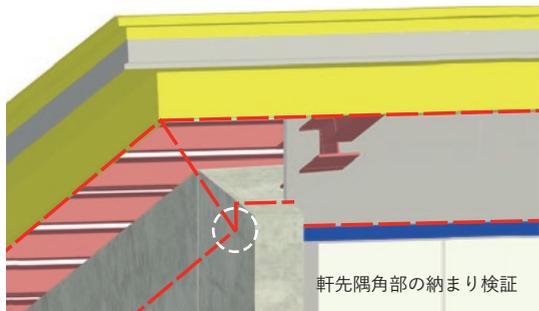
神河町らしい浮造り仕上げ

エントランスに面する壁は神河町らしさを出すため、神河町産材の杉板を用いた浮造り仕上げとなっています。施工にあたりモックアップを作成して仕上がり状態を確認しました。杉板は乾燥によるソリや湿気を含んだ時の膨張があるため、施工をする際の検討を行い、実際の施工では杉板ジョイント部に3mmのクリアランスを確保して型枠を組みました。また夏場のコンクリート打設であったため、型枠完了後に杉板が乾燥しないようコンクリート打設直前まで常時散水を行い、コールドジョイントが出来ないように慎重に施工を行いました。神河町らしさが出た非常に味のある浮造り仕上げを実現しています。

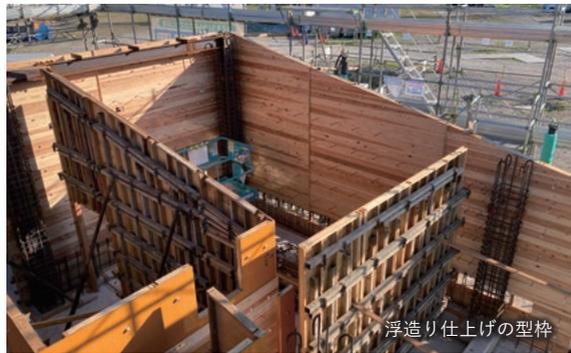
(大鉄工業)



BIMを活用した工事ステップ



軒先隅角部の納まり検証



浮造り仕上げの型枠



神河町産杉板浮造り仕上げのエントランス



西側鳥瞰



南東側夜景

内部の賑わいや灯りが公園を照らし、地域へとしみ出していく

| | |
|------|--------------------------------|
| 所在地 | 兵庫県神崎郡神河町栗賀町561番地 |
| 敷地面積 | 18,660.88㎡ |
| 建築面積 | 1,040.31㎡ |
| 延床面積 | 841.65㎡ |
| 構造 | 鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造および鉄筋コンクリート造 |
| 規模 | 地上1階 |
| 工期 | 2022年6月～2023年3月 |
| 撮影 | 山内紀人 |

ひと・まち・建築

project

ローム株式会社 本館

建築主 ローム株式会社
設計・監理 清水建設株式会社
施工 清水建設株式会社

街とともに ロームらしく

本計画は、ローム株式会社本館の増築計画です。エントランスを含む空間の再構築を通じて、京都らしさとロームらしさを建築的に融合させることを目指しました。

設計思想の基盤には、京都の伝統的な美意識である陰翳や繊細さを据えました。これらは古来より京都の町家や社寺建築に息づく価値観であり、光と影が織りなす奥行きや、細部に宿る品格を感じさせる空間を追求しました。

京都が育んできた深遠な美意識を現代的に解釈し、品質第一を掲げるロームの企業理念を建築に融合させ、新たな企業像を具現化しました。単なる機能的な増築に留まらず、地域社会との共生、自然環境との調和、企業の理念を体現する象徴的な空間を創出しました。

[清水建設]

藤原 寛(ふじわら ひろし)



2006年日本工科大学卒業、同年清水建設入社。
現在、同社関西支店建築設計2部グループ長。

安田諭史(やすだ さとし)

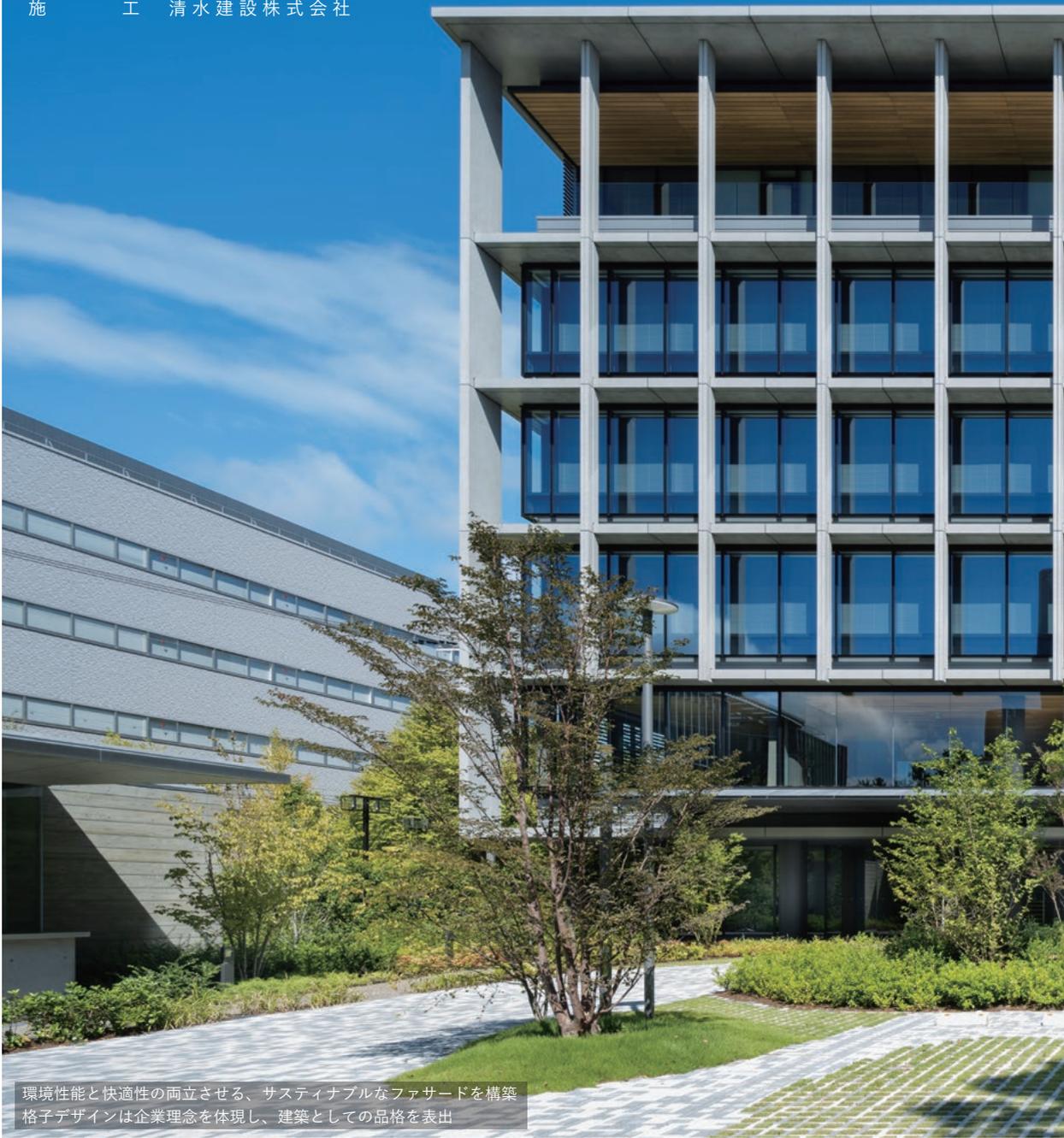


2016年神戸大学大学院工学研究科修士課程修了、同年清水建設入社。
現在、同社関西支店建築設計2部。

山本秀樹(やまもと ひでき)



1989年京都建築専門学校卒業、同年清水建設入社。
現在、同社関西支店京都営業所。



環境性能と快適性の両立させる、サステナブルなファサードを構築
格子デザインは企業理念を体現し、建築としての品格を表出



人と緑を育み、地域とともにある「森の中の工場」の活動を伸展
企業が地域社会と共存するランドスケープ



| | | | |
|------|---------------------------|----|-----------------|
| 所在地 | 京都府京都市右京区 | 構造 | 鉄骨造 |
| 敷地面積 | 11,821.11㎡ | 規模 | 地上6階 |
| 建築面積 | 813.57㎡ (全体 7,784.37㎡) | 工期 | 2022年4月～2024年8月 |
| 延床面積 | 3,721.02㎡ (全体 35,003.47㎡) | 撮影 | 吉田 誠 |

■環境性能と快適性を両立するサステナブルなファサードを構築

外観デザインは、環境性能と快適性の両立を目指し、サステナブルなファサードとして構築しました。京都の都市構造を特徴づけるグリッドや、京町家に見られる格子の意匠を取り入れ、京都の伝統的な美意識を建築に反映しました。水平と垂直の要素が織りなす格子と緊張感のある格子デザインは、ロームの品質第一という企業理念を体現し、建築としての品格を表出しています。また、ファサードを構成するGRCパネルの縦方向の要素とPC版の横方向の要素が織りなす格子は、日射を効果的に遮蔽しつつ、眺望の確保を両立しています。加えて自然通風を活用できる外装サッシを採用し、中間期はエネルギー消費を抑えながらも快適な室内環境を確保できる計画としています。

各種省エネルギー技術の導入によりZEB Ready及びCASBEE Sランクの達成を実現し、持続可能な社会への貢献を明確に示しています。オフィスフロアからは、ロームが「森の中の工場」として整備してきた外構緑化を借景として楽しむことができ、働く人々に豊かな自然との繋がりを提供しました。



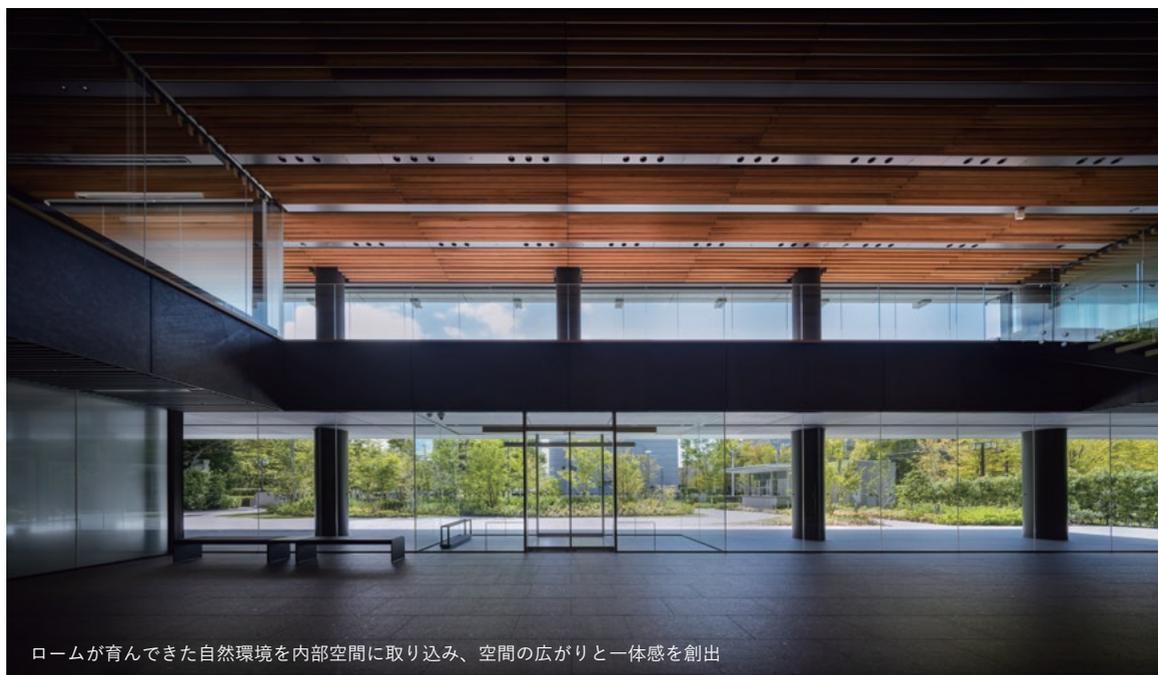


国内外の訪問者を迎え入れる共創の出会いの場とし、最上級のホスピタリティを追求
木や石の表情には手仕事の痕跡を感じさせる加工を施し、企業のものづくりを通じた文化貢献の姿勢を表現

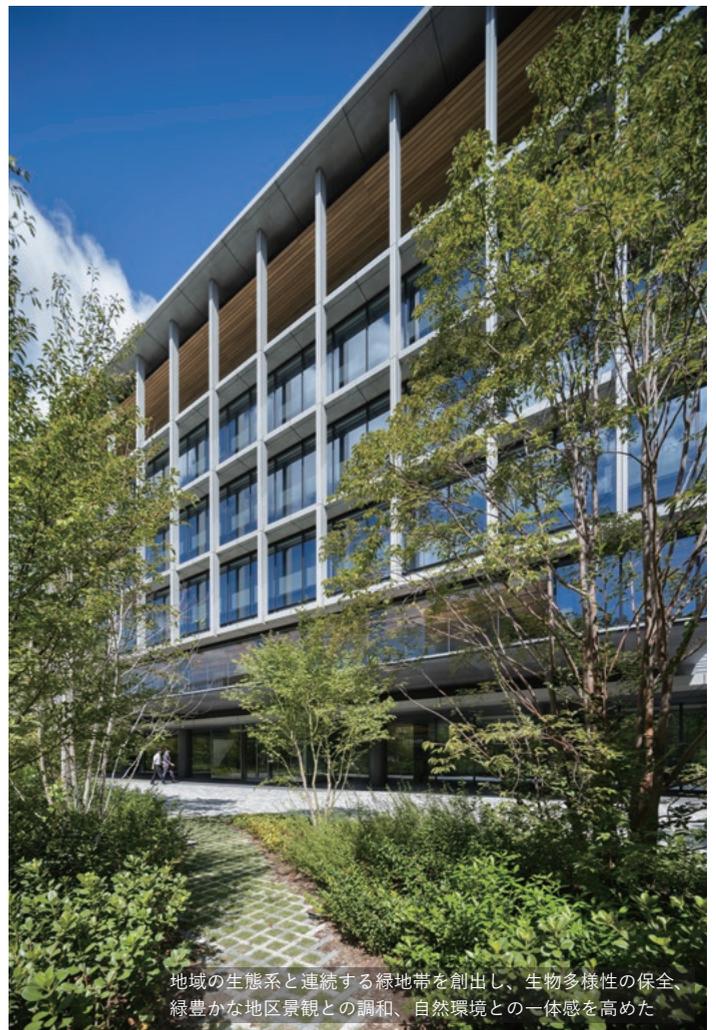
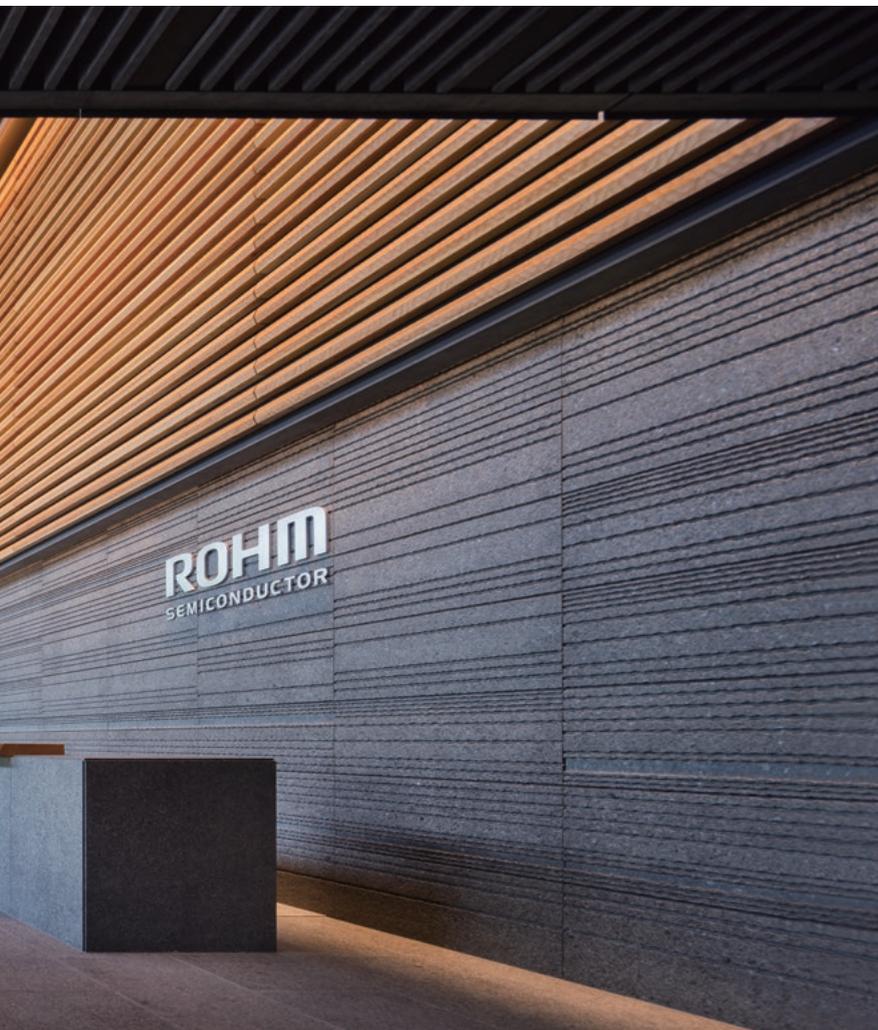
■ものづくりの企業姿勢を細部に映す「共創の出会いの場」を創出

エントランスホールは、国内外の訪問者を迎え入れる共創の出会いの場としてホスピタリティを追求しました。吹抜空間に連続的に配された木材と石材は、外部からの自然光を受け、素材の持つ豊かな表情と陰翳を映し出し、空間に奥行きと、厳かなながらも深い安らぎをもたらしています。木や石の表情には手仕事の痕跡を感じさせる加工を施し、素材の持つ温もりと人間の技の融合を体現しました。これは、ロームのものづくりを通じた文化貢献の姿勢を示しています。

外部側のガラスは枠の無い上下二辺支持とし、ロームが育んできた地域の自然環境を内部空間に取り込み、空間の広がり一体感を創出しています。エントランスホールの照明は、シーン設定に加え、内外の色温度にグラデーションを施し、人工照明から自然光への変化をシームレスにし、空間全体に調和と奥行きを与えています。この空間は、来館者をお出迎えする受付機能を超え、企業の理念と姿勢を体現する象徴的な空間となることを目指しました。



ロームが育んできた自然環境を内部空間に取り込み、空間の広がり一体感を創出



地域の生態系と連続する緑地帯を創出し、生物多様性の保全、緑豊かな地区景観との調和、自然環境との一体感を高めた

■緑豊かな地区景観との連携を図る「森の中の工場」の活動を伸展

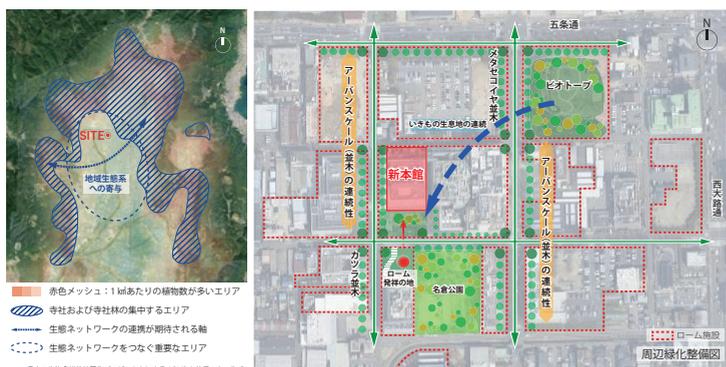
外構計画は、ロームが長年推進してきた「森の中の工場」のコンセプトを継承し、本館周辺の緑化整備を伸展させました。淀川水系の東縁に位置する京都盆地は、琵琶湖を水源とする宇治川をはじめ、桂川や木津川などの諸河川が周辺の山系から流れ込む沖積低地であり、豊かな水と緑に恵まれた地形が特徴的です。この地において、古代の人々は進取の気風を持ち、四季を愛でる文化を成熟させてきました。一方で、桂川を中心とした内陸部では都市化による生態系ネットワークの分断という社会課題を抱えており、本計画ではこの現状に着目しました。

地域の生態系と連続する緑地帯を創出し、生物多様性の保全、緑豊かな地区景観との調和、自然環境との一体感を高めました。この緑地は、街から本館へと来館者を導く視覚的な動線として、企業の顔としての存在感を強調しています。人と緑を育み、地域とともにある「森の中の工場」の活動を伸展させ、企業が地域社会と共存するランドスケープを実現しました。これは企業が地域環境の持続可能性に積極的に貢献する姿勢を示すものであり、敷地内の緑化を超え、広域的な生態系に配慮しました。

(藤原 寛・安田諭史／清水建設)



敷地内の緑地は、企業が地域環境の持続可能性に積極的に貢献する姿勢を示す



5m跳ね出しの大庇が来館者を迎えるアプローチ空間

学校建築のアート

[アートプロデューサー]
長尾 須美子

様々な分野の建築空間に応じて、建築主や設計者とのヒアリングを重ね、アートのコンセプト立案からアーティストの選定、プレゼンテーション、制作管理と監修、建築空間への設置、必要に応じてメンテナンスまで一貫して業務を執り行うアートプロデュースの仕事をしています。

近年、国内では学校建築の老朽化による建替えや統合、小中一貫校の新設等が進み、担当する学校建築の案件が増加しました。学校建築は、自身も以前から強い関心を持ち、是非、携わりたいという思いが募っていた分野です。「新しい時代の学びを実現する」学校建築において、アートを計画する際に心掛けているのは、学校全体を《学びの場》と捉え、児童生徒の心理に配慮しながら、教育的効果を支える空間創りを考えることです。また、学校建築とは、児童生徒だけでなく、教職員や地域住民にとっても重要な場所であることを意識しています。教職員にとっては、長時間の教育活動を行う働く場であり、地域住民にとっては地域コミュニティの核として、防災拠点や文化・交流活動の場として機能する等、多様な人々が集う公共空間となっています。多様な利用者に寄り添うアートのあり方を模索し続けながら、日々の業務に向き合っています。

長尾須美子 (ながお すみこ)

株式会社アートココ
アートプロデューサー
学芸員資格

大阪芸術大学芸術学部卒業
大阪教育大学大学院教育学研究科修士課程修了

主な担当実績

2024：多可町生涯学習まちづくりプラザあすみる/レ・ジェイド金山グランデ
2023：愛知学院大学歯学部臨床研究棟パークホームズ堺町松原 2022：小牧市立小牧南小学校/南あわじ市斎苑桜花の郷 2021：吉野さくら学園/グランレ・ジェイド白壁月露ノ邸、凜然ノ邸2020：瀬戸市立にじの丘学園/島田市民病院 等

HP： <https://artcoco.co.jp/>



「小牧山ステップ」

吹抜けの1階と2階の図書エリアに小牧山で採集した様々な植物を封入した複数のアクリルオブジェを設置



小牧市立小牧南小学校のアート



小牧山の生態に詳しい小牧市在住で元理科教諭の自然観察指導員と共に、鳥の声や虫の羽音を聞きながら、様々な植物を採集した



コロナ禍の為、小牧山で秋の実りを採集するワークショップは実施されなかったが、有志の児童とその保護者達により、小牧山の松球や団栗等沢山の植物が集められた



どの方向から見ても楽しめるアクリルオブジェの形状をアーティストが考案



アクリルオブジェが3年生の理科の授業に活用

授業で描かれたスケッチ画から、児童が小牧山を散策するように様々な植物を探し出し、よく観察して描いていることがわかる

守口市立守口小学校のシンボルアートとワークショップ



『こっちの葉っぱは丸い!』『こっちの葉っぱは細長い!』

仲間と協働する楽しさや発見する楽しさを体験してもらいながら「新しい学校づくり」への参加意識を育むことをワークショップの目的の一つに



ユーカリの葉をよく見て、触って、匂って、比べて…教科枠にとらわれない「総合的な学習の時間」でワークショップを実施



アーティストはユニークで面白い!

肩を組むアーティストと児童
教室は笑顔であふれていた

令和8年竣工予定の新校舎に、改築に伴い伐採された旧校舎の思い出深いユーカリの樹を題材としたシンボルアートを計画し、卒業を控える高学年の児童達とアーティスト及び工事関係者によるワークショップを開催

アーティストの指導の元、児童達は校庭でシンボルアートの材料となるユーカリの葉を採集し、スケッチ画を作成スケッチ画はアーティストがシンボルアートのモチーフとして表現



児童それぞれの個性で色とりどりに、自由に!

大阪・関西万博の風景



Pavilions

コネクティングゾーン
静けさの森ゾーン
セービングゾーン
シグネチャーゾーン



静けさの森



Better Co-Being



いのちの未来



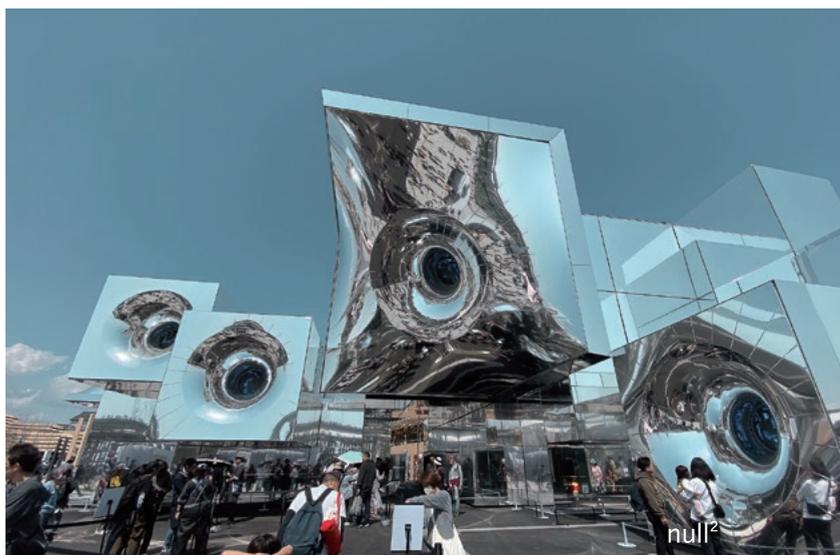
Dialogue Theater -いのちのあかし-



EARTH MART



いのちの遊び場 クラゲ館



null²



いのちめぐる冒険



いのち動的平衡館



アンゴラ館



英国館



ルーマニア館



ポーランド館



ハンガリー館



オマーン館





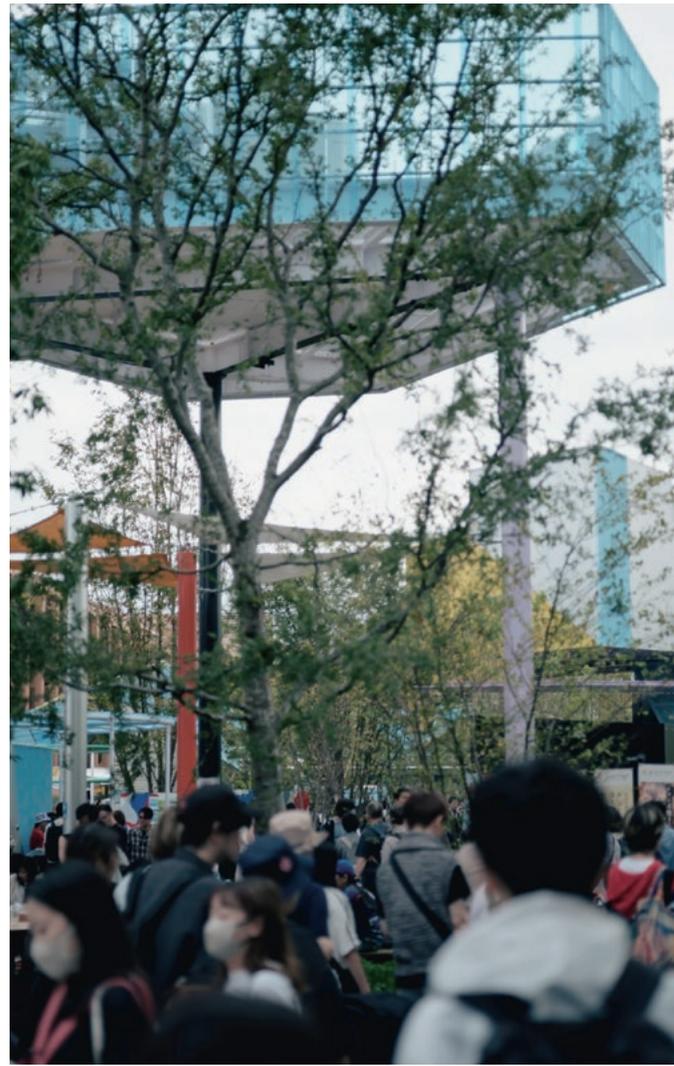


韓国館



ドイツ館





CCCフォーラム(※1) 主催 第11回 青年技術者交流会 第72回青年技術者 顕彰者によるプレ ゼンテーションと 座談会

日時
2026年1月30日(金)
18:30~20:30(予定)

この催しは建築CPD情報提供制度
認定プログラム申請予定です。
建築関連CPD 2単位



お申込みはこちら

【概要】
第72回青年技術者顕彰者(※2)の有志を募り、プレゼンテーションを行います。プレゼンテーション後は、青年技術者の相互交流を目的とした座談会を開催します。本企画を通じて、青年技術者、日本建築協会会員の交流を促し、情報共有、意見交換を継続して行うことで「建築を通じ広く社会に貢献する」技術者を育てます。リアル(会場)参加およびwebでの参加者を募集しておりますので、皆様のご応募をお待ちしております。

会場までのアクセス



JR大阪駅2階からデッキでグランフロント南館2階に入館、タワーA2階オフィスエントランスよりシャトルEVに搭乗、9階スカイロビーにてオフィス用EVに乗り換え、21階までお越しください。EVホールに設置した案内板矢印方向の突当りが会場になります。

会場 Open Innovation Biotope "bee"
(大阪市北区大深町4-20 グランフロント大阪タワーA21階 (株)オカムラ 関西支社内)

発表者 粉川壮一郎
(株)安井建築設計事務所/設計・計画
武内大輝
(株)東畑建築事務所/構造
成瀬壮太
(株)大建設/設計・計画
桜本佳季
(株)大林組/施工

司会 片岡政規 (株)安井建築設計事務所
井上沙紀 (株)オカムラ

参加費 無料

定員 会場:20名(先着順)
web:20名

【問合せ先】
(一社)日本建築協会(担当 中内)
TEL 06-6946-6981
E-mail jigyoka@aaj.or.jp

※1:CCC(Communication Connection Collaborationフォーラム)会員同士の交流を積極的に企画する小委員会として2023年度、事業委員会に新設。
※2:青年技術者顕彰とは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着している顕彰制度です。第72回青年技術者顕彰者の方は「建築と社会」2025年7月号や、ホームページ(https://www.aaj.or.jp/project/award/youth72_decision.html)に掲載中。

会員の集い IN TOKYO 〈開催予告〉

日時
2026年2月27日(金)
18:00~20:30(予定)

【開催のご案内】
第3回となる「会員の集い IN TOKYO」の開催が決定いたしました。今回はゲストをお招きしての講演会と、会員相互の親睦を深める懇親会を予定しております。先ずは先行して、日時と会場をご案内いたします。皆様お誘い合わせの上、ぜひご参加ください。詳細が決まり次第、当協会ホームページにてご案内いたします。

会場 株式会社オカムラ ガーデンコート ショールーム内
オカムラ Open Innovation Biotope "Sea"
(東京都千代田区紀尾井町4-1 ニューオータニガーデンコート3階)

問合せ・申込先
一般社団法人日本建築協会
(担当:中内)
TEL:06-6946-6981
FAX:06-6946-6984
E-mail:jigyoka@aaj.or.jp



会員の集い IN TOKYO2024 の様子

講習会委員会 主催

2025年度 建築工事实務講習会

—第一線で活躍するプロに学ぶ実践スキル—

科目1【施工計画】

日時：

2026年1月20日(火)

9:00~17:00

受付 8:45~

お申し込みはこちら



科目2【積算・仮設見積】

日時：

2026年1月27日(火)

13:30~17:00

受付 13:15~

お申し込みはこちら



この講習会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラム申請中。

【2025年度版・内容大幅拡充】

第一線で活躍する講師陣、増補改訂された最新テキスト

「施工計画」「仮設見積」の知識をアップデート&インプット!

毎年ご好評をいただいている建築工事实務講習会を、本年度は内容を大幅に拡充して開催します!

若手技術者の皆様からのご要望にお応えし、テキストは法令改正などの最新情報に加え、実務に役立つ知識を新たに追加した「増補改訂版」としてご用意。講義内容も基本からじっくり学べるようボリュームアップしました。

建設業界はもちろん、官公庁や設計事務所でスキルアップを目指す皆様に最適な講座です。講義スライドのデータも配布しますので、受講後の復習も万全です。この機会にぜひご参加ください。

※発熱・咳等の症状が見られる場合には、受講をご遠慮ください。



◎アクセス

- ・地下鉄四つ橋線・中央線本町駅23号出口 徒歩約5分
- ・地下鉄千日前線・中央線 阿波座駅2号出口 徒歩約5分
- ・地下鉄長堀鶴見緑地線 西大橋駅1号出口 徒歩約5分

開催概要

科目1：【施工計画】

—品質・安全・経済性を両立する計画の要点を学ぶ—

施工計画は、品質を確保し、安全かつ経済的に工事を進めるための鍵です。本講座では、仮設から地下、躯体、仕上、設備に至るまで、適切な施工計画の要点を分かりやすく解説します。

日時：2026年1月20日(火)

9:00~17:00 (受付8:45~)

講師：浦瀬 誠 氏

(株)竹中工務店大阪本店

技術部企画管理グループ

リーダー

講師：伊藤 維俊 氏

清水建設(株)関西支店

生産推進部上席エンジニア

受講料：16,000円 (テキスト代 税込)

科目2：【積算・仮設見積】

—合理的で迅速な見積手法を身につける—

把握が難しく、つい単位面積や、請負金比率のみで処理されがちな仮設工事費。施工計画に基づいた合理的かつ迅速な見積手法を解説します。

講師：鄭 泰允 氏

(株)大林組大阪本店

建築事業部生産技術部

専門技術課 課長

日時：2026年1月27日(火)

13:30~17:00 (受付13:15~)

受講料：8,000円 (テキスト代 税込)

共通事項・お申込み

会場：建設交流館 702会議室

大阪市西区立売堀2-1-2

TEL：06-6543-2551

定員：80名

資料：テキスト、PPT資料は当日配布

お申込み方法

公式ホームページ、E-mail、FAXのいずれかでお申し込みください。お申し込みの際は、以下の①~⑧の項目を必ずご明記ください。

- ①催し名「実務講習会」科目を明記
- ②受講者氏名 (年齢)
- ③事業所名
- ④受講票送付先住所
- ⑤担当責任者
- ⑥E-mailアドレス
- ⑦電話番号
- ⑧CPD単位申請希望者はCPD登録番号を明記

お支払いについて

1. お申し込み受付後、当協会よりお支払いに関するご案内をメールでお送りします。
 2. 内容をご確認の上、指定の銀行口座へ受講料をお振り込みください。
 3. ご入金のご確認が取れ次第、「参加証」をE-mailにてお送りします。
- ※振込手数料はご負担くださいますようお願いいたします。

■申込先

(一社)日本建築協会 (担当：中内)

TEL：06-6946-6981/

FAX：06-6946-6984

E-mail：jigyoka@aaaj.or.jp、

https://www.aaaj.or.jp

協会誌『建築と社会』掲載文における「著作権」についてのお知らせとお願い

一般社団法人日本建築協会（以下「本会」という）では、「著作権」に関して、協会誌「建築と社会」2018年6月号において『掲載された論文・記事の著作権を著者から本会に譲渡願うこと』とお願いをさせて頂きましたが、時代背景も変わってきたことから、著作権について、新たに以下の様に規定いたします。

1. 著作権について

- 本誌に掲載された個々の論文・記事・図面・写真等の著作物の著作権は、各執筆者、制作者である著作者に帰属するものとします。
- 協会誌「建築と社会」、協会WEBサイトにおける編集著作権は、発行者、制作者である本会に帰属するものとします。

2. 著作者人格権について

- 著作物について、円滑な編集・公開のために、誤字脱字の修正や見出しの変更など、本会が必要と認める範囲で手直しをさせて頂いていただく可能性があるため、本誌にご投稿いただくことで、同一性保持権を行使されないことにご同意いただいたものとします。なお本会は、著作者の名誉を損なうことのないよう十分に留意いたします。

3. 著作者の責任

- 著作者は、著作物が第三者の著作権・肖像権・その他の権利を侵害しないことを保証するものとします。
- 著作物に関して第三者から権利侵害等の申し立てがあった場合は、著作者ご自身の責任において解決いただくものとします。

4. 本会への利用許諾

著作者は、本誌にご投稿いただくことで、ご自身の著作物について、本会が以下の目的で利用することを非独占的に許諾していただくものとします。

- 協会誌「建築と社会」での掲載（複製）、及び頒布
- 本会ウェブサイト等での公衆送信（会員限定公開を含む）
- 本会が協会誌「建築と社会」掲載記事を記念誌等で転載再利用すること（データを再編集し転載することを含む）
- 第三者から本誌掲載著作物について利用申請があった場合、本会がその利用を許諾すること

5. 著作者ご自身の利用について

本会に利用を許諾いただいた後も、著作者ご本人の権利として、ご自身の著作物を、ご自身の論文集への再録・ウェブサイトでの公開・研究・教育活動などで自由に利用することを、何ら妨げるものではありません。

6. 過去にご寄稿いただいた著作物について

過去に本誌にご寄稿いただいた著作物についても、上記趣旨をご理解いただき、ご同意頂いたものとして、取り扱わせていただきます。ご不明点がある場合は、2026年3月末日までに下記の本会事務局までお申し出ください。

【問い合わせ先】

一般社団法人 日本建築協会
担当：柏原
TEL：06-6946-6981
E-mail：kyoku-tyo@aaj.or.jp

大阪・関西万博を振り返る

東北大学 大学院工学研究科・工学部 教授 五十嵐太郎

■大阪万博の成功と愛・地球博の迷走

先日、NHKの「映像の世紀 バタフライエフェクト」の高度経済成長の回を見ていたら、そのピークとして1970年の大阪万博をとりあげ、「国中を沸かせたこんな大きな共通の体験は、戦争以外にはないと言った人がある」というナレーションが流れていた。実際、このとき6400万人を超える来場者が訪れ、2010年の上海万博に抜かれるまでは史上最多を記録している。また日本の歴史を振り返っても、紀元2600年を祝うべく、1940年に東京で万博とオリンピックを開催する予定だったが、日中戦争が激しくなったことを受け、キャンセルとなっていたから、30年後ようやく実現した念願のイベントだった。77ヶ国が参加し、おそらく本格的に日本が国際社会に復帰したことを実感する機会にもなっただろう。



大阪万博1970の会場模型

なるほど、戦争も万博も国家と国家のあいだに起きる出来事であり、前者は争い、後者は友好という真逆の関係性をもつ。1970年の大阪万博は国家的なイベントであり、1964年の東京オリンピックに続き、丹下健三が重要な役割を果たした。彼は日本人の記憶に残る風景をつくり、これで名実ともに国民的な建築家になったのである。また前川國男から若手のメタボリズムまで、多くの建築家がユニークなパビリオンを手がけたり、空気膜構造が登場するなど、実験的なデザインが目目された。言うまでもなく、1851年のロンドン万博のクリスタルパレスや1889年のパリ万博のエッフェル塔など、そもそも万博は当初から、新しい建築の可能性を提示する機会を与えるイベントだった。

だが、2005年の愛・地球博は、準備段階から迷走し、これなら大阪万博と同じ会場を再現した方がよいのでは、とまで言われた。当初、メイン会場となる予定だった瀬戸市の海上の森は、自然保護の対象な



愛・地球博のグローバル・ループ

るオオタカの巣が発見されたことで、変更が余儀なくされ、青少年公園になっている。その結果、従来のパビリオンとは違うタイプの会場を構想していた隈研吾、竹山実、團紀彦が外された。また青少年公園における外国館は、すべて箱型のユニットを使うモジュール式となり、建築としては、それに看板的なデザインを加えるくらいしかできなくなった。つまり、本来は万博の花形となる外国館のヴォリュームは、すべてがただの箱となり、何ユニットを利用するかというサイズの違いだけだった。

そして紆余曲折を経て、総合プロデューサーは菊竹清訓が着任し、グローバル・ループを設計したが、大阪万博のときに頭角をあらわしたメタボリズムの建築家が、35年後に再起用というのは、新しい世代が登場していないと思われても仕方ない人選だろう。全体として建築的に見るべきものは少なくなり、当時、オープンしたばかりの金沢21世紀美術館に足を運んでも、愛・地球博はスルーした建築の関係者が多かったのをよく覚えている。

中沢新一による「自然の叡智」という基本テーマのコンセプトは悪くなかったが、1970年の大阪万博と比べると、もはや国民的なイベントではなかった。ただし、地元のリピーターは多く、地方博としては成功だったかもしれない。80年代以降、地方博ブームは続いていたが、90年代後半にはもう終わっていた。ともあれ、万博は経産省が目標人数を設定し、それを越えれば、成功ということになるので、もともと1500万人という低いハードルを設定したことによって、結果的に「成功」とされた。ちなみに、当時、筆者は愛・地球博は失敗することに失敗したと論じた。きちんと失敗していれば、21世紀においてもう歴史的な使命がなくなりかけている万博を日本で行うことはなくなるが、延命されることになったという意味である。

■ SNSの洗礼を浴びた関西万博

高度経済成長期の夢よ、もう一度ということで、企画されたのが、2025年の関西万博である。またインフラを整備することにより、大阪で滞っていた夢洲の開発に弾みをつけて、統合型リゾートにつなげる目論みもあっただろう。もちろん、万博と都市開発は、密接な関係をもっていた。例えば、パリは19世紀後半から20世紀前半にかけて、万博を繰り返し、グランパレやオルセー駅（現在は美術館）など、セーヌ川沿いに様々なレガシーを残している。ところで、近年、リサイクルやリユースが叫ばれるが、究極のサステナブルは、100年たっても使い続けることができる都市の名所を生み出すことではないかと思う。

また今年の2月、ドバイ万博の跡地を訪問したら、想像以上に多くの建築が残っており、このエリアは新都心として開発される予定だった。さて、関西万博の招致段階では、NOIZによるボロノイ図をもとにした会場計画だったが、最終的には藤本壮介が会場デザインプロデューサーになっている。変更の背景について筆者は知らないが、中心にモニュメントを置かないというコンセプトは、静けさの森によって継承された。一方で円形の大屋根リングは圧倒的なわかりやすさをもたらしている。



ボロノイ分割による関西万博誘致案

だが、巨大な木造構築物は、約350億円の建設費がかかることで批判された。思い出されるのは、メディアの激しいバッシングを受けて、ザハ・ハジドの新国立競技場のコンペ最優秀賞案が、あとは着工を待っただけの段階まで、デザインが終わっていたのに、政治的な判断によって白紙撤回になったことである。守秘義務によって設計側からは反論がなく、キャンセル後に初めてネット上に詳細な設計意図が公開されたのは残念だった。今回も万博協会が、なにを出しても叩かれるから、建築家たちに情報発信することを禁じていたらしい。

しかし、ある時期から藤本や2億円トイレで有名になった米澤隆らは、SNS上で説明をすることに踏み切った。ちなみに、建築に限らず、万博協会は事前あまり情報を出さなかったため、メディアは叩くネタしかなかったと指摘されている。2027年に開催される横浜の国際園芸博も、あと1年半を切っているにもかかわらず、ほとんど情報がない。が、隠せば、隠すほど、憶測を生み、ガセネタも巻き込み、批判は増大していく。万博を含む、公共事業は、なるべく事前に情報を公開した方がよいのではないかと思う。

日本にとって、関西万博は、SNSが一般化した時代の初の万博である。そもそもメディアとの関係を考えると、20世紀の前半はオリンピックよりも万博の方が重要なイベントだったが、全世界に同時中継できるテレビが登場し、莫大な広告収入を得られるようになったことで、両者の立場は逆転した。例えば、北京オリンピックの開会式は、一晩で10億人が視聴し、「鳥の巣」と呼ばれるスタジアムのデザインを認識する。ところが、約2週間で終わるイベントはテレビ向きだが、SNSは半年に渡って開催される万博に大きな影響を与えた。

開幕後は実際に会場を訪れ、大屋根リングやパビリオンを体験した人たちの書き込みによって、徐々に評判が良くなっていく。オリンピックを現場で観戦できるのは限られた人数だが、万博ならば、会場に足を運べば、現物を見ることが可能だ。2億円トイレに至っては、建築家が粘り強く、SNSに対応したことで、ファンクラブまで誕生した。もっとも、炎上した建築家が、全員これをできたわけではない。人によってキャラは異なる。だから、建築家の努力によって、悪評をひっくり返したことを、いい話で済ませてはいけない。本来は万博協会の広報が、建築家に丸投げするのではなく、もっときちんと説明すべきだったと思う。

■ 鉄から自然素材へ、そしてリサイクル

筆者は、関西万博をテーマとする、グッドデザイン賞や美術評論家連盟のシンポジウムに登壇し、以下のような共通認識が確認された。今回は建築やデザインががんばり、踏ん張ったが、アートで目立つものがなかったというものだ。なるほど、岡本太郎による太陽の塔のような、誰もが遭遇するぶっ飛んだ作品がない。一応、現代美術は、名和晃平、レアンドロ・エルリッヒ、オノ・ヨーコなど、有名なアーティストの作品が、関西万博の会場に散りばめられていたが、あくまでも添えものとしてである。もっとも、愛・地球博でも、ローリー・アンダーソンや若手のアーティストは参加していたが、一般には認知されていない。このときはヤノベケンジが排ガスを撒き散らす巨大なロボット・マンモスを構想し、掘り出され、会場で展示される冷凍マンモスの代わりに、会期後はシベリアの氷原に埋めることを提案して

いたが、トヨタに対する配慮なのか、実現が見送られた。

一方で関西万博では、ミャクミャクのキャラクターは人気を獲得し、爆発的にグッズが売れていたが、どちらかといえば、これはデザインの分野だろう。また美術評論家の榎木野衣は、大屋根リングこそが、大阪万博における太陽の塔にあたる「ベラボー」な役割を果たしたと指摘している。会期の終盤は大勢の来場者がいたために、ほとんどパビリオンに入れなかった人も、最大の目玉である大屋根リングだけは歩いて体験できるキャパシティをもっていた。また4月の頃はまだよくわからなかったが、夏が近づくにつれ、暑くなると、海からの風が抜けるのと、日陰ができることによって、大屋根は想像以上に涼しい場所を提供していた。

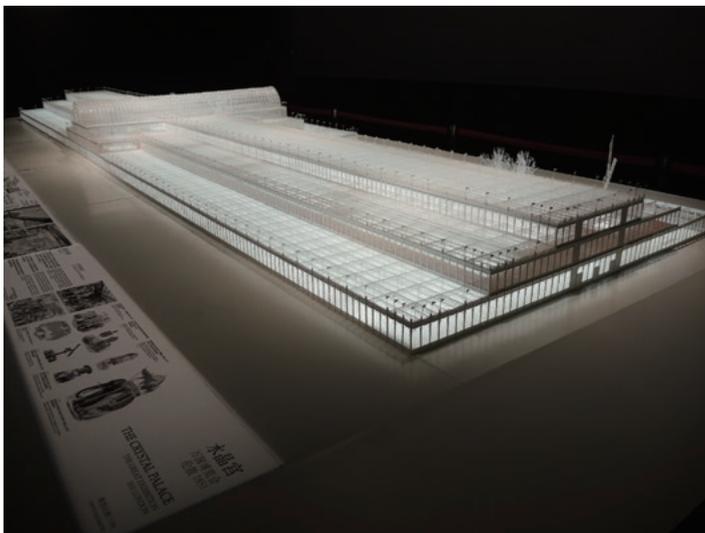


ブルーオーシャンドームと大屋根リング

さて、関西万博における建築で注目されるのは、リサイクルやリユースの強調、ならびに自然素材の活用である。もちろん、愛・地球博でも、環境をテーマとしていたので、みかんぐみによるトヨタグループ館などが、やはり再利用を掲げていた。しかし、今回の方がより徹底していたと言えるだろう。とりわけ、永山祐子によるウーマンズ・パビリオンが、前回のドバイ万博の日本館で用いた立体格子を使ったことは、おそらく万博史上初である。これはさらに2027年の横浜の博覧会でも、組み合わせ方を変えて、用いられるという。坂茂によるブルーオーシャン・ドームも、あらかじめ会期後にどうリサイクルするかを具体的に提示していた。もっとも、現在の日本の制度では、こうした再利用のハードルが高く、永山も苦労したらしい。若手建築家のトイレでも、意欲があっても、その難しさが報告されており、今後はシステムの整備が必要だろう。

もうひとつの自然素材だが、世界最大の木造建築としてギネスで認

定された大屋根リングをはじめとして、木材を活用するパビリオンが目立った。ほかに若手のプロジェクトとして、大阪城の残念石を使うトイレ（小林広美+大野宏+竹村優里佳）、石のパーゴラをもつ休憩所（工藤晃平）、不要になった木を積層させたサテライトスタジオ（ナノメートルアーキテクチャー）などが挙げられる。歴史を振り返ると、そもそも万博は鉄の時代に始まった。産業革命による技術革新が起き、鉄道が誕生し、都市間の大量移送が可能になったことで、成立したイベントである。初期の重要な建築も、おおむね鉄という素材をいかに使うかを実験したものだ。鉄は近代の象徴であると同時に、期間限定の仮設建築にも向いている。そしてポスト近代の愛・地球博では、鉄を使いながらも、リユースのしやすさが強調された。



ロンドン万博の鉄とガラスによる水晶宮模型

外国館では、参加国にパビリオンの建設費を提供することを表明した資金力によって、対抗馬だった釜山を抜き、2030年の万博をリヤドに誘致することに成功したサウジアラビアのパビリオンはやはり気合いが入っていた。ノーマン・フォスターの設計である。会場の中心に並ぶシングネチャーパビリオンは、どれも個性的だったが、3つの木造小学校を移築したSUOによる河瀬直美館は、一般人が見ないエリアも手を抜かずにデザインしており、力作だった。またSANAAの宮田裕章館は、空中に立体格子を飛ばし、万博の原風景であるクリスタルパレスを想起させる。ちなみに、アトリエ系事務所では、カタール館やポルトガル館など、隈研吾が4つのパビリオンを担当し、大阪万博における黒川紀章の3つを超えている。組織設計では、日本館、迎賓館、住友館など、日建設計が7つを手がけ、もっとも多い。1970年の万博は、当時30代の若手建築家もパビリオンを設計していたが、今回はそうした機会は減っている。そこで会場デザインプロデューサーの藤本

が、今後の活躍が期待できる20組の若手が参加できる枠（トイレ、休憩所、ポップアップステージ、サテライトスタジオ）を設けたことは重要だろう。

■なぜいま、万博だったのかを考える

新しいテクノロジーを啓蒙する場としての万博の歴史的な使命は、もう終わったかもしれない。実際、技術の最先端は、情報やナノテクなど、目に見えないものにシフトしている。上海万博やドバイ万博のように、経済的に勢いがある国で開発に弾みをつける契機にはなるだろう。が、関西万博のあと、夢洲にIRが登場しても、同じアジア圏では、すでにラスベガス化したマカオに対抗できるとは思えない。それでも、2025年に関西万博が行われた意義を考えるならば、各地で戦争が続き、再びきな臭くなっている状況において、やはり世界が同じ場に集まることになるだろう。大屋根リングの内側を外国館のエリアとすることで、説明がなくとも、直感的に多様な国が共存していることが理解できる。実際、会場を歩きながら、ここは平和が維持された半年間だけ出現したユートピアのように思われた。ちなみに、ロシアは参加しなかったが、ウクライナ、イスラエル、パレスチナは、 commons にパビリオンを出している。

ここからは皮肉を込めて指摘する。異様な円安と経済が疲弊していることから、もはや日本人の海外旅行が簡単ではなくなった。実際、筆者が外国に出かけると、近年はヨーロッパでほとんど日本人を見かけなくなったし（逆に中国人や韓国人は多い）、アジアの物価も決して安くない。1970年に大阪万博が開催されたとき、海外旅行はまだ高嶺の花だった。したがって、当時の万博は、日本人が異国を知る重要な場として機能し、子供が外国人のコンパニオンにサインをせがんだエピソードがよく伝えられている。もちろん、19世紀の万博も、見慣れない民族そのものが見せ物の一部になっていた。関西万博は、奇しくも55年前と同じような機会を特に若い世代に与えることになった。また2025年は日本において外国人に対する排他的な傾向が一気に噴出したことが記憶に残る。世界を招待する会場の中と、外とのギャップがあまりに激しいが、もし万博にゼノフォビアを緩和させる効果が少しでもあるなら、意義をもつだろう。

大屋根リングはすでに解体に着手しているが、さまざまな保存案があちこちから提出されたことは良かったと思う。多くの人がただ上からの決定を受け入れるのではなく、自分のこととして、国家的なプロジェクトについて考えているからだ。ちなみに、筆者も会期後はしばらく残して、無料で誰もが体験できる期間を設けるべきだと意見を述べてきた。なぜなら決して安くはない入場料を払った人しか、税金でつくられた大屋根リングを直接見ていないから。大阪万博の大



ドバイ万博の跡地、現在も残る中心部のドーム



上海万博の中国館

屋根も、すぐ撤去されたわけではなく、1978年まで残されており、その下でイベントが開催されている。IR開発の第1期も、万博の敷地ではないから、そこまで急いで壊す必要はない。また最近の大型プロジェクトをみると、挑戦的なものがなく、唯一無二の大屋根リングを超える魅力的なものをつくれるのか、疑問である。

いがらし・たろう



建築史・建築批評家。東北大学大学院教授。あいちトリエンナーレ2013芸術監督、第11回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館コミッショナーを務める。「磯崎新：群島としての建築（現在開催中）」などの展覧会を監修。第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞、2018年日本建築学会教育賞（教育貢献）を受賞。『誰のための排除アート？』（岩波書店）ほか著書多数。

大阪・関西万博における脱炭素技術を振り返る

大阪大学大学院工学研究科 環境エネルギー工学専攻 教授 下田吉之

■大阪・関西万博における脱炭素に対する取り組みの経緯

今回の大阪・関西万博において、筆者は2021年1月に博覧会協会が設置した「未来社会における環境エネルギー検討委員会」の委員長就任以来、博覧会の脱炭素に関する取り組みに参加してきた。同委員会は半年ほどで終了したが、2021年12月には「持続可能性有識者委員会」が発足し、その下に設けられた「脱炭素WG」に活動が引き継がれ、これは博覧会が終了した現在でも報告書の作成等のため活動を続けている。活動の成果は「グリーンビジョン」として毎年度末頃にとりまとめ、協会ホームページ¹⁾で公表している。

近年では国際博だけでなく、オリンピックやサッカーワールドカップなどの大規模なイベントではその社会的責任として持続可能性に対して最大限取り組むことが慣例となっており、持続可能性有識者委員会では脱炭素以外にも資源循環や生物多様性、人権など、国際的イベントを開催する上での社会的責任としての持続可能性への配慮に関して幅広い検討を行ってきた。脱炭素に関する活動ではこれに加え、博覧会そのものの目的でもある「2050年に向けた脱炭素社会の提示」すなわち、様々な未来のカーボンニュートラル関連技術を博覧会に取り込むことを目指した議論を行ってきた。

国際博覧会は人類が必要とする最新の技術や、社会の将来像を世界の人々に提示することを目的としている。また、最近では人類が直面する課題を提示して来場者にその解決策を考えさせるようにもなったといわれている。世界が脱炭素に対して大きく舵を切ったのは2015年にパリで開催されたCOP21においてパリ協定が採択された以降であり、当初2020年の開催が予定されていたドバイ博（パンデミックの影響で2021年に延期）の企画段階にはそれほど重要視されていなかったと考えられ、脱炭素に対する顕著な取組は後述するTerra Pavilion程度であったと聞いている。従って、今回の大阪・関西万博は未来の脱炭素社会の取り組みを示す初めての国際博覧会であったといえる。

■博覧会協会の取組

博覧会協会が各パビリオンに対して脱炭素への取組を促す手段としてはパビリオンのガイドライン²⁾があり、タイプAパビリオンではCASBEE-短期使用において建築物環境効率ランクAの達成が求められたほか、省エネ機器、再生可能エネルギーの積極的な導入や外皮の断熱、遮熱、日射遮蔽、自然通風や自然採光の利用、エネルギーマネジメントシステムの採用などが推奨されている。一方で、協会が主体となって取り組むのはエネルギー供給基盤システムなどインフラ設備が中心となる。

最新の2025年3月に出されたグリーンビジョン¹⁾においては、博覧

会による温室効果ガスの排出量を、国際博覧会及び国内の大規模イベントとして初めてGHGプロトコルを主たる方法として参照して算出している。まず、対策を行わなかった場合の排出量を示した後、会期中の会場内での排出（Scope 1, 2。対策をしなかった場合 [BAU] に3万9千t-CO₂）については、省エネルギーとともに電力調達を再生可能エネルギー、水素発電、原子力から構成される排出係数ゼロの電力で調達するほか、ガス、軽油や会場外電力使用については省エネルギー、電化、バイオディーゼルの導入等で削減し、これらの手段がとれない部分はカーボンクレジットで手当することでカーボンニュートラル達成を目指すとした。ただし、大阪・関西万博ではScope 3（会期前後や会場外の排出）がおおよそ350万t-CO₂と、Scope 1, 2のおおよそ100倍大きい。そのなかでも国内・海外からの来場者の移動や宿泊、会場内での食事や買い物に付随する排出はおおよそ290万t-CO₂（ただし、会期前に発表されたため当初の来場目標2820万人で算定）と大半を占める。これは博覧会の主目的と密接に関係するために容易には削減できないところでもある。

グリーンビジョンでは一方で、脱炭素社会の提示のため博覧会に取り入れる技術として、「水素発電を場外から導入（上記の電力調達）」、「再生可能エネルギー由来の水素による燃料電池利用など水素サプライチェーンの構築」、「ペロブスカイト太陽光発電システムの実装と展示」、「地域冷房における帯水層蓄熱および海水熱利用設備」、「合成燃料・バイオ燃料」、「CO₂排出削減・固定量最大化コンクリート（サステナドーム）」、「パビリオンにおけるAIやセンサーを活用した高度なエネルギーマネジメントシステム」が挙げられており、これらは実際に会場内に実装されている。また、会場外に「カーボンリサイクルファクトリー」が設けられ、「カーボンリサイクル技術」（DAC [直接大気回収]、再生可能エネルギー由来水素と、生ゴミ、DACからのCO₂をメタンに合成するメタネーション技術 [得られたeメタンは迎賓館の厨房や地域冷房プラントで利用]）の実証が行われた。カーボンリサイクルファクトリーは予約を取れば博覧会来場者は誰でも見学できるようになっており、DACを展示したRITE（地球環境産業技術研究機構）の施設ではCO₂の地中貯留技術やCO₂の鉱物固定技術、九州大学や名古屋大学の研究展示もあり、5月に会期中の予約枠が満杯になるほどの盛況であった。

上記の様々な未来技術は、2025年に策定された第7次エネルギー基本計画に記載されている2040年度に向けたエネルギー施策の方向性に掲げられたメニューにも合致しており、博覧会会場は2040～2050年頃の日本のエネルギーシステムの目指す姿を具現したものとなっていた。

■大屋根リングおよびパビリオンでの取組

今回の博覧会のシンボルは、世界最大の木造建築としてギネスブッ

クに登録された大屋根リングであった。現在、カーボンニュートラルに向けた温室効果ガス排出削減の重要な対策として、エネルギーシステムの脱炭素化以外に、森林のCO₂吸収能力の回復がある。現在日本の人工林は高齢化してCO₂吸収能力が下がっており、木材利用を促進し、エリートツリーと言われるCO₂吸収能力の高い若木に植え替えることが喫緊の課題になっている。博覧会のシンボルであるリングが木造で造られている理由の一つはこのことをアピールするためである³⁾。リング以外にも多くのパビリオンが木造で建設されており、外装などを含め日本の市街地に比べれば木質の印象の強い景観が形成されていた。例えば絵画や彫刻など本物の芸術作品の展示で大きな人気を博したイタリヤ館も木造であった。

海外パビリオンでは自然採光や冷房負荷削減等のパッシブデザイン、国内パビリオンではガスパビリオンが採用した放射冷却性能の高い膜材など、半年限りの利用にもかかわらず省エネルギーに配慮した建築が多く見られた。パビリオン内の展示では「循環経済」をテーマに掲げ、水素等脱炭素社会に関する豊富な展示のあったドイツパビリオンなど、各国・各社のカーボンニュートラルに対する取り組みの展示が多数見られ、前述したようにドバイ博以来の世界のカーボンニュートラルへの動きの大きさが感じられた。

■ 課題

以上述べてきたように、展示の面でも、エネルギーなどインフラの面でも脱炭素に力が入った博覧会であったが、展示以外ではその取り組み内容が一般に共有されることは少なかったように思われる。例えば会場内に供給された電力が全て排出係数ゼロ電源であったことはエネルギーの専門家からすると画期的な取り組みであったと思うが、このことは会場内の循環バスのバス停でディスプレイされていただけで、本稿を読まれて初めて気づかれた方も多いのではないかと思う。また、先に述べた大屋根リングは、あれほど話題を呼びながら、脱炭素社会のための木材利用の重要性と結びつけて語った報道を見ることは無かった。未来への夢を楽しむ万博において説教じみた解説は不必要という考えもあると思うが、国民に脱炭素の重要性を認識してもらい、グリーントランスフォーメーションのための需要を育てるための絶好の機会であったと思われただけに残念である。

脱炭素社会のアピールの手段は単に言葉だけでは無く、デザインも大事である。筆者は以前、太陽光発電を大規模に取り入れたオランダの住宅地を視察したことがあるが、計画を担当した方からの、「再生可能エネルギーの時代の到来を市民に伝えるためには景観として見せることが重要」という話が強く印象に残った。

前回のドバイ博覧会では、Terraと呼ばれるエネルギーと水の自給

自足を実現したパビリオンがあり、デザインも太陽光パネルを使った奇抜なデザインで来場者に大きくアピールしたと思われる⁴⁾。筆者も「未来社会における環境エネルギー検討委員会」以来、脱炭素技術をデザインすることの重要性を述べてきた。大屋根リングは木材利用をデザインでアピールすることができたが、一方で、日本発の太陽光発電技術として注目されているペロブスカイト太陽電池は、写真1に示すように、西ゲート付近のバス停の屋根として日本で初めての大規模設置が実現したものの、通常のバス停屋根とあまり変わらないデザインで、説明の掲示があまり目立たなかったことと併せて、来場者へのアピールにやや欠けるものとなった。

ペロブスカイト太陽電池の特徴は軽いことと、曲面など様々な形にすることができることで、建築一体型の太陽電池として普及が期待されている。この特徴を活かし、ペロブスカイト太陽電池を普及させ、日本の再生可能エネルギー産業を活性化させるためには、ペロブスカイト太陽電池の存在をアピールする優れた建築デザインの登場が求められており、今後期待したい。



写真1 ペロブスカイト太陽電池が設置されたバス停

- 1) <https://www.expo2025.or.jp/overview/sustainability/>
- 2) https://www.expo2025.or.jp/wp/wp-content/uploads/220630_jp_sekkeiglkousiki.pdf
- 3) 朝日新聞デジタル 2024年7月20日 344億円の万博リング「坪単価は安い」考案した建築家が語る意義
- 4) <https://www.expcitydubai.com/en/things-to-do/attractions/terra-pavilion/>



しもだ・よしゆき

大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻教授、日本学術会議会員、(公財)地球環境産業技術研究機構理事・研究所長、中央環境審議会地球環境部会長、(公社)2025年日本国際博覧会協会持続可能性有識者委員会委員、脱炭素WG委員長。専門は都市エネルギーシステム、エネルギー需要予測。著書に「都市エネルギーシステム入門」(学芸出版社)

大阪・関西万博の公共空間における ユニバーサルデザインの实態 —トイレ・休憩所・サインにみる“共に使う場”の状況—

島根大学客員教授 田中直人

■はじめに

◇博覧会とUDの理念

2025年大阪・関西万国博覧会（以下、万博）は、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとして開催された。前回の大阪での万博は1970年開催で、テーマは「人類の進歩と調和」であった。それから時代も社会も大きく変わった。日本も、大阪も変わった。過去から現在というんなことがあった。これまでの時代の知恵をさらに育み、未来社会へ伝承する科学技術のスパイラルアップをめざそうとしているようだ。さらに、来場者の多様性や現代社会の多岐にわたる要求に応えようとするユニバーサルデザイン（以下、UD）の理念を「ホップ・ステップそしてジャンプ」と飛躍させることをともに目指している。

科学技術と言っても特定の分野に限定されるものではなく、「いのち」に関わる宇宙における生命体の存在の可能性や自然・環境が生み出す神秘のメカニズムから人工的な例えばAIのような人間の能力をしのぐロボットが生み出すアートやデジタルデザインの世界との出会いなど、これまでのUDでは不可能としていた領域の拡大で可能となるなど生活の中でのさまざまな安全性や利便性などの向上が図られることであろう。

例えば、医療界で難病として完治できないとされていた病の治療に有効な医療技術を担ったり、これまで建築の性能アップできないことをたやすく解決ができる反面、従前の社会的な常識を覆したり倫理的な問題が多くなるかも知れない。「ホップ・ステップそしてジャンプ」としても「ジャンプ」の部分的、あるいは気づかなかった全体的な関係性で修正が困難、不可能ということもあるかもしれない。多くの先人の苦勞や努力で培ってきた「夢のジャンプ」ではなく未来人が予期せぬ科学的副作用に苦しむことがない「健康なジャンプ」を期待したいものである。

しかしながら、理念としてのUDが、実際の会場の運営や管理の局面において来場者への配慮としてどのように具現化されたかについては、十分に把握されているとは言えず、今後の重要な検討課題が残る。万博での来場者各人の体験は、その知見を今後のまちづくりにいかに生かすべきかという新たな課題を提起している。

本稿では、これらの課題意識に基づき、万博会場における休憩所、トイレ、サイン等を中心とした観察を行い、「共に使う場」の実情と課題を明らかにすることを目的とする。

■会場のシンボル「大屋根リング」とテーマ広場

◇大屋根リング

今回の会場の空間構成に関して最も話題になったのが「大屋根リング」（以下、リング）である。最も単純な幾何学模様の一つである円形を会場中央に据えて木造のリングの格子スクリーンに陽光が輝く。格子の材料には全国各地の森林から集められた国産のスギ・ヒノキを7割、外国産を3割使って、構造的スケールや耐久性と親しみを両立させた部材の使用である。

◇リングでのバリアフリーと円弧で描く循環動線

円弧にこだわらず交差点の場所名や周囲の建築物とのつながり構造から生み出される形状の「アートブリッジ」というべき立体交差の例はあるが、リングのような大きな円弧を木造で実現した事例は記憶にない。

UDとして、リングの上層部へは、エレベータが6か所、エスカレータが5か所設置されている。他の設備と同様に言えることは、エレベータなどの設備は各社ともに必要なバリアフリーはよく工夫されているが、そのようなエレベータがどこでどのように配置されているか、わかりにくい事例が多かった。リングの上層部につながるエレベータやエスカレータ利用客の待ちスペースが狭く、車いすやベビーカーなどを利用する人たち向けの配慮が必要と考える。

◇眺望を楽しめる会場へのアプローチと保存

多くの方がリングの高層部からの眺望を楽しめるように、UDの視点からエレベータおよびエスカレータが設置され移動できる。リングの

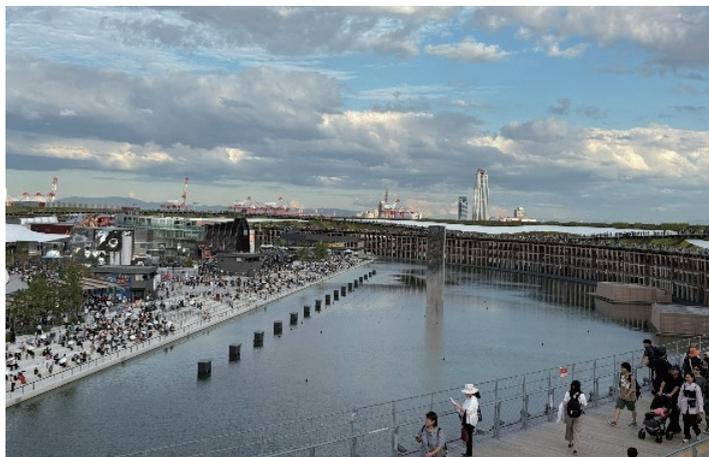


写真1 大阪湾岸の開発地に万博会場は広がる。大屋根リングは内陸部と海岸部の境界に円弧を描く。リングの360度回転景観からは遠く淡路島と神戸を結ぶ明石海峡大橋を臨むほか阪神間から大阪、和歌山方向を眺めることができる。

屋上からは会場の跡地の様子や晴れた日には大阪湾が一望でき、多くの市民が集まる親水公園となる。万博会場の空間のスケールや構成を来場者に伝える生きたマップでもある。(写真1)もとよりリングのみならず、当初の計画から終了後「保存」するということが未来の計画案件の一つとしてあるのであれば、中途半端な残し方ではなく、現在のままのリングのような全体を残す考えもあるが、多くの関係者の思いが部分を残すだけでも回想することが可能であれば思い出広場として活用可能と考える。配置計画として実際に全部であれ、部分であれ、未来においてやはりこうしたほうが良かったということにならないようにしたいものである。

◇ポスト万博の方向性

万博終了後、どこまでをレガシー（遺産）として万博の一つのシンボルとして残すか、夢洲全体の将来計画が今後どのような展開をするか、多くの市民、とりわけ当初、リングの計画について賛否を述べられた方々や国際的な視野から、どのようなことを発言されるのか注目している。注目されるプロジェクトの時代的な変遷の価値判断としての発言を伺いたいと思う。

◇各テーマ広場

直径約600mのリングを中心に会場に配列されるパビリオンやリングの内側に設けられた各テーマ広場（光の広場、調和の広場、進歩の広場、空の広場）を結節させて静けさの森や、サービス施設などの建築物や東西2か所のゲート広場が配置されている。UDとしては主要な歩行路のバリアフリーがなされている。視覚障がい者用としての点字ブロックは色彩や凸凹の大きさによるコントラストを考慮したエッジングでロービジョンの方への誘導ラインとして役立っている。

多様な広場が、会場内のどこにあるかを示すサインがもっと分かりやすくあっても良かったのではないかな。

■会場内のパビリオン配列

出展する国や地域のパビリオンがどのように配列されるかがポイントになる。大阪開催の二つの万博に限らず、万博の計画では、参加する諸外国をはじめ国内団体の出展に基づく、パビリオンなどの要求条件を満たさなければならない。ランダムな配列はパビリオン入口および出口の位置関係が複雑でわかりにくくなる。待ち行列で混乱して予約通りの時間に目的地へ到達するのが困難となる。このような状況では、案内のスタッフやわかりやすくするためのサインや案内計画の検討が必要となる。

■公共空間におけるサービス施設の現状

万博の環境整備はパビリオンだけではなく、世界各地からの出展に

対応してスタッフや種々の安全管理、情報の開示や展示だけでなく来場者それぞれの要求を受け止めて、種々の交流イベントが開催されていた。来場者の期待するパビリオンへの参加が早々に「予約」でいっぱいになり、視察目標のパビリオンの入館がかなわなかった人も多い。仮に入館できてもそれまでの待ち時間は長く、高齢者や障がい者、幼い子供連れなどの負担は大きい。初期段階から多数の滞在者の流れや滞留を分析し、可能な限りにはなるが、外気温の厳しい外部空間の気温を低下させるミスト装置(写真2)を配備するなどの配慮に努めている。



写真2 パビリオンの外部空間に設置したアート。パビリオンの外部通路との間にアート作品を設置した子供の遊び場として使われている。興味深いデザインであるが、安全対策を検討する必要がある。

◇トイレの整備状況と課題

オールジェンダに関する公式資料によると、会場全体には公共空間に



写真3 ビクトグラムを使ったトイレ誘導は大きく見つけやすいが、夜間は照明付きだろうか？壁面に設置した後付けらしいビクトグラムサインは人ごみの中では読み取りにくい。

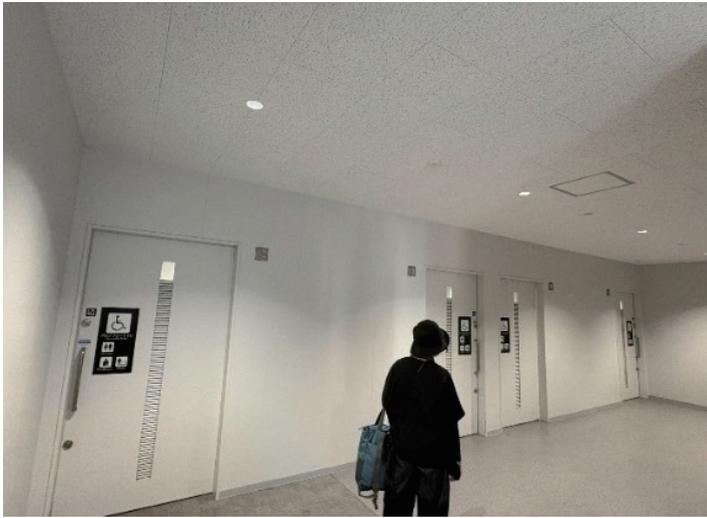


写真4 オールジェンダのトイレエリアにもかかわらず、女性専用と理解した男性がその場を去った。オールジェンダのトイレを伝えるためにピクトグラムで利用可能な対象者を示しても明確なサインとなっていないようだ。

45か所のトイレが設置され、そのうち16か所がオールジェンダ対応である。オールジェンダ対応のベビーケアルームや車いす利用者向け個室の設置なども十分ではないかもしれないが一応整っているとおこう。というのは、来場者からは「トイレの位置が分かりにくい」「サインが目立たない」(写真3、4)といった声が多数寄せられているからである。東西ゲート付近は9月以降では利用者が集中し行列が生じたなど、トイレの要求数と設置数の閑散時と集中時における対策についてはさらに検討する必要があるだろう。当事者の方々からのご意見はどのように反映されたのだろうか。

◇休憩所の整備状況と実態

会場各所には屋外ベンチ(写真5)、ミスト装置、屋根付きの団体休憩所などが設けられ、暑熱環境への対応が北ゾーン(グリーンワール



写真5 竹材を利用した日差しをカットする休憩スポット。

ド)では芝生広場や木陰を活用した快適な空間が形成されていた。大屋根リング周辺では座席が限られ、家族やグループが休憩したくても座れず、リングの柱にもたれていたり、地面に座って休憩をとる姿が数多く見られた。(写真6)休憩所の配置は、数的充足よりも“使う人の多様性”と場面を前提にする必要があり、今後は検討していかなければならない。特に高齢者や障がい者、乳幼児連れなどが同時に利用できる環境づくりが求められる。



写真6 大屋根リング下の柱が役に立っている。柱にもたれて休憩する人も満室ならぬ満柱では足りない状態。

■案内サインと誘導の課題

会場では来場者がスマートフォンアプリ「EXPO 2025 デジタルウォレット」を利用して、会場内で顔認証決済やデジタルスタンプラリーなどを体験できるアプリ連動型のデジタルサインと物理的なピクトグラムが併用されていた。しかし、実際に使用して「アプリ操作が難しい」「現地の案内板が小さい」といった指摘があり、案内情報の視認性などで課題が残るようだ。

特に高齢者や外国人に対しては、文字情報よりもピクトグラム(図記号)やグラフィックなどの視覚的誘導の効果が高いことが確認された。ピクトグラムの国際的な標準化やピクトグラムでも理解しにくい事例などがあることを検討し「ピクトグラムなら何でもよくわかる」という安直な考え方は通用しない。(写真7)サインも現場の構造や人の流れなどによりわかりにくい空間や計画と現場の違いがある。現場で問題が出てから追加するサインも多くある。その場合でもサインの色・形・設置場所・設置方法などの課題が残る場合が多い。近年デジタルサイネージなどデジタル系のサインが主流となりつつある。当事者参加として協力願った方々の問題点の指摘など十分に対応策を検討しなければならない。現地で後から追加した手書きの貼り紙サインが混在する状況は決して美しくわかりやすいサイン環境を実現しているとはいいがたい。(写真8、9)



写真7 分別したゴミ箱。わかりにくいピクト。



写真8 大屋根リングの柱に張り付けられた方向案内サイン。サインの大きさ・色・表示内容をわかりやすくする工夫がなければ理解するのは困難である。



写真9 各種トイレの方向案内をしているが、張り紙の手書きの表示ではわかりにくい。きわめて雑であり、もっと丁寧なデザインが必要である。

■課題と展望

パビリオン内部については、各出展国や企業が独自に設計しており、順路が一方通行でトイレに戻りにくい構成、カームダウンを促す休憩スペースの不足、スタッフの案内知識の差などの課題がある。今回の調査ではUDの検討を行うにあたり、どのような分野の専門家であるか、適正な確認や指導をいただくために出来れば複数の分野の専門家による事前の確認が必要であろう。

UDは基準や法規だけでは実現しない。各サービス施設にUD関連の基準を適用する状況を見ると、ばらつきが目立つ。個々の設備の整備度よりも全体としての使いやすさのデザインが問われる。今回の万博において、新たなアイデアとともにより実現性や時間・費用などの合理性を忘れてはならない。

人が集まる場所の会場には十分なトイレや休憩所が整備されている

が、それが利用者に届いていない状況も多い。せっかくの案内サインも小さく、その存在も気づかず、退出する来場者も多かったようである。

デジタルとアナログを組み合わせた対応が有効であり、リアルタイムで案内する仕組みや紙マップとの併用など、デジタルとアナログを組み合わせた対応が有効である。

「博覧会」の開催目的や開催企画の魅力あるプロデュースとして具体的にどのような情報伝達・サイン計画・スタッフ誘導の連携など時間と空間の合理的バランスの実現を目指さなければならない。

今後の心のUDとして、物理的なバリアフリー基準だけに注目することなく当事者の方々とともに一歩進んだUDを目指したい。このことは、ハード整備だけでなく「情報へのアクセスデザイン」の重要性を示している。UDの理念を実現するには、施設そのものよりも、利用者が迷わずたどり着ける当事者の状況の理解や気づきが不可欠である。

■おわりに

博覧会と言っても多種の類型がある。国際的な団体による開催になったものから、地方の都市による地方博のようなものまで多岐である。必ずしも海外の都市によるものばかりではない。その中で万博はそんなに簡単に開催されるものではない。これまでの開催のテーマを見ても関わる国や地域では、開催までの準備にはご当地のセールスポイントを前面に押しだし、生活や暮らし文化の進歩や関連する科学技術の日々層の進化を図る意気込みにあふれたものが多い。

万博としては千里の開催から半世紀以上経過して、大阪・関西を会場を夢洲にて開催された。会期までの半世紀はまさに変貌を遂げた大阪・関西の開発の時代であった。アツという間に万博は終わり、一部の施設を除いて、解体撤去の工事が進んでいる。

万博の会場は、完璧ではないにせよ、共生社会に向けた「共に使う空間」のあり方を模索するという社会実験の場であった。さらにトイレや休憩所といった「誰もが使う場所」には、ユニバーサル社会のやさしさと適切な管理運営を進めるに合理的な建築文化の成熟が表れる。

今後は、こうしたノウハウを都市空間や災害時の避難所設計など、日常的な公共空間づくりに還元していくことが期待される。



たなか・なおと

大阪大学工学部建築工学科卒業、東京大学大学院建築学専攻修了東京大学博士 一級建築士。神戸芸術工科大学教授、摂南大学教授、島根大学客員教授。(一社)UD総合研究ネットワーク代表理事。各地でのUDまちづくり講演会。著書「建築・都市のユニバーサルデザイン」(彰国社、日本建築学会著作賞)など多数。日本建築学会、日本福祉のまちづくり学会ほか。

大屋根リング「一部残し+α」の提案

大阪工業大学工学部建築学科客員教授 吉村英祐

■はじめに

大阪・関西万博（以下、万博）が半年間の会期を終え、開幕前から一部で話題になっていた万博のレガシーに関する議論が活発化している。なかでも特に注目を集めているのが、大屋根リングをどう残すのかについてである。

万博開幕前は、開催自体に反対するさまざまな意見が飛び交い、特に大屋根リングはその批判的となっていたことを覚えておられる方は多いであろう。だが、いざ万博が開幕すると、会場で大屋根リングを実体験した入場者の多くが、その存在感の大きさや美しさに圧倒され、大屋根リングの上から見る会場や大阪湾の眺めのすばらしさが知られるようになったことなどから、万博閉幕後も大屋根リングを残すべきではないかという機運が盛り上がり始めた。

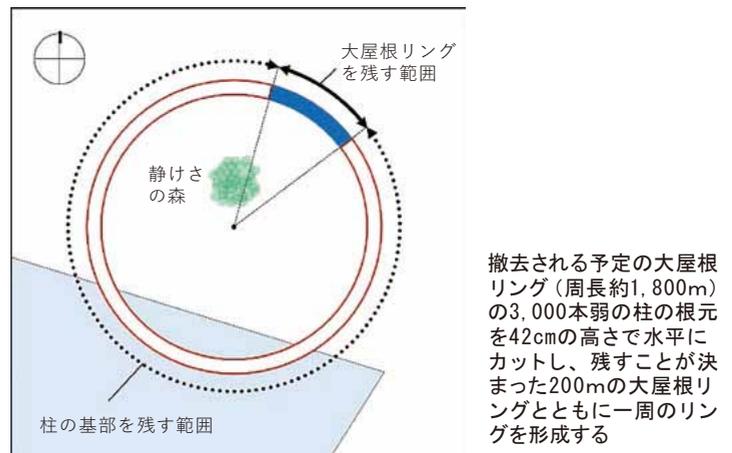
大屋根リングは、環状に完結しているからこそ「世界は一つ」という理念が伝わる。大屋根リングを残す理想形は、現状のまま、あるいはそれに近い形でリングの全周を残す「全残し」である。市民グループが立ち上げた「大屋根リング 全残しプロジェクト」は、その代表例である。また、万博閉幕間際には前京都大学長の山極寿一氏ら関西の7大学のトップが、大屋根リングのできる限り多くの部分を保存するよう求める意見書を大阪府・市、日本国際博覧会協会ほかに送るなど、「全残し」を求める活動は続いている。

現在は、北東側の約200mを残し、一帯を公園・緑地として整備する「一部残し」案で、関係者の合意に至っている。この「一部残し」案は、万博開幕前に大阪市と大阪府が跡地整備案を募集し、応募があった3案のうちの2案をベースにしていると思われる。だが、残りの1案が「全残し」を提案していたことを、2025年6月の報道で知った（参考文献1）。その内容は非公開であるが、「全残し」が全くの絵空事ではないことを示すものとして注目したい。跡地整備案を募集したのは万博の開幕前であるから、現在であれば「全残し」案がより高く評価される可能性がある。

筆者は、大屋根リングが万博のレガシーになる可能性を、万博の開幕前から指摘していた（参考文献2）。だが、閉幕後に解体することを前提に設計された大屋根リングの「全残し」には、耐久性・安全性、建築基準法上の扱い、高額な維持管理コスト等々の壁が大きく立ちはだかる。メディアやネット上では、「全残し」に対する賛否の意見がさまざま飛び交っているが、両者の接点は見出しがたい。このままでは、議論が平行線のまま時間切れとなって大屋根の解体が始まり、「一部残し」案で開発が進められることは目に見えている。このような状況を強く憂いた筆者は、「全残し」と「一部残し」に接点を見出せないかと苦悩する日々が始まった。

■「一部残し+α」の提案

「一部残し」と「全残し」が相いれない状況が続くなか、筆者は両者の接点を何とか見出そうと考え続けてきたのが、以下に示す「一部残し+α」の提案である。これは、図1に示すように、すでに決定している大屋根リング北東部の約200mに加えて、その他の部分のリングの柱を、大木を伐採するかのように根本部分だけを残し、それらを寄付金によりベンチに改修するというものである。



撤去される予定の大屋根リング（周長約1,800m）の3,000本弱の柱の根元を42cmの高さで水平にカットし、残すことが決まった200mの大屋根リングとともに一周のリングを形成する

図1 大屋根リングを残す部分と柱の基部を残す範囲の位置関係

まず、公表されている情報をもとに前提条件を整理する（大屋根リングの詳細な図面がないので、柱の本数は筆者の推計値）。大屋根リングは、7本の柱（一部は8本）で構成される構面が475列並ぶから、リングの柱の本数は3,300本余り、残す約200mの部分は同様の構面が48列並ぶから柱の本数は約330本、よって撤去されるリングの柱の本数は3,000本弱と推計される。

「一部残し+α」案は、基礎を残して柱を地面から正四角柱の柱の一边と同じ42cmの位置で水平にカットし、かつての大屋根リングの柱位置を示す立方体のオブジェとして残すというものである（図2）。この42cmという寸法は、ベンチの一般的な高さに近い。

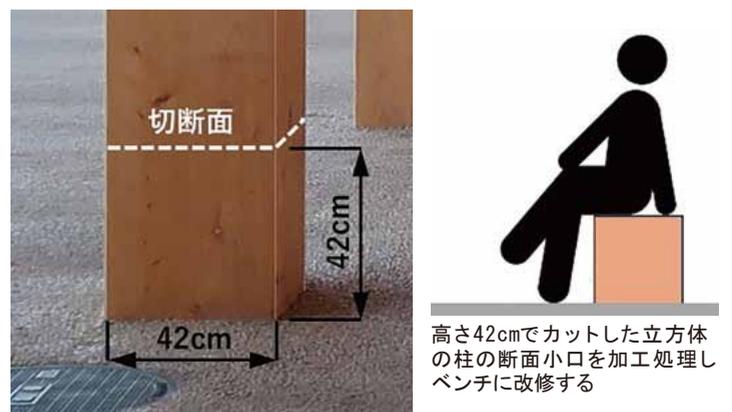


図2 柱の根元をカットしベンチに改修する提案

切り口はベンチの座面として加工処理し、切り離れた上部構造は予定通り解体し有効活用する。その結果、かつての大屋根リングの柱の基部でつくられたベンチ兼オブジェが、環状に約3,000個並ぶ。

ベンチの整備費用は、全額あるいは大半を一般市民や企業・団体等からの寄付金で賄う。寄付はベンチ1か所を1口とし、口数を制限せず、飛行機や新幹線の座席予約と同じように、寄付したいベンチの位置をネットで選べるようにする。寄付の対象となった柱は、ベンチへの改修時に寄付者のネームプレートを取り付ける。柱の位置やベンチの仕様のグレード等により、寄付金額に差をつけてもよい。すべてのベンチの整備を終えた時点で、寄付事業が終了する。

「一部残し+α」は「全残し」には程遠いが、北東部に残された大屋根を起点に、その左右に同心円状に並ぶベンチの列は、大屋根リングの下を歩いて回った体験を思い出す場や追体験の場となる。残す大屋根リングの上から見下ろすと、かつての大屋根リングの位置や規模がわかり、地図やGoogle Earthにも残る。日没後にベンチの座面自体を発光させるか直近の街灯の光で浮かび上がらせることができれば、残す大屋根リングの上から、左右に広がる美しい光の環を見下ろすことができる。飛行機からの夜景も、美しいであろう。

■座面が光るベンチ

環状に並ぶベンチは、ただのベンチではない。上述したように、何らかの方法で日没後に座面を発光させれば、大屋根リングの左右に環状に並ぶ約3,000個の光が大屋根リングの全周の位置や大きさを感動的に伝え、残した大屋根リングの存在意義や魅力を高めることが期待できる。そこで、座面を発光させる方法を考えてみる。

(1) LED発光

所沢市上下水道局は、下水道事業の新たな財源を確保するために、平成30年度から下水道マンホール蓋をLEDで発光させる日本初のイルミネーションマンホールを歩道に設置し、設置費用を有料広告で賄う事業をスタートしている(注1)。マンホールの蓋が発光する仕組みは、鉄蓋の中にバックライトとしてLEDの発光ユニットを設置し、透過性のある表面のデザインプレートの図柄を浮かび上がらせるというものである。電源は、近傍に設置したソーラーパネルで日中発電した電力を使っている。発光するマンホールは、1個でもかなり明るい(図3)。マンホールの蓋に使用できるのであれば、耐摩耗性、耐候性は問題ないと思われる。座面を発光させる電源は、大屋根リングの電源を改修し引き続き利用できるとよい。

(2) 蓄光材

太陽光や人工照明が放つ光エネルギーを蓄え、周囲が暗くなったときに光る蓄光材をベンチの座面に貼り、強化ガラス等で保護する。発

光能力はLEDよりかなり劣るが、電源がなくても一定時間光り、メンテナンスが不要なため、コスト的にはLEDよりも有利である。

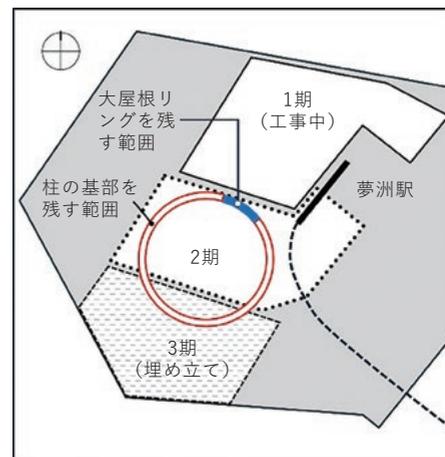


昼間は普通のデザインマンホール(左)が、日没後に強く発光する(右)

図3 所沢市下水道局のイルミネーションマンホール [筆者撮影]

■「一部残し+α」のメリット

図4は、公表されている夢洲の開発計画図をもとに作成した、万博閉幕後の夢洲の開発計画と大屋根リングの位置関係を示す図である。大屋根リングは2期工事と3期工事の両敷地にまたがり、大屋根リングの一部を残す市営公園のエリアは、2期工事部分に含まれる。両敷地から市営公園を除いた部分は、公募で選ばれた民間事業者が再開することになっている。



大屋根リングは北側で1期部分(IR用地・2030年開業に向けて工事中)に接し、2期部分(万博のパピリオンが建設されたパピリオンワールドの範囲)と3期部分(ウォーターワールドとその海側の範囲)にまたがり、両者を視覚的・物理的につなげるとともに、ここを訪れる人たちに大屋根リングの位置・形状・大きさを伝える。すなわち、残す大屋根と、その両側に同一円周上に約3,000個のベンチ群で構成される一周のリングは、開発後の夢洲全体

図4 万博閉幕後の夢洲の開発計画と大屋根リングの位置関係

約200mが残る大屋根リングは、北側で1期工事部分に隣接するため、完成後のIR(統合型リゾート施設)ゾーン内の各所から巨大な大屋根リングの姿が望めるであろう。ベンチとして残す柱の基部は2期部分(万博会場のパピリオンワールドの範囲)と3期部分(ウォーターワールドとその海側の範囲)にまたがり、両者を視覚的・物理的につなげるとともに、ここを訪れる人たちに大屋根リングの位置・形状・大きさを伝える。すなわち、残す大屋根と、その両側に同一円周上に約3,000個のベンチ群で構成される一周のリングは、開発後の夢洲全体

の回遊性や各ゾーンの相乗効果を高める装置となる。

大屋根リングは、建築基準法上の仮設建築物であるが、上部構造が巨大なため基礎^(注2)は強固かつ面積が広く(筆者の概算で約55,000㎡)、基礎の解体撤去だけでもかなりの大工事になるが、「一部残し+α」では地面から下の基礎部分は撤去せずそのまま使うので、基礎の補強や解体撤去が不要となり、その分の費用が浮く。地下に埋設された設備系統も、一部再利用できるであろう。

柱の基部を残したり再現したりする方法は、大阪歴史博物館・NHK大阪放送会館の敷地内の難波宮遺跡法円坂建物群(大阪市・図5①)、国史跡・海会寺跡(大阪府泉南市・図5②)、軽便与那原駅の跡(沖縄県・図5③)などに見られる。やむなく柱の基部を残せない箇所が生じる場合は、旧東京中央郵便局の柱跡(東京都・図5④)のように、大屋根リングの柱位置を床面に印す方法がある。



①大阪歴史博物館前の広場に復元された高床建物と地下の遺構の位置を示すモニュメント
②海会寺の回廊の礎石上に柱の基部が再現されている



③与那原駅のRC柱の基部が残されている(与那原町立軽便与那原駅舎サイト*より)
④KITTE丸の内の床に印された旧東京中央郵便局の柱跡
*<https://www.yonabaruekisha.com>

図5 柱跡による遺構展示の例 [③以外は筆者撮影]

■おわりに

大屋根の柱の基部をベンチとして残すことを跡地利用の条件にすれば、自由な跡地計画を強く制約するとの反論が当然予想される。だが、強い制約条件は時に思わぬすぐれたアイデアを生み出すことは、設計に携わっている人なら十分に理解できるであろう。残すことが決まった静けさの森も、これを十分に活かした跡地計画を提案できるか否かが、計画者の力量をはかるバロメーターになる。

公表されている「一部残し」では、太陽の塔に比肩しうるレガシーにはならず、夢洲全体とシナジー(相乗効果)を生み出すことはむずかしい。夢洲が世界有数の観光地となるためには、大屋根リングの解体を急がず熟議を重ね、より優れた形で残すことを模索すべきである。このままでは、残された大屋根リングは「負のレガシー」となり、やがて忘却→荒廃→立入禁止→解体の道をたどることが強く懸念される。

2025年12月6日に大屋根リングの解体が始まった。残された時間はわずかである。大屋根リングの「一部残し」をこえ、夢洲が万博会場であったことを長く後世に伝えられるよう、市民や関係者の英知が結集されることを期待してやまない。

※本稿は、毎日新聞(2025年11月3日)に掲載された筆者の寄稿に書き切れなかった内容を修正加筆したものです(新聞では「一部残し+α」を「半残し」と記述していますが、内容は同じです)。

注

注1) イルミネーションマンホールの詳細は、参考文献3を参照。

注2) パビリオンが配置されるパビリオンワールド部分は直接基礎、水面に張り出しているウォーターワールド部分は杭基礎を採用している。杭は、深度49mに出現するN値50以上の砂礫層・砂層を支持層とし、解体を考慮して先端羽根付き鋼管を採用している(参考文献4)。

参考文献

- 1) 万博の大屋根リングに幻の全体保存案があった 開幕前に大阪府市が却下し廃案に産経新聞オンライン版(2025年6月20日 15:30配信)
<https://www.sankei.com/article/20250620-TLIIWVDM2ROIHHODM3SFNN66Z4/>
- 2) 吉村英祐:万博のレガシーが拓く未来、建築と社会、Vol.106 No.1234, pp.15-17、2025年1月
- 3) イルミネーションマンホール誕生、ところざわ水物語 No.4、2020年12月
https://www.city.tokorozawa.saitama.jp/kurashi/jogesuido/toiawase/mizumonogatari.files/tokorozawamizumonogatari_R2_12.pdf
- 4) 林 将利、北山宏貴、鷹羽直樹、九嶋 壮一郎:大阪・関西万博 大屋根リングの構造設計、GBRC Vol.50、No.4、pp.10-19、2025.10

よしむら・ひでまさ

大阪府出身。1978年大阪大学工学部建築学科卒業、1980年同大学院工学研究科建築工学専攻修了、同年小河建築設計事務所。1983年大阪大学助手、1993年同助教授を経て2007年大阪工業大学工学部建築学科教授、2020年同特任教授、2024年から現職。1992年日本建築学会奨励賞、2007年日本建築学会賞(論文)受賞。博士(工学)、一級建築士。日本建築協会常任理事、生産技術振興協会理事、吹田歴史文化まちづくり協会評議員、日本建築センター・日本建築総合試験所・大阪建築防災センター防災計画評定委員会委員、大阪府歴史的建造物委員会委員等を務める。「建築計画1・2」(鹿島出版会)、「阪神・淡路大震災における避難所の研究」(大阪大学出版会)、「建築計画基礎」(学芸出版社)、「建築人間工学事典」(彰国社)、「建築デザインと環境計画」(朝倉書店)ほか著書(共著)多数。



グラングリーン大阪～ゲートランタン～

株式会社 日建設計 堀本明伸

■ 建築計画概要

大阪駅前のグラングリーン大阪にあるゲートランタンは、うめきた公園を周遊する歩行者デッキと、うめきた公園と、地下街を、直径20mの円柱形状の吹き抜け空間で接続する建物である。写真1が外観である。



写真1 夜景写真

■ 構造計画概要

図1に構造概要図を示す。地下の構造形式はSRC造・S造とし、地上はS造の純ラーメン構造としている。歩行者デッキ部分と接続する、特徴的な円形の吹き抜け部を有している。図2に円形吹き抜け部の構造モデルを拡大して示す。

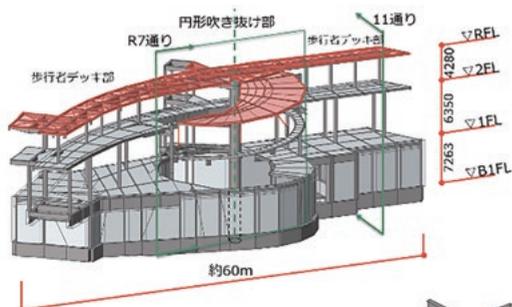


図1 構造概要図



図2 円形吹き抜け部の構造モデル

中心部にB1階から屋根レベルまで独立した円形鋼管柱を設け、当該柱から、らせん形状の屋根を片持ちトラス構造で設けている。そこからタイロッドで屋根と同じ勾配のらせん階段を吊り下げている。

円形吹き抜け部の中心柱はP-1500φとしている。屋根をらせん形状としたのは意匠的には、歩行者デッキから公園への視線が屋根を介して抜けること、構造的には階段と同じ勾配の屋根で吊ることが合理的であることが合致したためである。円形吹き抜け部のらせん階段を地上から見上げたのが写真2である。



写真2 らせん階段

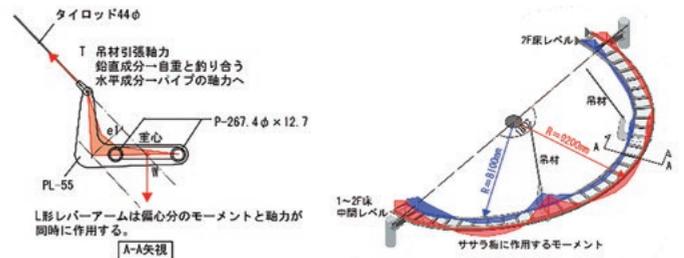


図3 らせん階段の構造計画

図3にらせん階段の構造計画を示す。直径約20mの平面形状で、中心角60度ごとに吊材を設けた計画としている。2本の円形鋼管をササラ桁とし、吊材は内側ササラ側に設けている。これは外側の公園への眺望を確保した階段とするためである。また、吊材位置に設けているL形レバーアームはPL-55 (TMCP325C) としてササラ桁を切断して通しダイヤフラム形式で接合している。らせん階段に作用する応力を模式的に示しているが、らせん階段は吊材の位置でモーメントが極大となり、直径約20mのササラ桁を吊材スパン間の梁として円形鋼管で設計している。A-A矢視図に示すように吊材は階段の重心を狙うように配置し、レバーアーム材で偏心分のモーメントを処理し、らせん階段にねじれが発生せず、細径の円形鋼管のササラ桁で成立させている。レバーアーム材を介して吊ることでササラ桁を極小化し、浮遊感のある階段を実現することができた。



ほりもと・あきのぶ

1984年 大阪府生まれ

2009年 日建設計入社 構造設計部

サーキュラー・低炭素建材検索システム

株式会社竹中工務店設計部環境グループ主任 海野玄陽

■はじめに

株式会社竹中工務店と建材選定プラットフォームMaterial Bank^(※)を運営するDesignFuture Japan株式会社は、枯渇性資源を可能な限り原料として使わず、廃棄後も再利用可能な建材（以下、サーキュラー建材）を建築プロジェクトで選定する際に参照できる建築業界共通の評価基準を策定した。

さらに、Material Bank内において、この評価基準を満たしたサーキュラー建材、及び低炭素建材を検索できる「サーキュラー・低炭素建材検索システム」の開発に着手し、2025年6月より竹中工務店による実証を開始した。

今後、実証運用の参加者を竹中工務店以外にも徐々に広げ、2027年までにMaterial Bankサービスの全会員への機能提供を目指す。

建築領域のサーキュラーエコノミー・脱炭素に対するお客様の関心が高まる中、今回新たにMaterial Bank内に構築を進める「サーキュラー・低炭素建材検索システム」では、再生原料の使用率や廃棄後の再利用可能性などを数値化し、「サーキュラー建材や低炭素建材をなるべく多く効率的に使いたい」というお客様の要望に迅速に対応できる仕組みを提供する。これにより、建設業界全体のサーキュラーエコノミー・脱炭素0の推進に貢献したいと考えている。

(※) Material Bankとは：

200ブランド以上、約70,000点（2025年7月現在）の建材サンプルを最短期間に取り寄せ可能な、建材選定プラットフォーム。短時間で多くの建材の中からベストなものを選ぶことができる環境を提供することで、よりよいデザインの創出に寄与する。会員登録した設計者は、全て無料で利用することが可能。

■開発の経緯

2050年カーボンニュートラル実現に向けて、2026年4月からは改正された資源有効利用促進法が施行されるなど、建築業界では建材選定の基準が「機能性」「意匠性」に加えて、「環境配慮性」へと拡大している。CO₂排出量については算定基準が明確化され、欧州をはじめ各国で取り組みが進む一方、建材の再利用率や再利用原料の含有率などのサーキュラー性に関しては、統一された基準がないのが現状である。言い換えると、「何をもってサーキュラーとするか」が不明瞭である。そのため設計者は、建築物のサーキュラー性を向上させるための建材を選定する段階において、現状明確な指標を持ってい

ない。サーキュラー建材の評価基準の整備と業界標準化が、建築業界全体のサーキュラーエコノミーの推進に必要な状況となっている。

また、「サーキュラー建材を総覧でき、常に最新情報にアップデートされるカタログ的なプラットフォームがない」という課題もまた、建設業界のサーキュラーをポトムアップするために解決すべき課題である。我々はこの二つを解決するため、Material Bankプラットフォーム内に「サーキュラー・低炭素建材検索システム」を構築した。

■サーキュラー評価基準の策定

「何をもってサーキュラーとするか」を定量的に定めるため、サーキュラー性の評価指標としてWBCSD（持続可能な開発のための世界経済人会議）のCTI（Circular Transition Indicators：循環移行指標）をベースとして、評価基準を策定した。従来の建材のフローは、枯渇性資源を採掘し、建材として加工・使用し、建物が解体されれば埋立てや焼却をされるといった、直線型だった。今回の指標では、使用する建材（図中の点線四角で囲った部分）の原料としてどのくらい循環型の資源を使用したのか（サーキュラーインフロー率）、使用後の建材がどれくらい再利用されるのか（サーキュラーアウトフロー率）を評価する。サーキュラーインフロー率・同アウトフロー率の2つの指標から得られるのは「実質的な循環性」の定量評価である。両者の値が高ければ高いほど、資源は新たに採掘されず、廃棄されることもなく、社会の中で循環し続ける可能性が高いことを意味する。（図1）

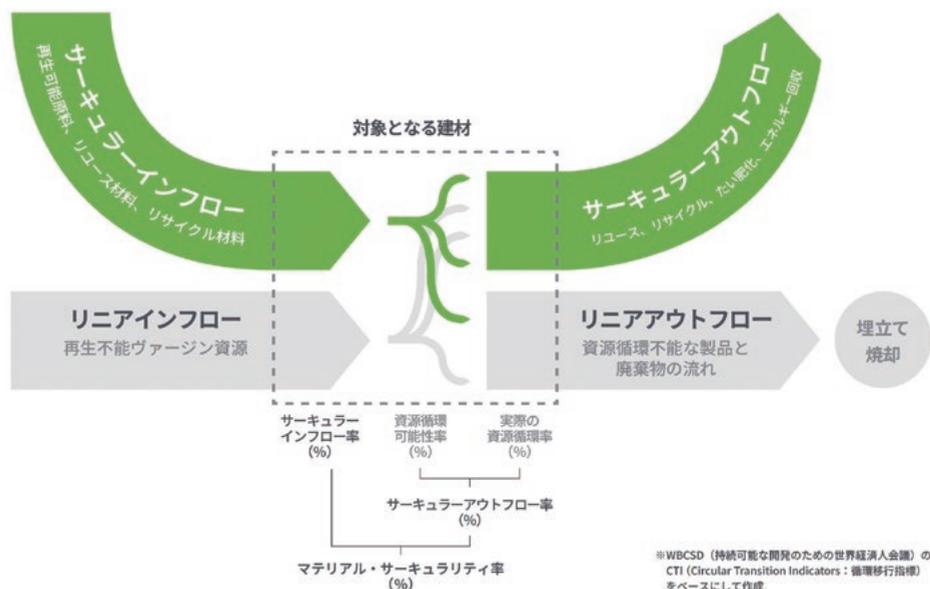


図1 サークュラーインフロー・アウトフロー概念
出典：WBCSD “Circular Transition Indicators V4.0” をもとに竹中工務店が和訳・加筆

今回の評価では、これらの項目をさらに具体的な指標へ落とし込み、リサイクルの質も評価項目に加えている。例えば水平リサイクル・アップサイクル・ダウンサイクル・エネルギー回収等、元々のCTI指標では区別していなかった項目も分類できるようにした。これらの項目を建材メーカーにヒアリングし、数値を提出してもらった。(表1)

また、ヒアリングでは前述の定量的な項目に加え、例えばなぜそのようなりサイクル率の数値に至ったのか、開発の動機は何かといった定性的な項目(サステナブルストーリー)も各建材メーカーにたずね

ている。得られたストーリーは開発したサーキュラー・低炭素建材検索システムにも掲載する。

このメーカーへのヒアリングで得られた結果をデータベース化し、建材ごとの数値をMaterial Bank Japanプラットフォーム内に「サーキュラー・低炭素建材検索システム」として掲載した。2025年10月15日時点で約4,500品目がサーキュラー建材として登録されており、2027年の公開時にはさらに点数を増やす見込みである。

表1 詳細なヒアリング項目

| CTIの項目 | | MCIの項目 | 割合記入 | 備考 |
|-------------------------------------|-----------------------|------------------------------|----------------------|--|
| サーキュラーインフロー率 | 再生可能原料含有率 | 製品材料中のバイオマス原料の重量比(再生可能原料の割合) | [%] | |
| | 非バージン原料含有率 | 製品材料中のリサイクル材料の重量比 | [%] | |
| | | 製品材料中のリユース材料重量比 | - | |
| サーキュラーアウトフロー率 | (設計に焦点を絞った)資源循環可能性率 | - | [%] | 該当建材の重量比で、どれくらいの割合が資源循環可能か 例: タイルカーペットでパイル材とバックング材が重量比で3:7の時、パイルが50%ダウンサイクル可能、バックング材が100%水平リサイクル可能な場合、資源循環可能性率は $50 \times 0.3 + 100 \times 0.7 = 0.85$ 、つまり85%と考える。これはパイルとバックング材を分離できるリサイクラーと協業している際の数値である。パイルとバックング材が分離できず、両者のリサイクルを相互に阻害している場合には、資源循環可能性率は0%となる。 |
| | 実際の資源循環率 | 廃棄物の中で水平リサイクルされる量の重量比 | [%] | 例: コンクリートガラ→再生骨材 |
| | | 廃棄物の中でアップサイクルされる量の重量比 | [%] | |
| | | 廃棄物の中でリユースされる量の重量比 | [%] | 例: コンクリートを破砕せずそのまま試用 |
| | | 廃棄物の中でたい肥化される量の重量比 | [%] | |
| CTIではサーキュラーではないがMCIではサーキュラーとされている項目 | 廃棄物の中でダウンサイクルされる量の重量比 | [%] | 例: コンクリートガラ→路盤材 | |
| | 廃棄物の中でエネルギー回収される量の重量比 | [%] | 例: プラスチックや木材を燃焼して熱利用 | |
| アップフロントカーボン量 | | | [kg-CO2eq] | Sumpo EPDに登録されている値 |
| | | | [kg-CO2eq] | 自主評価 |
| 耐用年数 | | | [年] | |



うんの・げんき

2014年竹中工務店入社。設備施工・設備設計を経て、2021~2023年Singapore-ETH Centreに社命留学。帰国後、環境グループにてサーキュラーエコノミーの研究・設計を行う。

主な作品にカンダホールディングス本社、リバー本社等。

主な著書に建築環境デザインのディテール(2024年、共著、彰国社)等。

企画：日本建築協会
発行：学芸出版社

出版図書のご案内



日本建築協会の会員は本体価格の1割引+税でご購入いただけます。(送料実費)
詳しくは(一社)日本建築協会事務局
(TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984、
E-mail soumu@aaj.or.jp) まで。

最新刊 2025年9月発行

イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工

著者 西 博康

A5判 256ページ 定価 本体2,700円+税

風圧力の設定からビスの使い方まで、お客様を被害者・加害者にしないために、また生産者責任を追究されないために必要な知識を、実務者視点で優しく解説。



最新刊 2024年9月発行

現場写真でわかる 木造住宅工事の納まり

著者 春山浩司 監修 玉水新吾

A5判 256ページ 定価 本体2,800円+税

品質のバラつきによる瑕疵のリスクをなくし、顧客の満足を得られる質の高い施工をするための住宅工事の納まりをポイント別に現場写真+図面にまとめた一冊。



2024年9月発行

住宅が傾かない 地盤・基礎のつくりかた

著者 高森 洋

A5判 216ページ 定価 本体2,700円+税

阪神大震災以降、地盤調査と地盤補強は一般化した。が、まだまだ不同沈下のトラブルは減らない。災害の激甚化に備え、強い住宅地盤・基礎をつくる方法を第一人者が説く。



2023年7月発行

設計者のための 建築コストプランニング術

著者 北野正美

A5判 184ページ 定価 本体2,500円+税

狙い通りの見積をとるための図面の書き方、施主の予算・要望に応えつつ良質な建築を実現するツボ、設計段階別・工事種別の見積書チェックの極意をやさしく指南。



2023年4月発行

組織設計・ゼネコンで設計者になる 入社10年目まではたらきかた

編著 (一社)日本建築協会U-35委員会

四六判 224ページ 定価 本体2,200円+税

組織設計事務所やゼネコン設計部で働く若手設計者たちのやりがいと壁、そして成長。所属組織を超えて切磋琢磨するU-35委員会の17人の実務録。



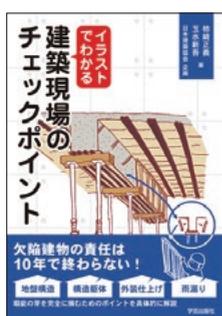
2022年3月発行

イラストでわかる 建設現場のチェックポイント

著者 柿崎正義・玉水新吾

A5判 236ページ 定価 本体2,800円+税

地盤構造・構造躯体・外装仕上げ・雨漏りについて、現場での工程内検査やメンテナンス時に瑕疵の芽を完全に摘むためにチェックすべきポイントをわかりやすく解説。



2021年8月発行

直感で理解する! 建築デザイナーのための 構造技術の基本

著者 山浦晋弘

A5判 216ページ 定価 本体2,500円+税

「いい建築デザイン」はどんな構造技術に支えられているのかを文章と手描きイラストでやさしく解説。建築デザインの幅を広げるための考え方や、細部にこだわる時の注意点など、わかりやすく紹介。



2021年2月発行

図解 住まいの設備設計 暮らしやすさから考える 家づくりのポイント

著者 堀野和人・加藤圭介

A5判 172ページ 定価 本体2,600円+税

安全で快適な住宅をつくるには、暮らしやすさをふまえた設備計画が欠かせない。玄関・洗面室・寝室など、住まいの10の空間別に、生活行為に適した設備設計の考え方をわかりやすい2色刷イラストで紹介。



第71回 工高生デザインコンクール

設計課題／まちなかのアートスペース

【応募校数】16校 【応募作品数】118点

【締切日】2025年9月30日 【審査会】2025年10月18日 【表彰式】2025年11月15日

審査総評

審査員長 岸下真理

今回で71回目の開催を迎えた本コンクールは、工高生を対象とした建築デザイン関連の設計競技としては国内で最も古く歴史のある取り組みであるが、前回の第70回をひとつの節目として、今回から新たな取り組みを始めたところである。その新たな取り組みとは、「作品作成の手法を鉛筆での作成に限定しない」というレギュレーションの変更である。国家資格である建築士の資格試験は現在でも手描きでの実技（設計製図）試験が課されているものの、現代社会における実務としての設計製図が手描きによって行われることは、ほぼ皆無である。よって、各種教育機関での指導もその社会状況と共に変化しており、本コンクールも伝統を守りつつも時代の趨勢に合わせながら柔軟に変化していくことが重要であるとの考えに基づく規定変更である。

審査員と関係者（教育委員や事務局の皆様）の一同が不安と期待を併せ持って向き合った今回の審査は、意外にも前回までと同様の「鉛筆で作成した案」が多数を占め、表現手法の違いによる作品の優劣が如実に現れるものでもなかった。もちろん表現手法も重要であるが、やはり提案の中身が最も重要であるという、ある意味で当たり前のことを再確認しつつ、参加校16校の応募総数118作品を審査することとなった。

今回の課題は「まちなかのアートスペース」である。そもそも「アート」とは何なのか？課題の趣旨には「アートは絵画や彫刻、音楽、デジタルアート、インスタレーションなど多岐にわたっていますが、それらは時代や土地または出来事の影響を受け、地域の特色を反映してきました。」と、何となく臍げに定義がなされ、また「アートは単に美を追求するだけでなく、日常の中に溶け込み、文化の継承や対話、共感を促す役割を担っています。」と、その役割までもが示されている。多くの応募者は、この定義

や役割を素直に受け入れ、それらをベースに各自の提案を作品としてまとめており、それぞれに楽しげで多様なアートスペースが表現されていた。しっかりと自分自身の考えをまとめ上げ、ひとつの作品として世に問うことは大切なことであり、それを成し遂げた応募者全員には審査員長として心より敬意を表したい。

ただ一方で、与えられた課題を上手に解くというある意味で受動的な対応には少し物足りなさも感じており、若い工高生の皆さんにはもっと能動的で主体的な取り組みを期待するところでもある。今回、入選を果たした10作品については、設計者が自分自身にとって「アートとは何か？」という本質的な問いを設定し、既成概念に囚われないそれぞれの答えを導き出し、更にそれを建築と共に表現するという、私が期待していた能動的で主体的な取り組みがなされていた。その背後には、建築を「他人事」ではなく「自分事」として捉え、考え、提案する設計者の豊かな想像力があるように私には感じられた。しかもそれは「身体性を伴った想像力」である。まるで設計者自身がその場所で、そのアクティビティに参加しているかのような「リアルさ」を感じさせる提案である。

私はおそらく、実務として手描きによる設計製図を行っていた最後の世代のひとりである。T定規（並行定規ではなく！）と三角定規を駆使し、トレーシングペーパーの上にステッドラーのシャーペンで線や文字を一生懸命に描いていた頃の感覚は、今でも身体が覚えている。頭だけでなく全身を使って考えること・想像することを学んだのだと思う。

最終的なアウトプットの方法は時代に相応しい様々なツールを駆使すれば良いと思うが、「身体性を伴った想像力」を鍛えるために、若い工高生の皆さんには、是非「手で描くこと」も大切にして欲しいと私は願っている。

【審査員長 プロフィール】

1969年 兵庫県生まれ
1993年 金沢工業大学工学部建築学科卒業
1995年 金沢工業大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
1995年 無有建築工房（主宰：竹原義二）入所～2000年12月まで所属
2001年 Atelier KISHISHITA を岸下和代と共同設立
2015年 大阪工業大学工学部建築学科非常勤講師～現在まで
2018年 摂南大学工学部建築学科非常勤講師～現在まで
2020年 近畿大学建築学部建築学科非常勤講師～現在まで

【主な作品】

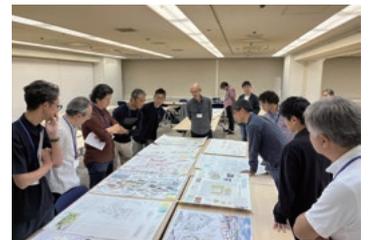
2001年 海老江のアトリエ
2005年 但東町の賤ヶ屋
2009年 甲陽園目神山町の家
2013年 日本圧着端子製造株式会社
2017年 日本圧着端子製造 大阪技術センター別館
2018年 日本圧着端子製造 名古屋技術センター別館
2022年 森本設備淡路事務所
2024年 日本圧着端子製造 大阪技術センター別館 増築棟

【主な受賞】

2002年 第19回住まいのリフォームコンクール 国土交通大臣賞
2007年 第53回大阪建築コンクール 渡辺節賞
2008年 平成20年日本建築士会連合会賞 優秀賞
2010年 第5回JIA（日本建築家協会）関西建築家新人賞
2011年 第57回大阪建築コンクール 大阪府知事賞
2013年 第12回日本建築美術工芸協会 戸原義信賞
2014年 第17回木材活用コンクール 林野庁長官賞
2014年 第59回大阪建築コンクール 大阪府知事賞
2014年 平成26年日本建築士会連合会賞 奨励賞
2015年 ウッドデザイン賞2015 奨励賞（審査委員長賞）
2016年 日本建築学会作品選集2016
2019年 ウッドデザイン賞2019 奨励賞（審査委員長賞）
2021年 第24回木材活用コンクール 木材活用賞
2024年 第17回関西建築家大賞



【審査会】



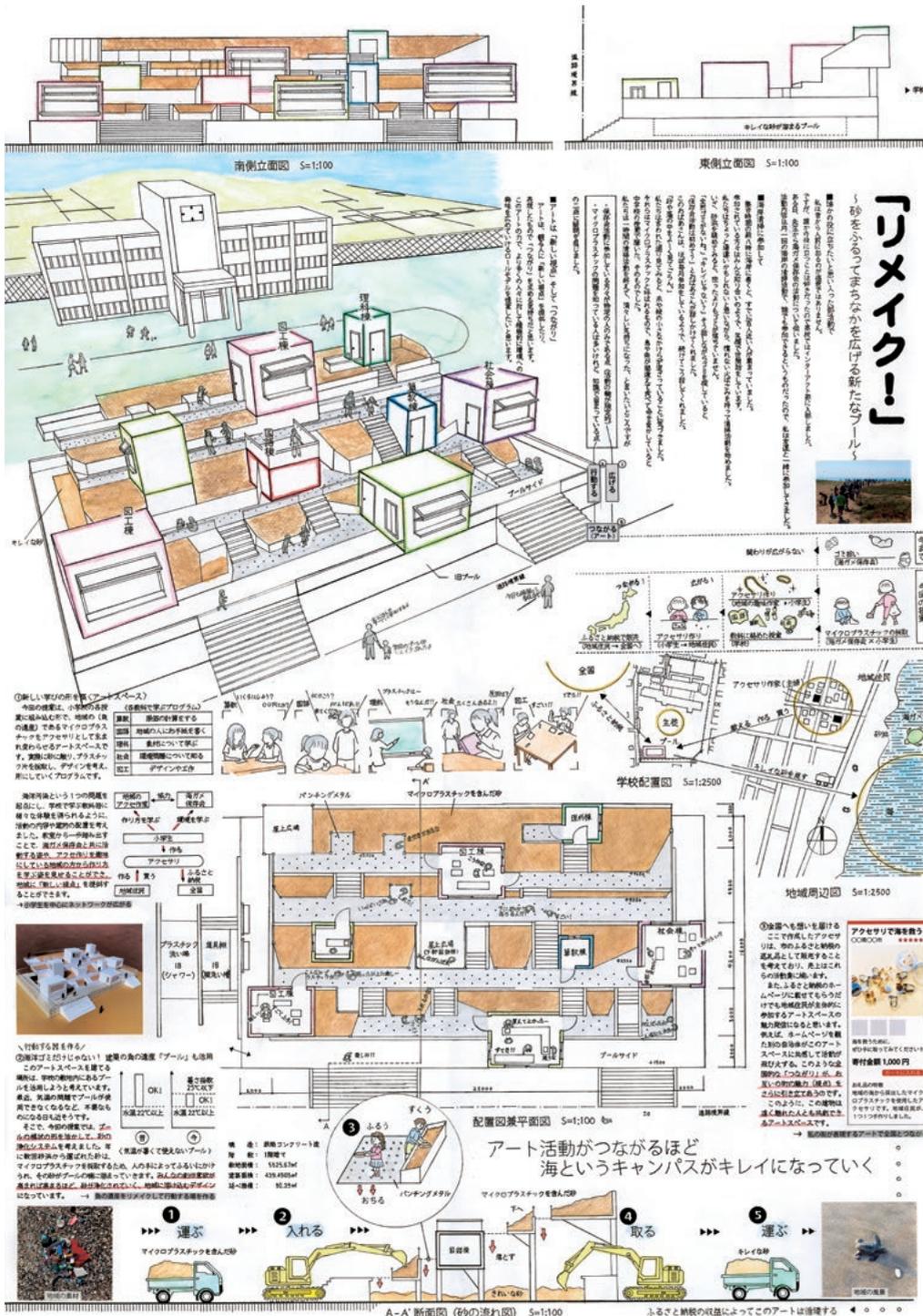
●審査員（50音順・敬称略）—職場は2025年11月15日現在—

糸嶺 円路／㈱大林組設計本部大阪設計部副部長
梅田 武宏／ウメダタケヒロ建築設計事務所代表
惠本涼太郎／㈱日建設計設計監理部門設計グループ部長
奥 貴人／㈱安井建築設計事務所設計部部長
久保 岳／㈱昭和設計建築設計部大阪部長
多田 正治／多田正治アトリエ代表、武庫川女子大学 准教授
根木 和人／㈱東畑建築事務所本社オフィス大阪設計室副室長
野口 伸／㈱竹中工務店大阪本店設計部グループ長
柳沢 究／京都大学大学院工学研究科 建築学専攻・准教授

入選・最優秀賞

奥田心実・西村まうる

三重県立四日市工業高等学校 1年



「リメイク!」～砂をふるってまちなかを広げる新たなプール～

私たちは海岸清掃活動に参加する中で、清掃活動の輪が限定的であること、マイクロプラスチック問題を知っていても行動につながっていないことに疑問を感じました。そこで、不要化されつつある学校のプールを、マイクロプラスチックを含む砂を浄化し、そのプラスチックをアクセサリにする建物へ生まれ変わらせることを考えました。プールのフェンスを一部開放し、地域の人が気軽に参加できるようにすることで、活動の輪を広げます。また、完成したアクセサリをふるさと納税の返礼品とすることで、地域と海、そして全国をつなぐ仕組みを考えました。私たちは、このアートのつながりにより、海という大きなキャンパスがきれいになっていくことを目指しています。

今回初めてデザインコンクールに取り組んだので、どのようなコンセプトにするのか、私たちが伝えたいことをどのようにして表現するかなど1つ1つがとても

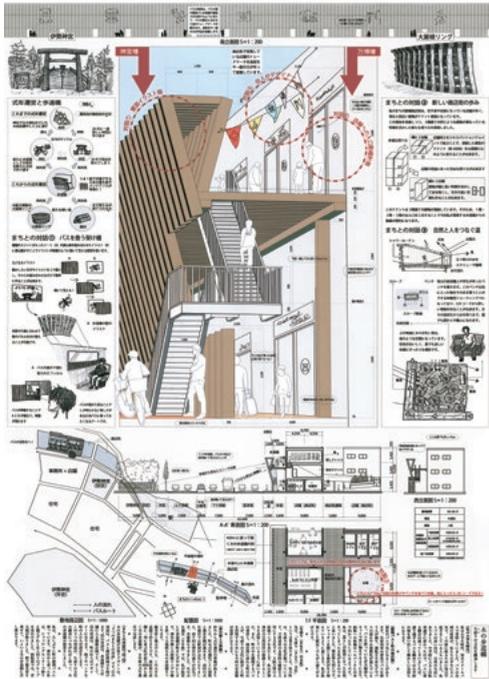
難しかったです。そのため、入選通知が届くまでとても不安でした。入選通知をいただいた時は、私たちが一生懸命考え、試行錯誤したことが伝わったという気持ちが込み上げてきて、とても感動しました。この賞をいただけたのは、先生方や先輩方、両親などたくさんの方々のおかげがあったからだと思います。これからも感謝の気持ちを忘れず、頑張っていきたいと思っています。ありがとうございました。

▲審査コメント／岸下真理

建築とアートの力を利用しながら、環境問題や地域の課題に取り組んでいくことを目指し、小学校のプールという意表を突く場所を舞台に多様な空間とアクティビティが提案された作品である。ミクロからマクロまで様々な視点でしっかりと構築されたプログラムも秀逸であるが、それに負けず劣らず魅力的な建築が建ち上がっていることを多くの審査員が高く評価した。

階段のみの(バリアフリーではない)動線や、分散配置されたそれぞれの建築の形態がシンプルな四角い箱ばかりであることに対しては、まだまだ少し検討や配慮がなされる余地がありそうだとの意見も少し有ったものの、それはこの案の魅力を大きく減じる要素ではなく、若い設計者のこれからの「伸び代」であると私には思えた。

『アートは、観る人に「新しい視点」を提供したり、表現したもので「つながり」を求める気持ちだと思います。』設計者のこの言葉にこの案の全てが凝縮されているのではないだろうか。「アート」そのものを自ら定義し、課題の趣旨である「これからの時代にふさわしい、地域社会とアートを結ぶ豊かなアイデア」を十二分に表現した最優秀にふさわしい提案である。



入選・優秀賞 桐原優奈
三重県立伊勢工業高等学校 2年

「木の歩道橋 生成りの文化を継承します」

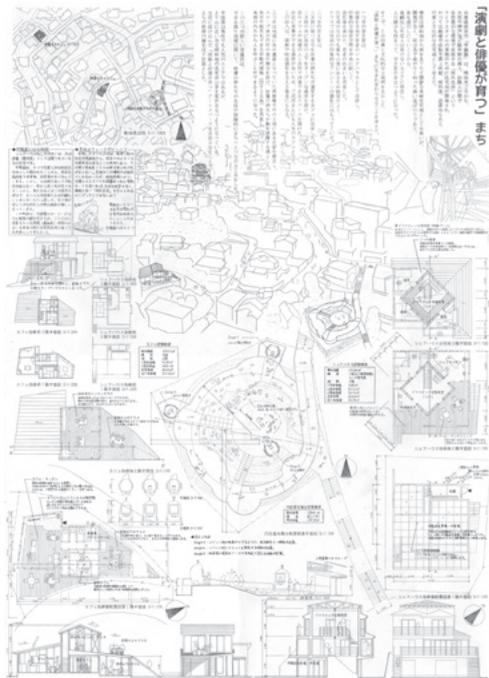
今回のテーマが「まちなかのアートのスペース」ということだったので、自分の住んでいるまちについて深く考えてみようと思いました。私の住む街ではバスの小規模化と商店街のシャッター街化が進んでいたため、その両方を改善することのできる建物を作りたいと考えたのがきっかけです。結果、縦に長い商店街の特徴を活かし、公共交通機関との連携が取りやすい歩道橋という案に行き着きました。バスからの景色で楽しむことができる壁面デザインにより、観光客が盛んにバスを利用し、バスが必要な地元の方を支えます。バスが盛んになることで注目的である商店街にも観光客が増え、地元が賑わいます。そんなバスと商店街が一連托生となる歩道橋を作品にしました。また、神宮の式年遷宮や大阪万博の大屋根リングなど、まだ利用できるのに関わらず、さまざまな理由で撤去してしまう木材を、伊勢の「生成り」という文化に則り活用したいとも考えました。この作品がいろいろな人の目に触れることによって、地元の商店街やバスの過疎問題解決に勤しむ日本中の人助けに少しでもなればよいと思いました。



初めてのコンペだったので、自分の作品が入賞するものなのか、結果が出るまでドキドキしました。提出をした後に、こうしておけばよかったという後悔や、図面の間違いをいくつも発見したり、正直、入賞していないかとも思っていました。先生から結果を聞いた時、最初は努力が報われた嬉しさでいっぱいでしたが、時間が経つにつれ最優秀賞を取らなかった悔しさがそれを上回ってきました。コンペを応募しようと思った当初は「入賞できればいい」という気持ちで取り組んでいましたが、夜遅くまで作業を続けるうちに作品への強い気持ちが湧き、いざ結果が出ると「最優秀賞を取りたかった」という気持ちになりました。このコンペで入賞でき、自分の作品に自信を持つきっかけになって良かったです。

▲審査コメント／梅田武宏

桐原さんの『木の歩道橋』は伊勢の駅前商店街とそれに面したバス道を再生する提案です。バス通学の思い出や空き家の目立つ商店街など身近な街の課題をデザインの力で変えていく意欲的な試みに感服しました。提案の軸となる歩道橋は伊勢神宮や万博で役目を終えた木材を再利用してつくられる構造物である。それは歩行者と自転車の街路を再構成し、商店街の建物への新たな動線を生む。これにより商店街の既存建物へのさまざまなアクセスが可能になり、建物の区画変更やものづくり機能への転用と併せて空間を活性化させようとするものである。さらにバスの窓ガラスと歩道橋の格子面のグラフィックが重なり映像が浮き上がる仕組みは、観光客を含めた利用者に新鮮な風景を提供する。提案のいたるところで『動きや流れ』が意識されていて、人がどう利用してどう感じるか、という街に生きる環境をひろく提案する試みとして評価されました。今後は、アートと『生成りの文化』との関係を深く掘り下げて提案する、歩道橋と商店街との境界に軒やベンチなど人々の居場所を整える、歩道橋から見える街の風景を描写するなど、桐原さんの豊かな表現力を活かして提案を深めていって欲しいと思います。



入選・優秀賞 徳平茅秀・中山嵩規・安田彩央依

兵庫県立神戸工業高等学校（定時制）4年、
兵庫県立兵庫工業高等学校（全日制）2年

「『演劇と俳優が育つ』まち」

かつて劇場や植物園、遊園地などがあり多くの人でにぎわっていた甲陽園。今では高齢化や人口減少によって空き家が目立つ静かな住宅地となっている。その現状を見てかつてのにぎわいをもう一度この地に取り戻したいと思い「演劇と俳優が育つ」まちというテーマを考えた。俳優の卵たちが共に暮らすシェアハウスや地域の人が集うカフェ、そして演劇を上演できるスロープ状の広場を提案した。どの建物も人と人との関わりを生むことを大切に、坂の多い甲陽園の地形を活かした設計にした。地域の人々が俳優たちと関わりながら、日常の中で演劇を身近に感じられるまちを目指した。



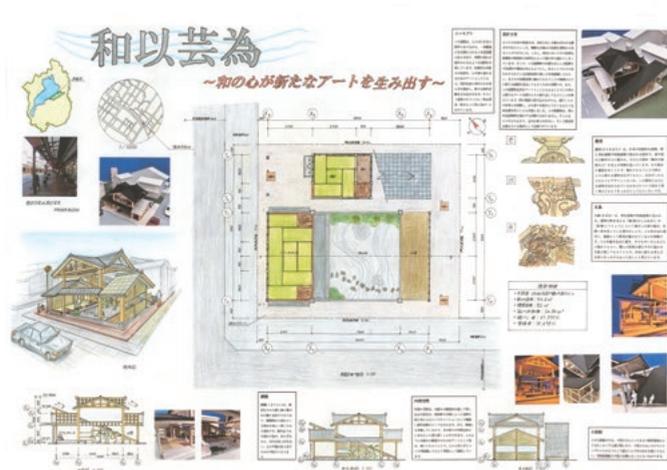
優秀賞の入選通知を受けた時はとても嬉しかったが、同時に最優秀賞を逃したことが少し悔しかった。その悔しさをばねに、これからもっと成長していきたいと思った。また1人では優秀賞を受賞することはできなかったと思う。一緒に協力してくれた仲間や支えてくださった先生、家族への感謝の気持ちを今回の受賞という形で少しでも恩返しできたのではないかと感じている。



▲審査コメント／根木和人

今は高級住宅街として有名な西宮市甲陽園。かつては歌劇場や遊園地などが一体開発された行楽や芸能文化の歴史を持つまちです。しかし近年では高齢化が進み空き家も目立つといいます。そこで点在する空き家の再生や屋外劇場の新設など、俳優たちが暮らし活動する場を挿入することで、まちの新陳代謝を促すという作品です。

大規模開発住宅地が行き着く社会的問題に着目し、歴史的背景を理解した上で新たな仕掛けをつくるというコンセプトの組み立てや、少しずつ手を入れていくという手法はリアリティがあり、作者の思慮深さを感じました。個々の設計では、螺旋状の通路が絡む求心力のある円形屋外劇場や、まちに開いたシェアハウスやカフェへのリノベーションなど、地域との関係を意識した細やかな計画が魅力的で、分かりやすいドローイングも好感を持ちました。新しい仕掛けがまちに及ぼす影響や既存住民との関係性、まちの未来像について、作者の思いやイメージが示されていれば、より説得力のある提案になったと思います。作品から滲み出る作者の真摯な眼差しをこれからも大切に、建築に関わられることを期待します。



入選 安藤結人 滋賀県立彦根工業高等学校 3年

「和以芸為 ～和の心が新たなアートを生み出す～」

私は木工部に所属しており、大工技能を習得する中で木組みや昔の伝統的な技術について学び、木造建築物が持つ構造的な魅力に気づきました。その魅力をまだ知らない人々にも知って触れてほしいと考え、作品のメインテーマとして製作に取り組みました。製作を進めていく中で、木組みだけではなく和が持つ固有の空間概念や精神性についても作品に取り入れたいと考え、枯山水や茶室も平面計画に盛り込みました。



今回の作品は、単に美しい建築を目指したのではなく、和や木組みが造り出す精神的な豊かさや、小屋組みを成す材料が水平や垂直方向に交わっているところを見せるため、壁や天井を取り払い、木造建築物をアートとして街中に再構築するという考えで作品を製作しました。その部分に共感していただけるか不安でしたが入選の連絡を受け、評価していただけたことに何よりもうれしく、努力した結果が報われたと感じました。

▲審査コメント／柳沢 究

「アート」というキーワードから、日本的な木造建築の意匠に取り組んだ応募作が少なくなかった点は、審査をしていて喜ばしいことであった。しかし、その多くは直方体や円筒形のボリュームの表面に、瓦や真壁などの和風要素を記号的に貼り付けるにとどまっていた。対して本作品は、木造架構を空間表現として積極的に見せることを主題として、平面構成と呼応して変化に富む立体的な内部空間を構築している点が秀逸である。枯山水の庭園を覆うように浮かぶ大屋根や、地面に届くほどに伸びた巨大な片流れの瓦屋根は、既成の日本建築のイメージにとらわ

れない力強い造形となっており、実現した姿を見てみたいと思わせる。図面表現においては、中央に配置された平面図がやや魅力に欠ける一方で、ライティングを施した模型写真には空間の魅力が的確に表現されている。墓股や木鼻のドロ잉と提案との関係が不明瞭であることや、大屋根裏側の架構に課題が残る点は惜まれるが、今日ではプロにとっても難しい題材となってしまった和風木造建築に果敢に挑み、力強いアート空間としてまとめ上げた点を高く評価したい。今後も木造建築の研鑽を重ね、建築文化の発展に寄与されることを期待したい。



入選 尾崎希美 大阪府立工芸高等学校 3年

「人とつながるアトスペース」

アーティストを植木職人に見立てて、植木から生まれるアートと地域の関係性や風景を想像しながら設計しました。どうすれば人が集まり、地域が盛り上がるかを考える中で、細河地域の魅力にたくさん気づくことができました。細河には、先代や先々代の植木職人の方々が、何十年もかけて大切に育ててきた木々や、花を咲かせるさまざまな植木がありますが、それらを観覧できる場所がなく、地域に受け継がれてきた植木というアートと、人々が細河の未来について語り合える場を設計しました。

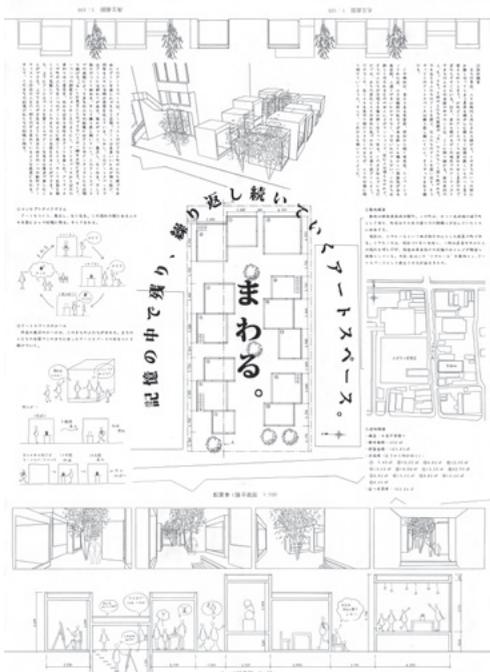
このたびは、素晴らしい賞を頂き、誠にありがとうございます。夏休みの多くの時間を費やして制作に取り組んだので、受賞できてとても嬉しく思います。制作の途中では悩むことも多く、何度も図面の修正を手伝ってくださった先生方や、支えてくださった周りの方々に心から感謝しています。

▲審査コメント／多田正治

池田市細河が日本有数の植木の産地であることに着目し、植木をアートとして鑑賞する空間を提案している。

一見、実直な建築であるが、植木の間を縫うような平面形とアプローチ、植木を鑑賞するために用意された縦長窓など、全体から部分に至るまで巧みにデザインされている。さらに、複数の植木関連施設の近くを敷地として選定しており、将来の施設間の連携を見据えた計画がなされている。丁寧に構成されたプレゼンテーション、床のハッチングや壁や木々の陰影まで描き込んだ平面図、立面図など、表現力も秀逸である。植木を、美術や工芸といった広義のアートとしてとらえることで地域活性につなげるというアイデアも素晴らしい。

惜まれるのが、建築の構造形式として円柱を用いたラーメン構造を採用している点であろう。植木を鑑賞し、植木と調和する建築として、よりふさわしい構造形式や建築表現の可能性があったのではないかとはいえここまで完成度の高い作品をつくりあげた力量は多くの審査員が認めるところである。視野を広げてさまざまな建築に触れて学び、さらなる飛躍を期待したい。



入選 小野桃佳 群馬県立高崎工業高等学校2年

「まわる。～記憶の中で残り、繰り返し続いていくアートスペース。～」

このまちの近くで大きなマンションの工事が始まりました。何気なく過ごしているだけでは、この場所が元々はどんな様子だったのか忘れてしまいます。まちというのは常に姿を変え続け、いつの間になくなっていく景色を懐かしむ間もなく記憶は塗り替えられてしまいます。だからこそ、目まぐるしく過ぎていく日々の中で人々を見守り続けてきたこのまちが、人々の記憶にのこり続け、そしてこれからも続いてほしいという思いで制作しました。このアートスペースは変わりゆく景色の中で変わらずそこにいて、アーティストやまちの人々が共に生活していく中で、記憶と共に残り続けたいと思います。このアートスペースによって、今を生きる人たちのアートを感じ、先人たちのアートを思い出す。そうやって長く人々を見守り続けてきたこのまちが、アートスペースによって人々の記憶に残り続ける。そして、少しでもこのまちが人々の大切な場所になってほしいと思います。



入選通知を受けた時、まさか入選するとは思わなかったのでとても嬉しかったです。また、一生懸命思い込めて作った作品だったので入選することができてよかったです。今後は、この経験を生かしていけるように精一杯頑張っていきたいと思います。

◀審査コメント/久保 岳

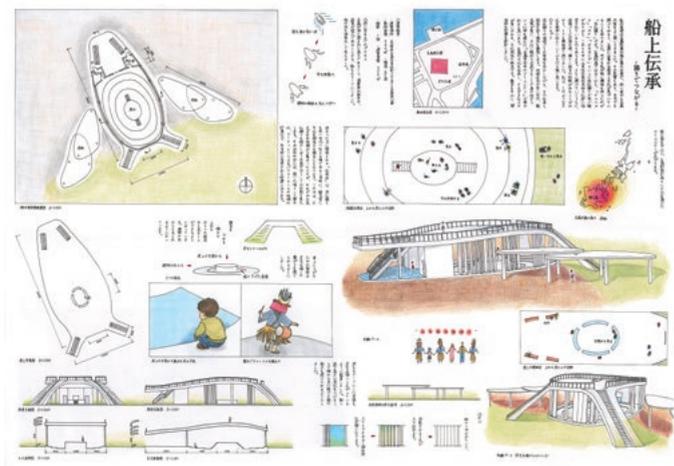
「このアートスペースではアートには終わりが来る。」心を惹かれる言葉だ。アーティストや町の人々が、つくり、かざり、おわらせ、残った記憶とともに、また誰かがつくる、そんなアートスペースの提案である。

ある場所で作品がつくられ、入れ替わっていくという、ある意味あたりまえの提案なのだが、そこでのアートが終わり、場としての記憶が残っていくという着眼点がこの提案を際立たせている。アートに終わりが来ることで、刺激を受けた誰かがアートを始めるきっかけとなり、その移ろいがアートスペース全体を、町を、活動する人をアートの集合体に昇華していく、そんなプロセスがデザインできていることを高く評価した。

場のしつらえも丁寧である。一棟一棟はシンプルでありながら、さりげない雁行、床レベルの操作、スケールの変化により豊かなシーケンスが生まれる。プロセスと同様、完結しない建築がつくられていると感じた。

そして、表題の「まわる。」。動詞であり、表現止めでもない。設計者の作品に対する一貫性に敬意を表したい。

最後に、図面表現も動きに満ちていてとても好感が持てました。作品の隅々まで心を吹き込める設計者として成長してってください！



入選 川口千代 国立明石工業高等専門学校2年

「踊りでつながる」

本作品は、踊りの伝承にはどのような場が求められるのかを探りながら制作したものです。五島列島の念仏踊りは、地域ごとに独自の特徴を持っています。そのため、地域間で人々が交流し、その中で踊りの伝承と発信を担う場所を構想しました。また、前へ進む船をモチーフとすることで、五島列島に息づく歴史や、文化が継承されていく姿を表現しています。舞台を中心にして周囲へと広がる建築空間は、さまざまな人が多様な活動を行えるようデザインしました。世代や地域の垣根を越えた文化交流が生まれ、福江港を中心に五島市全体に広がる新たなコミュニティが築かれていくことを目指しています。



入選を知ったときは、本当に驚きました。A1の紙1枚で設計の良さをどう伝えるか苦戦していたので、コンペティションで評価していただけたことをとても嬉しく思います。そして、以前より自分の作品に自信を持てるようになったと感じ

ています。ご指導していただいた先生には、感謝の気持ちでいっぱいです。今回の経験や新しく得た学びを今後の建築設計に活かしながら、将来の夢に向かって努力を続けていきたいと思っています。

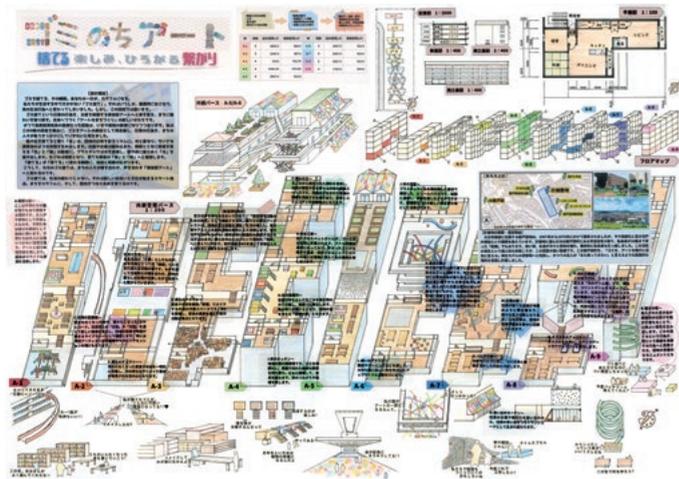
▲審査コメント/奥 貴人

五島列島の念仏踊りを核に据え、地域文化の継承と交流を促す、地域に根ざしたアートスペースの提案である。祖母とのつながりを起点にして地域文化への関心が広がり、五島の歴史や風土、人々の暮らしに寄り添いながら構想が展開されている。地域住民の活動や文化の再発見を行う空間・活動をアートとして位置付けた提案は、課題の趣旨に的確に呼応していると考えられる。

船だけでなく波を含めてモチーフにした空間構成は、俯瞰すると象徴的であり、五島の地理的・歴史的背景を取り込んでいるようにも感じられた。舞台を中心に、上下左右から鑑賞できる構成は、継承が望まれる子ど

もたちの興味を引き、誰もが参加しやすい開かれた場としての可能性を感じさせた。さらに、稼働する壁の工夫を活かしたシーンが描かれ、敷地全体としてランドスケープとの一体化を図るような仕掛けづくりが加われれば、建築としてもより魅力的な提案となったのではないだろうか。

「伝承会」という定期的なイベントを通じて、世代や地域を越えた交流を生み出す視点も盛り込まれていた。今後も日常の出来事や課題に目を向けながら、つながりを意識した地域文化の再発見と共創の場づくりに、取り組んでほしい。



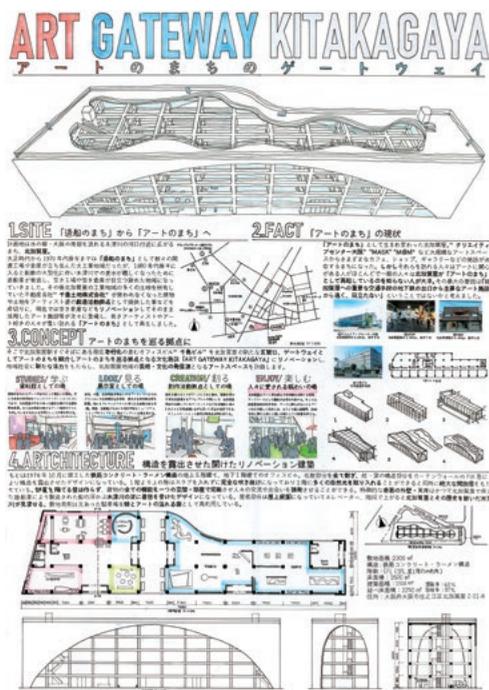
行為や問題を、建築を通じて解決し、人の繋がりを生み出せる建物を形にしていきたいです。

▲審査コメント／糸嶺円路

本作品は、不要となったものや「捨てる」というネガティブな行為を、団地全体を通じてアートへと転換し、まちに新たな賑わいを創出していることとする発想を高く評価した。

高度経済成長期に建設された団地は、住民の高齢化にともない空き住戸が増加しているが、その空間をアートの舞台として再生することで、若い世帯の流入を促し、この団地、ひいては地域全体に活力をもたらす構想が見られる。

また、不要物を不燃物・本・ペットボトル・生ゴミなど具体的に分類し、それぞれのアートへの転換手法を丁寧に検討している点も評価できる。



る建物のリノベーションが必要であるストーリーを創り出している。既存躯体を利用し、造船と周囲を流れる川をモチーフにした外壁ラインにつくり変えながら、内部は創作意欲を掻き立てるような空間構成を目指している。さらに屋上庭園を設け、アート地区のエントランスとして地区を見渡せ、地域の歴史と現代のアートを結びつける工夫を行うという高い提案力の作品となっている。

既存躯体を残し、壁面とカーテンウォールを新設する計画となっているが、室内の壁を設けないコンセプトから、むしろ外壁を設けずに建材ではなくアートで装飾する方が活動とまちが繋がったかもしれない。また、アート活動のわかるような内観パースや外観パースに屋上緑化やアートを想像させる書き込みをすればさらに魅力的な提案になっただろう。

入選 越川桜羽 大分県立大分工業高等学校 3年

「ゴミのちアート～捨てる楽しみ、ひろがる繋がり～」

舞台となったアパート団地は、私が幼い頃に暮らしていた思い出のある団地です。年々空き家が増え、高齢化が進む中で、このまちを少しでも元気にしたいと思い、この作品をつくりました。私たちが日常的に行っている「ゴミ捨て」という行為を、アートを生み出す行為に変えることで、住民たちが自然と集まり、会話が生まれる仕組みを考えました。さらに、瓶や缶、古紙や衣服、生ゴミなど、素材ごとに異なる空間や体験をつくることで、五感を使った参加型アートとして楽しめるよう工夫しました。ゴミを捨てることを「終わり」とせず、「始まり」に変えることで、循環を生み、音や光、色、香りなど五感で楽しめるアートとして表現しています。

入選通知を受けたときは、びっくりしましたが、それ以上に、とてもうれしかったです。何度も現地に足を運び、住民の方に話を聞きながら悩んで作った作品だったので、頑張ってよかったと思いました。これからも、日常に隠れている



同様の課題を抱える団地は全国各地に存在しており、本提案は他地域への展開可能性という観点からも意義深い。

敷き詰められたペットボトルを通して差し込む光が揺らぐピロティや、古着を再利用したカラフルなシェードが掛かるバルコニーなど、空間を活かした表現も魅力的である。

今後は、建物内の個々のスペースのみで完結させるのではなく、団地間の駐車場の活用や団地全体をつなぐ仕組みづくりを検討することで、より一体感のあるアートスペースとして発展することが期待される。

入選 藤本愛己 大阪府立工芸高等学校 3年

「ART GATEWAY KITAKAGAYA～アートのまちのゲートウェイ～」

「まちなかのアートスペース」ということで、まず初めに今現在、アート関連でどのような課題があるだろうと考えました。そこで私は今回の北加賀屋の案を思いつきました。私は前々からアート・芸術が好きで北加賀屋にもよく通っていたのですが『「アートのまち」感』が奥の方まで行かないと感じられないなと思っていました。「駅前が目立つ何か看板のような物があれば分かりやすいのにな…」と前々から思っていたのでその思いをこういった形で図面で表現しました。三年生での卒業設計も美術館を計画していて、今回のコンペで得られた知識を応用して活かせるだろうと思いこちらのコンペを選びました。

朝のホームルームの際に初めて入選を担当の先生に伝えられてすごくびっくりしたのと同時に「がんばってよかったな」というような嬉しい気持ちになりました。今回のコンペはこれまでの設計課題で一番進めていて楽しく、図面も美しいものにするためペン仕上げやコピック仕上げなど新しい表現もたくさん編み出しました。自分的には今までの創作活動で一番の図面ができたと自負していたので提案が認められたということでもとても嬉しいです。ありがとうございました。

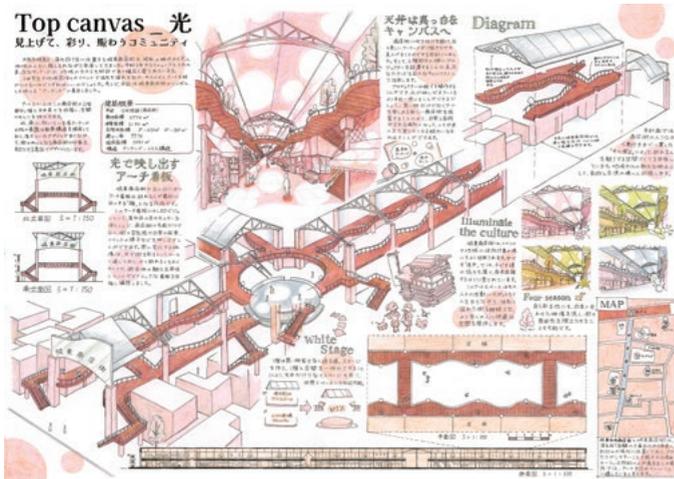


▲審査コメント／恵本涼太郎

大阪市の湾岸地区にある北加賀屋。時代の変化により「造船のまち」から「アートのまち」へ転換したが、市民に周知されているとは言えない。そのような状況を、アートをテーマとしたリノベーション建築により地域の芸術・文化の発信源を再構築する計画である。

現状分析、問題点抽出を行い、再生に必要な機能と場あり方を提案し、アート地区のゲートとなる建物のリノベーションが必要であるストーリーを創り出している。既存躯体を利用し、造船と周囲を流れる川をモチーフにした外壁ラインにつくり変えながら、内部は創作意欲を掻き立てるような空間構成を目指している。さらに屋上庭園を設け、アート地区のエントランスとして地区を見渡せ、地域の歴史と現代のアートを結びつける工夫を行うという高い提案力の作品となっている。

既存躯体を残し、壁面とカーテンウォールを新設する計画となっているが、室内の壁を設けないコンセプトから、むしろ外壁を設けずに建材ではなくアートで装飾する方が活動とまちが繋がったかもしれない。また、アート活動のわかるような内観パースや外観パースに屋上緑化やアートを想像させる書き込みをすればさらに魅力的な提案になっただろう。



入選 吉田万智 大阪府立工芸高等学校 3年

「Top canvas_光 見上げて、彩り、賑わうコミュニティ」

当時、ちょうど地元の商店街がお祭りを開いていたので、この賑わったスペースにアートを設けようと考えたのがきっかけです。小さい頃から毎年楽しませてもらった馴染みのある商店街ですので、その文化を支え、より一層盛り上げられるようなデザインができるように工夫しました。また、イベント時でないときでもアートが活躍し、人々の暮らしを照らして彩るといった意識のもとで制作しています。

志望大学の面接試験が近づいてきた時期に入選の通知を受けたので、一気にモチベーションが上がり、とても心が救われた気持ちになりました。図面にこだわり、地域のことも沢山調べたうえで制作に取り組んだので、多くの人に私の地元の商店街を知ってもらえたらいいなと思っています。

▲審査コメント／野口 伸

恐らくなじみの深い既存のアーケードをサイトとして選び、自分の実体験を基にもっとこうなったらいいなという想いが伝わってくる良い提案です。

日本各地のアーケードは1950年代にその多くが設置され、現在は70年以上が経過し、商店街にとってもはやアーケードがある事で陰鬱であるというような理由で、現在その多くが撤去されたり改修されたりしています。この城東商店街のアーケードも1965年に設置されて60年経過したのちにテント生地の張替を行うリニューアル工事が2020年に行われています。この計画では既にも実施された改修を活かし、新たな演出照明と建物2

階に新設するアートスペース、またこれらをつぶ2階レベルの立体的な歩道により、地上部分の商店と2階のアートエリアが繋がり、新たなシナジーと賑わいを生むしかけづくりを行っています。

既存の計画をよく調べて、その延長線上でさらにどうしたら良くなるかという事を、自分目線でよく考えて計画した事も見て取れ、その姿勢も大いに評価できると感じました。特に今年からデジタルツールが解禁されている中で、敢えてピンク色鉛筆の手書きで全体をまとめている表現もとても効果的で、全体的に温かみと愛情が感じられる良い作品にまとめ上げられています。

●応募学校

- ・愛知県立一宮工科高等学校
- ・大分県立大分工業高等学校
- ・大分県立鶴崎工業高等学校
- ・大阪府立工芸高等学校
- ・大阪府立都島工業高等学校
- ・香川県立高松工芸高等学校
- ・熊本県立熊本工業高等学校
- ・群馬県立高崎工業高等学校
- ・国立明石工業高等専門学校
- ・埼玉県立春日部工業高等学校
- ・滋賀県立彦根工業高等学校
- ・新潟県立新潟工業高等学校
- ・兵庫県立神戸工業高等学校(定時制)、兵庫県立兵庫工業高等学校(全日制) 合作
- ・北海道旭川工業高等学校
- ・三重県立伊勢工業高等学校
- ・三重県立四日市工業高等学校

【表彰式】



左から柏原事務局長、谷口教育小委員長、橋寺教育委員長、指田会長、岸下審査員長、糸嶺審査員

●審査記録

- 10月8日 予備審査：応募作品について応募規定違反の有無を調べ、その検討を行った。今回、敷地概要の記載が無い等一部の作品に要求図面の不備が見られた。それらを予備審査結果として審査会に報告することとした。(教育委員会・工高生教育小委員会)
- 10月18日 審査会：審査委員10名により当日審査が行われた。(審査時間13:30~17:00)

●審査経過

審査を開始するにあたり、本年度の応募校数、応募作品数の報告を行い、一部作品の要求図面に対する不備があった事を予備審査報告として審査会に提示された。その結果、審査では審査対象とする作品において違反事項は考慮するものとして、118作品を本審査の対象とすることとし、続いて審査委員長より審査方針の確認があり、審査に入った。

■1次審査(審査員10名) 118作品→35作品
全応募作品について審査委員1名につき10作品を選んで投票し、集計。

| 得票 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
|-----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
| 作品数 | 0 | 3 | 0 | 0 | 4 | 1 | 1 | 3 | 9 | 14 |

票を得た35作品を1次審査通過とした。(審査時間13:35~15:00)

■2次審査(審査委員10名) 35作品→13作品
最優秀作品1点、優秀作品2点

1次審査通過35作品のうち、まず9票を獲得した作品について、最優秀賞および優秀賞候補作品3点が確定された。次に、入選7作品枠の審査に移り、得票数1票の作品について次のステージに残すべきかどうか審議され、続いて得票数2~3票の作品についても違反事項を確認しながら、各審査員が推薦理由を説明しつつ審議が進められ、その結果、最優秀賞および優秀賞候補作品3点を除く10作品に絞り込まれた。なお、この10作品の中から、最優秀賞および優

秀賞候補に加わる作品はなかった。(審査時間15:10~16:00)

■3次審査(審査委員10名)
13作品→入選作品10点
2次審査を通過した、最優秀賞および優秀賞候補作品3点を除く10作品より入選作品7作品を選出することを審議し、議論を重ねた後、再投票により入選作品7点が確定された。引き続き、最優秀賞および優秀賞候補作品3点から、各審査員から作品に対する意見が述べられ、審議を重ね、最優秀賞作品1点、次いで優秀賞作品2点を確定し、審査を終了した。(審査時間16:00~17:00)

会誌「建築と社会」誌への審査経過報告掲載にあたり、入選作品10点について審査委員が分担してその評価を誌面にまとめることを約束し、審査会を終了した。(終了時刻17:00)

図解 建築と構造の接点 トラブル予防のツボ100

仲本尚志・馬渡勝昭・長瀬 正 著

トラブルにつながりやすい建築デザイナーと構造エンジニアの協業不足。その「接点」を紹介し、トラブル予防のノウハウを解説。



A5判 256ページ
定価 本体2,800円+税

図解 間取りの処方箋 暮らしから考える住宅設計・改修のポイント

堀野和人・小山幸子 著

住まいの8つの空間について、実際に人が暮らしていく上で不都合が生じる「お困り間取り」とその改善ポイントを解説。



A5判 184ページ
定価 本体2,600円+税

図解 建築と設備の接点 トラブル予防のツボ

仲本尚志・馬渡勝昭・赤澤正治 著

騒音・振動・漏水・結露・臭気・メンテしにくい…。トラブル予防の方法を設備別にイラストで詳細に図解。

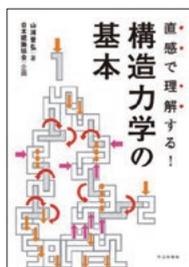


A5判 232ページ
定価 本体2,800円+税

直感で理解する！ 構造力学の基本

山浦晋弘 著

「構造力学」の先にある「構造設計」の魅力が見えてくる一冊。一級建築士試験にも役立つ「力学問題アラカルト」付き。



A5判 216ページ
定価 本体2,400円+税

図解 雨漏り事件簿 原因調査と対策のポイント

雨漏り110番技術班 監修
玉水新吾・唐鎌謙二 著

多数の事例をもとに実務に役立つポイントを解説。ヒアリングシートと現場写真で原因と対策を丁寧に図解した一冊。



A5判 216ページ
定価 本体2,500円+税

図解 住まいの寸法 暮らしから考える設計のポイント

堀野和人・黒田史香 著

生活行為の理にかなった寸法をわかりやすい2色刷イラストで紹介。寸法の持つ意味を知ること設計実務に活かせる一冊。



A5判 200ページ
定価 本体2,600円+税

図解 一発で通す！確認申請 Q&Aでわかる新築・増改築のポイント

野口 元・平沢隆志・仲本尚志 著

申請する側&審査する側のベテラン著者がわかりやすく図解。増改築・リニューアル関連の確認申請のポイントも手厚く解説。



B5判 192ページ
定価 本体3,200円+税

直感で理解する！ 構造設計の基本

山浦晋弘 著

実務で押さえておくべき項目や設計上の落とし穴を、イラストや写真、図表と平易な文章で直感的に理解できるよう解説。



A5判 216ページ
定価 本体2,400円+税

〈プロのノウハウ〉 建築現場のコンクリート技術

柿崎正義・玉水新吾 著

仕事の流れにそって「そこが知りたい」「今さらきけない」ポイントを図・写真・マンガでわかりやすく解説。よくあるトラブル事例集付き。



四六判 220ページ
定価 本体2,000円+税

〈プロのノウハウ〉 写真マンガでわかる 工務店のクレーム対応術

玉水新吾・青山秀雄 著

施主とのコミュニケーション不足から生まれるクレームを網羅し、正しい事前説明とクレーム発生後の対応をわかりやすく解説。



四六判 220ページ
定価 本体2,000円+税

設計・監理・施工者のための 建築品質トラブル予防のツボ

仲本尚志・馬渡勝昭 著

トラブルの起こらない建物のために知っておくべき建築工事の基本知識とトラブル予防のポイントを「危険予知と予防」の観点から解説。



A5判 256ページ
定価 本体2,800円+税

図解 写真マンガでわかる 住宅メンテナンスのツボ

玉水新吾・都甲栄充 著

住宅の部位別に写真マンガでチェックポイントと対処法、ユーザーへのアドバイスの仕方をやさしく解説。



A5判 248ページ
定価 本体2,800円+税

連載「建築と社会を考える」の再開にあたり

日本建築協会は「建築を通じて社会に貢献する」ことを活動の重要な柱としており、その時代の「社会」における「建築」の在り方を考察し、社会貢献に繋がる活動を行うとともに、会誌『建築と社会』ではそれらを発信し続けてきました。

連載「建築と社会を考える」は2015年10月より2022年3月まで全55回に渡って連載しましたが、本年より再開させることとしました。本連載は現代における「建築と社会」、例えば、人びとの生活、住まい、歴史、自然環境、都市景観などと建築との関わり、あるいは、技術者倫理や建築生産を巡る意思決定のあり方などについて考察しています。これまでの連載では、主なテーマとして「高齢者社会」「障害者福祉」「防災・災害復興」「地域コミュニティ」「都市景観」「歴史的建造物」「住宅・住環境」などについて学識経験者、研究者、建築設計者をはじめとするいわゆる建築の専門家の方々にそれぞれの専門分野における「建築と社会」について考察していただきました。

再開にあたっては引き続き専門家の方々にそれぞれの領域において考察を深めていただくとともに、専門家だけではなく、社会の中で違った立場で建築と向き合い携わっておられる方にも執筆していただき、建築と社会について様々な視点での見解を紹介していきたいと考えています。

本号では連載再開の初回として文筆家甲斐みのり氏のインタビュー記事を掲載しています。また、本連載記事は日本建築協会のホームページにも掲載し、会員以外の方にも読んでいただけるようにしました。「建築と社会」に纏わる多種多様な考えや知見をより多くの方に届け共有することで、建築に興味を持ち、関わる方々の裾野を広げていければと思っています。

編集企画委員長 三宗知之

建築の楽しみ方

文筆家 甲斐みのり

NO.56

●まちに出てみると自分の好きなものだらけ

私の両親が俳人だったのですが、夫婦の会話を五七五でするぐらゐの特殊な家庭に生まれ育ち、私も子どもの頃から言葉のリズム感のようなものがすごく好きでした。その頃は歌番組がたくさんあったので、昭和の歌謡曲を聞きながら作詞ごっこをして遊んでいるような子どもでした。家族で遊びに行く場所もディズニーランドのようなところには連れて行ってもらえず、週末は親が俳句を読むために野山に行っていました。ゲームなども買ってもらえなかったのですが、本だけは自由にも買ってもらえる環境で、それをずっと読んで育ってきたので、子どもの頃から本にまつわる仕事や文章を書く仕事に就きたいと思っていました。大阪芸術大学の文芸学科に進学し、はじめは文芸学科で勉強していたら本の仕事に就けるという思い込みがあったのですが、実際は本の仕事に就ける人なんて少ないということが分かり、その後人生に迷って自分探しを始めました。ある日、藤森照信さんや赤瀬川原平さんが路上観察学会という活動をもとに出版された『京都おもしろウォッチング』^(注1)という本を見つけました。「トマソン」と呼ばれる、階段が取り払われて高いところに残った扉のような、まちなかの不思議な風景や建築を紹介している本を読んですごく面白いなと思ったのです。そんなふうにあちを見たり路上観察をすることも人生の楽しみの一つになるということを知り、それからまちなかで見つけた面白いと思うものをカメラで撮り歩いて楽しむようになりました。また、日本のサブカルチャーの元祖と言われている植草甚一さんの『ぼくは散歩と雑学がすぎ』^(注2)や『いつも夢中になったり飽きてしまったり』^(注3)といったまち歩きの本を見つけて「こんなことで本になるんだ」という衝撃を受けたのです。仰々しくなければ本じゃないと思っていたのですが、植草さんの本は神保町のまちを歩いて古本屋を巡ってコーヒーを飲んだということを延々と書いている。でもそれが私にとってはすごく面白く感じました。藤森さんや赤瀬川さんがまちを観察して誰の目にも止まらないようなものを大の大人たちが本気で学問のように語り合っていることがすごく面白かったのです。まちに出て、まちを見渡して、まちを歩いていると、自分の好きなものだらけということに気が付き、自分もまちに出ていろいろ見つけていこうと思ったのが学生時代であり、それが今の仕事の根底にあると思っています。

●「好き」を伝えることはささやかな平和活動

私は文筆家と名乗りながら文章を書くこと自体はあまり得意ではありません。書くことは一生懸命やっていると時間がかかってしまいます。それよりも先に何かを見て「好き」という気持ちがまず湧き起こってきて「心がときめくなー」という思いを人と共有したい、伝えたいと思うのです。「好き」なことを伝え、共有することはささやかな平和活動だと思っています。「好き」を見つけた時ってすごく機嫌が良くて何かを責めるような気持ちにならないのです。自分が好きなものに満たされているとみんなも満たされるのではないかと。みんなが「好き」と思う気持ちを日々育てていくと世の中はどんどん平和になって、お互いを責め合うのではなく、お互いの好きなものを認め合って世の中が平和になると信じています。本をつくるのはその平和活動をするという意味でもあり、写真の力も借りながら不得意な文章を頑張って書いているという感じです。

建築の分野は専門的で、自分が普段やっているお菓子や手土産のジャンルとは違う特別な世界とと思っているのですが、自分のように建築が好きだけど難しいことは分からない、でも「好き」という気持ちだけはあの人たちのためにちょっと通訳をするような感覚で文章を書いています。難しくとらえなくても建築は受け入れてくれるよということを伝えたい。建築の世界は学問であり数字の世界でもあり専門分野であるけれど、自分がファンだと言って関わったり飛び込んだりしてみたら、建築そのものや建築に携わる方々にもすごく温かく優しく心深く受け入れてもらえたという経験をしたので、「安心してみんなも好きって言うていいよ」ということを伝えたいと思っています。私も建築の専門用語を一目で理解できないので、難しい用語をわかりやすく書くようにしています。建築を見るときには、調べればわかる建築家の名前や建てられた年代、様式などを必死に覚えることよりも、とにかく足を運んで、愛でて、声に出して「好き」と言うことが大事です。建築をつくられている方やそこを守っている方に私たちのような「好き」と思う人がいるということを伝えることによって、さらにどんどんよい建築ができたり、守られていったりするのだと思います。声に出してファンがいますよということを伝えていくために、通おう、行こう、足を運ぼう、愛でようということを伝えていきます。

●古い建物が纏うただものではない気配

大学に入学するときに生まれ育った静岡から都会に出ることになりますが、大阪はやっぱり自分にとって本当に大都市だったので大阪の風景というのはすごく面白く刺激的でした。大学の授業で中之島図書館に行って司書の資格を取るための資料を調べてくるような課題が出たのですが、図書館に行ったら課題なんかよりも「なんだこの図書館は！」という衝撃を受けました。神殿のような建物に圧倒されてここが本当に今使われているということにすごく不思議に思いました。建築との関わりはこの中之島図書館に行ったことがすごく大きなきっかけでした。それから中之島の中央公会堂や天王寺の市立美術館に足を運んで中に入ったりしてみました。私にとって大阪時代は建築に対する興味としてはまだそこまで開花はしていなくて、誰が設計したのかなぜ建てられたかなどは知らず素敵だなという程度に思っていました。ただ、古い建築には特殊な雰囲気があり、ただものではない気配というか絶対何かがここにはあるといった感覚が先にくるのです。どう

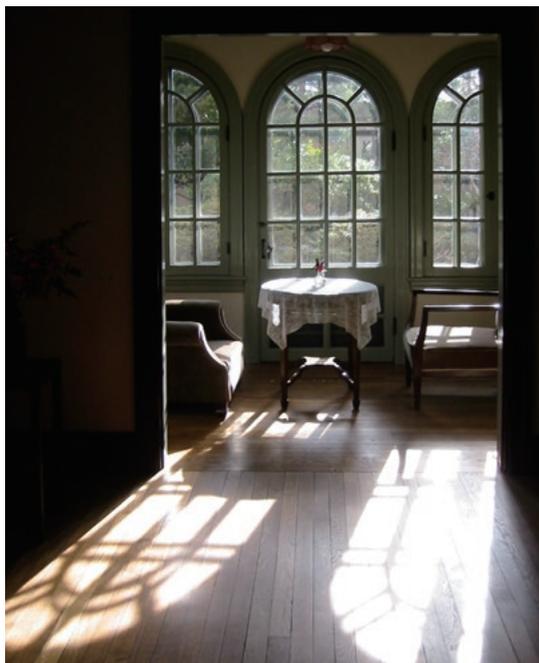


大阪府立中之島図書館

してここにこれがずっと残っているのだらうと思い、建物の歴史などをもっと深く知りたいと思ったのですが、情報を得たいと思っても大阪にいた時は今のように簡単にネットで検索もできなかったもので、ちょっとした説明書きやパンフレットのようなものを読むだけで、その後忘れてしまうような感じでした。靈感のようなものでは全くないのですが、歴史のある建物は10年、20年では纏えない気配を漂わせていてそこが気になっていました。

●物語の主人公になれる建築

一番の大きな転機は京都に引っ越した時でした。学生時代に将来に迷って少しいつ状態になってしまい、このまま大阪で家に閉じこもって悩んでいてはだめだと思って心機一転自分が好きところで暮らしてみようと思ったのです。高校時代に修学旅行で行った際に素敵だなと感じていた憧れの京都に住んでみたいと思い引っ越しました。下鴨神社の近くに住んでいたのですが、ある時友達から「すぐ近くの素敵な洋館でワインを飲めるイベントがあるので行ってみたい」と誘われて行ったのです。それがウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計の駒井家住宅でした。その時にヴォーリズという建築家を初めてちゃんと意識しました。以前に行ったことがある山の上ホテルや大丸心齋橋店も設計したと聞き、自分が見たり行ったりした建築と繋がったのです。ヴォーリズが暮らした近江八幡市が私のふるさとの富士宮市と夫婦都市であるという関係もわかり、これまで断片的に知っていたことが、ヴォーリズをもとに繋がっていったことがすごく面白く感じました。駒井家住宅では着物を着ている奥さんが歩きやすいように設計された階段のことなど、ボランティアガイドさんが説明してくれるお話もとても面白く、駒井博士が植物を育てていた温室の中に身を置いてワインを飲みゆったり過ごしました。クリスタルのドアノブや、洋室なのに照明に千鳥の模様がついているところなど、いろんなものがかわいく愛しいと思える体験でした。大学を卒業してなんとなくやりたいことがあるけれども何もできない自分に悩み鬱々としていたのですが、駒井家住宅のような素敵な建物の中にいる自分は、物語の主人公になれるような気がしたのです。自分は社会において何も意味のない人間なのではないかとすごく不安に感じていたのですが、ここにいると自分もこの広い世界の中で物語の登場人物であり、主役にもなれるような気がしました。そこで本当に建築って素敵だと思えたのです。それから山形政昭先生が書かれたヴォーリズ建築の本を読み建築巡りをするようになったのが20代の頃でした。



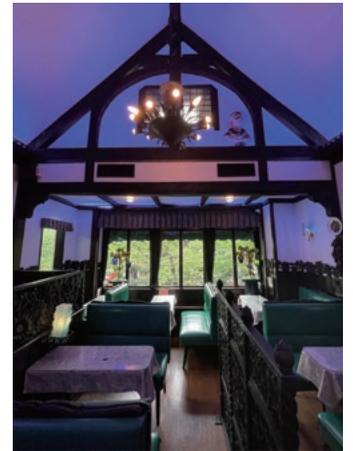
駒井家住宅

●小さなかわいい喫茶店

住宅やレストラン、ホテルなど昔の建物は本当に素敵だなと思っていて、今建てられる建築は同じように感じないことを不思議に思ったりもします。古い建物は自分だったらどうやって住むか、過ごすかなどを想像することが本当に楽しいです。駒井家住宅を訪れた時は今と違って通年で一般公開はされておらず、年1・2回のイベントでした。たまたまワインを飲めるイベントだったので1時間ほどゆっくり滞在できてしかも椅子に座って過ごすことができ、床が近く視線が低くなることによって立っていると気づかないことが見えてきたりします。こういう場所でお茶ができたり食事ができたりすることがすごく面白いと思うのです。京都には喫茶店としては初めて国の登録有形文化財に指定された「フランソア」のほか「ソワレ」「進々堂京大北門前店」「築地」などゆっくり過ごせる古い建築がたくさんあります。泰山タイルを使った喫茶店もあり、色とりどりのタイルがかわいい。こういう柄のワンピースが欲しい、こういうアクセサリが欲しいなど、本当に自分の気持ちがかんたん上がっていきます。小さなかわいい喫茶店だけでなく京都市京セラ美術館などもそうですが規模の大小にかかわらず、壁・床の仕上げや照明器具などいろんなところに視線がいきってしまい、建築の中に身を置くだけでとにかく楽しいです。



フランソア喫茶室



喫茶ソワレ

●文化と物語がある大阪・京都

大阪も京都も文化の厚みが圧倒的に違います。まちそのものに文化と物語があり今でも大阪を歩いていると素敵だなと思うビルがたくさんあります。大阪も京都もいい意味で癖があり人もまちも癖が強い。私は癖が強いものが好きでちょっとした違和感があるからこそ立ち止まるし、より深く知りたいと思うのですが、藤森さんたちの路上観察学会がきっかけかもしれません。他の人が通り過ぎてしまうものを自分は面白いと思うかどうかで、人生の豊かさや面白さが変わってくるのではないかと感じます。そういう自分でよかったですし、それは大阪や京都にいたからというのが大きいと思っています。静岡生まれ静岡育ちの私にとって大阪は海外でした。文化も言葉も食べ物も違うと感じるような環境の中で、何かを面白いと感じることがすごく鍛えられました。その後京都に行き20代前半までを関西で過ごせたことがすごく貴重だったと思います。今はある程度の地理感もありますし、大人になっていろいろな経験や知識を積み重ねた上で大阪や京都に行くのとあの当時よりもさらに楽しいです。私はまちをよく歩くのですが、大阪や京都は地続きで面白さが広がっているように感じます。一方で東京は、例えば阿佐ヶ谷とお隣の高円寺、荻窪、西荻窪とは全く雰囲気が違います。一駅ごとに個性が違ってそれはそれで面白いのですが、大阪や京都はまたちょっと違う感じがします。

●母校の建築に萌え直す

中学一年生くらいの頃から何となく自分が普通の環境に馴染めていないと感じ、ちょっと変わり者がいる世界に行きたいと思っていました。映画や音楽、ファッションなどにもっと触れたくて、芸大に行けばそういう仲間がいると考えて芸術大学の文芸学科に行きたいと思ったのです。調べると日本大学と大阪芸術大学に文芸学科があり二択でした。高校生の時に大学の見学に行っただのですが、大阪芸大は信じられないほど田舎の山の中であって、山全体が学校のような環境が、都会の中にある日藝よりも面白いと思って進学することに決めました。昨年の10月に卒業後初めて大阪芸大に久しぶりに行ったのですが、学生時代の私は何とも思っていなかったのに高橋航一さんが設計した校舎がすごく素敵でカッコいいと思いました。毎日通っていた通路でさえカッコいいと、萌え直した感じです。写真をいっぱい撮っていたら学生たちから何をしているんだというような目で見られていたのですが、あなたたちは今すごく素敵なおとこで学んでいるということをお伝えになりました。キャンパスに入ってすぐの食堂にある、一見すると無意味に見える丸いカプセルも、それがあつかないかで空間の質が違うなどと考えながら楽しく過ごしました。学生の頃は知識がなかったのですが、今の自分であれば毎日ここで学べる幸せを理解できるわけで、経験を積み重ねることの大切さを感じた瞬間でした。

●自分だけの新たな宝物が見つかる旅

旅の行き先をどこにするか、最初は池波正太郎さんの真似をすることから始めました。池波さんの著書『散歩のとき何か食べたくなって』(注4)や『よい匂いのする一夜』(注5)に、大阪、京都、金沢、松江など都市ごとに章立てて日本全国のことが書かれています。内容は食べたものや泊まった宿、お土産などについてですが、その中にクラシックホテルのことが書かれていて、20代の頃に真似してそれをたどり始めました。日光金谷ホテルや浦郡のホテル、山の上ホテルなど、その頃は気軽に行ける金額ではなかったのですが、コツコツ貯めて半年に1回行くということをしていました。実際に行ってみると、池波さんが書いていることだけではなく、本に載っていないけれどおいしいお料理やお土産物など、自分だけが発見した好きだと思うものが見つかるのです。好きな人の真似をしてみたら、自分だけの「好き」が見つかるようになってきました。その時代はGoogle MAPのような便利なものはないので雑誌の略地図や紙の地図を頼りに行くのですが、迷ったら迷ったなりに面白いものが見つかる。ちょっと不便な中で自分だけの新たな発見や宝物が見つかることが面白くて、それを見つけるために旅に出るようになりました。



山の上ホテル

●人の心をほぐしていく「かわいい」

建築を見ることや取材することの一番の原動力は「かわいい」だと思うことです。今でこそまちの中で写真を撮る人が増えていますが、20年前に私が一人で建築をみて「かわいい」と言いながらタイルや窓枠、手すりなどの写真を撮っていると「変わった人がきた」と思われていました。パン屋さんやお菓子屋さんに入った時に「このパンはすごくかわいいと思います。いい顔していますよ。」と言ってすごく褒められていると、最初は怪訝な顔をされるのですが次第に心を開いてくれるのです。「かわいい」という言葉は人の心をほぐしていくのだと思います。私が監修させてもらった「名建築で昼食を」(注6)というTVドラマの中で、田口トモロヲさんの「乙女心って女性だけのものじゃないでしょ」というセリフがあるのですが、年齢や性別を問わず何かを見て一目惚れをするような気持ちや「キュン」と射抜かれるような気持ちは、幸せ度を上げてくれるものだと思います。その理由もなく好きと思う気持ちを、建築やパン、お菓子、店構えを見た時に感じる人が多いです。建築で言うとモダニズムの直線のかっこよさも好きなのですが、やっぱり一番かわいいと思うものは、ちょっと歪んでいたり、不格好だったりするものが多いです。コテの跡が残っているとか、職人さんの手仕事で必ずしも同じ仕上がりではないところを見つけると、そこが「かわいい」と思いますし、パンなどのパッケージでもコンピュータでつくったグラフィックよりも手描きで描いたようなレタリングや、いわゆる「へたうま」といわれるような絵などもかわいいと思います。

●建築めぐりは推し活

私はもともとシャイですごく人見知りですし、取材も得意な方ではないので「建築の写真を撮っていいですか」と声をかけなければいけない時に最初は緊張していました。ですが「好き」と言われて機嫌が悪くなる人はあんまりいないということにだんだんと気付きはじめたのです。最初は気難しそうなおじいちゃんも、私が「かわいい」「好き」と言っているとだんだん顔がほころびます。小難しいことじゃなくても「これすごくかわいいと思いました、好きと思いました、写真撮っていいですか」「どうしてこれをつくったのですか」と単純な質問をしているとどんどん面白い話を聞くことができ、心を開いてもらえるし喜んでくれます。クラシックホテルなどでもスタッフの方に「すごく素敵ですね」と言うと「お部屋を見えますか？」と言われたり、普段入れないところに入れてもらえたりなど、コミュニケーションをとりながら、礼儀をわきまえつつどんどん踏み込んでいった方がいいと気が付きました。

建築ツアーを開催したり参加することもあるのですが、笠原一人先生と宮崎県のまち歩きをしたことがあります。その時に笠原先生が「建築の写真を撮ることや、その人に素敵ですねと声をかけることはすごく大事」「この建物をいいと思う人が増えると、オーナーさんが残そうかなと思うかもしれない、そうしたら建物が残るか残らないかわかる。だからどんどん好き、かわいって言った方がいい」とおっしゃっていました。それで私も自分が開催するときには「建築をアイドルとしてどんどん写真を撮っていいと思います」と言うようにしています。ただそれが周りの迷惑にならないように気をつけなければいけないのですが、参加者の皆さんに「建築めぐりは推し活だ、建築旅は推し活の遠征。ファンですということを伝えよう。私たちは建築という推しを愛でている、いいことをしているのだから仲間をどんどん増やしていこう。そうすることでいい形で建築が残っていったり、いい建築が建っていく。私たちには小さな力しかないけれど、ファンの声を届けよう。」と伝えています。同時に推し活をする時はちゃんとルールを守り礼儀を持つことが大事です。建築を訪れて鑑賞する時には、声をかけてから写真を撮ったり、むやみに触らないなどルールや礼儀を守りましょう、ということも共有しています。

●建築ファンの裾野を広げる

東京建築祭や京都モダン建築祭などの建築ツアーに来てくださる方は、2割ぐらいがコアな建築ファンですが「写真を見て素敵だなと思い、甲斐さんがやってくれるならと来てみました」という方が8割ぐらいとすごく多いです。そのたびに「基本的な知識は調べたら出てくるから覚える必要はなくて、自分の目で見て感じて、今この場を楽しみましょう」「いまここに来て、なにが次の手がかりを掴んで帰ってください」というお話をします。写真を撮ることもいいし「この建築家さん素敵だなと思ったら他にどんなものを設計しているか調べてみて、次はそこに行ってみよう」「建築ツアーが楽しいと思ったら次もまた参加してみよう」「自分はタイルが好きだからタイルが素敵な場所に行ってみよう」など、自由に楽しむことが大事だと思います。参加者の中には本に載っているところを全部巡ろうと、行ったところに色を塗ってスタンプを押していくように楽しんでいる方もいらっしゃいます。「学ぶというよりも純粋に行く楽しみを見つけてください。建築を見る時の柱のようなものを一人一人が持ったらいいですよ」ということを伝えています。ある人はいろんな建築で押したスタンプを集めているノートを見せてくれたり、行く先々のポストカードを買って私にプレゼントしてくれたりします。みんながそれぞれの楽しみを見つけて、それを私にも伝えてくれるのが嬉しいです。私も建築土産のようなものが好きで、ステンドグラスの模様がグッズになっているとつい買ってしまいます。そういったものを買う人が増えれば、またつくってくれる建築も増えるのではないかと思います。どんどん仲間が増えて、建築ツアーに参加して下さる方が自分がこんな体験しましたよと話してくれるのがすごく嬉しいです。

私は最近になって建築をお仕事にしている方たちと直接お話しする機会を持てているのですが、一般の人をもっと設計者の方とお話できるような機会があればいいのではないかと思います。東京建築祭で壺中居^(注7)のツアーをしたとき、設計事務所の方に直接案内をしていただいた後、場所を変えてみんなでお茶をしました。参加者はみんな現役の建築家や設計者の方と触れ合う機会なんてほとんどないので、設計者の話を聞くことを楽しませてくれてすごくいい場だと思いました。「壺中居のことをよく知らないけれど応募してみても当たったから来た」という人もいたのですが、そこには楽しもうという気があり、みなさん受け入れ態勢を持っていると思います。私はどちらとも接点を持っているので、お茶や食事ができる解説付きツアーで建築に携わっている方たちのお話も聞けるような場をつくる役割ができればいいと思っています。さらに私たちのような一般の人だと建築にまつわるちょっとしたトリビアのような面白さや、設計者の「ひととなり」に興味を持つことがあります。設計者のちょっとしたエピソードにみんなが興味を持って、その人を面白いと思ったり、魅力を感じたり、そういうところからもファンは増えるし、ファンの裾野を広げていくことにもつながると思います。



東京建築祭の様子（2025年開催） ©東京建築祭



壺中居（竣工当時の様子）

●世の中は自然と建築できている

一般の建築ファンの方は、建物の管理をしている方や解説をしてくれるボランティアの方とは接する機会があっても、建築設計という職業に携わっている方と触れ合う機会がありません。設計者の方とお話すると、個性的で面白い方がたくさんいらっしゃいます。みなさん独特の雰囲気を持っていたり、独自の美学があったり、チャーミングな部分もあつたりします。私はこの世の中は自然と建築できていると思っています。自然と話すことはできないけれど、建築をつくっている方たちからはいろいろな話を聞くことができます。その接点がなさすぎるから建築を難しいと思ってしまうのかもしれませんが、世の中こんなに建築だらけで成り立っているのに、それらをつくっている方たちと触れ合っていないことが不思議に思えます。まちを歩いている時に見える建築全てに設計者や建てている技術者がいると思うと、果てしなく楽しみが広がりますし、そういった方々と触れ合うことで、建築との向き合い方も、もっと楽しい方向に持っていけるのではないかと思います。

本頁は東京都杉並区某所にて行ったインタビューをもとに作成しています。

聞き手：三宗知之（日本建築協会編集企画委員長）

北村政尚（日本建築協会U-35委員）

注1）『京都おもしろウォッチング』赤瀬川、他著（新潮社/1988年）

注2）『ぼくは散歩と雑学が好き』植草基一著（晶文社/1970年）

注3）『いつも夢中になったり飽きてしまったり』植草基一著（番町書房/1975年）

注4）『散歩のとき何か食べたくなって』池波正太郎著（平凡社/1977年）

注5）『よい匂いのする一夜』池波正太郎著（平凡社/1981年）

注6）『名建築で昼食を』（テレビ大阪/2020年）

注7）『壺中居』東京都中央区日本橋にある店舗、東洋古美術を取り扱う。

東畑建築事務所 設計（1973年）

写真提供：甲斐みのり氏（壺中居、東京建築祭の様子を除く）

東畑建築事務所（壺中居）

東京建築祭実行委員会（東京建築祭の様子）



かい・みのり

1976年静岡県生まれ。大阪芸術大学卒業後、数年を京都で過ごし、現在は東京にて活動。旅、散歩、お菓子、手みやげ、クラシックホテルや建築などを主な題材に、書籍や雑誌に執筆。『歩いて、食べる 東京のおいしい名建築さんぽ』はドラマ「名建築で昼食を」の原案に起用された。



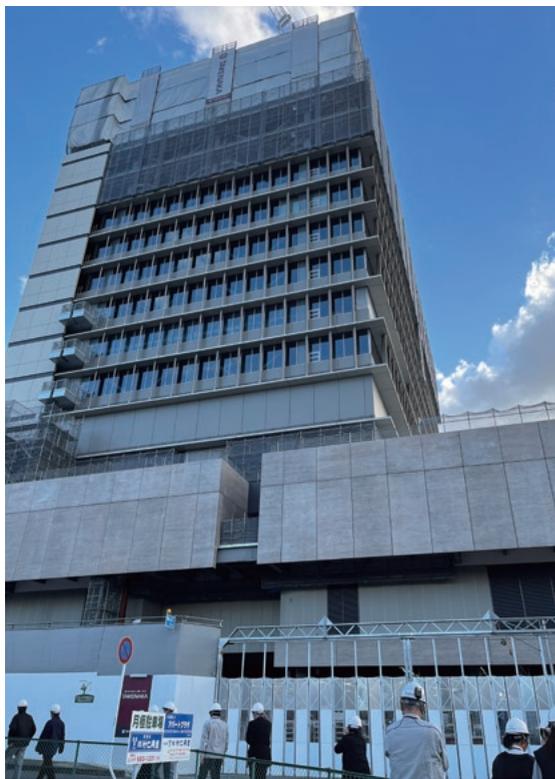
活動報告：建築次世代委員会主催 第10回 学生のための現場見学会 株式会社村田製作所守山イノベーションセンターPJT見学会

日時：2025年10月28日（火） 15：00～17：00

講師：株式会社竹中工務店 作業所長 遠藤智昭氏 ほか

参加者：12名（2回生：1名、3回生：11名）

参加委員：担当・浦瀬誠（竹中工務店）、
中村文紀（東畑建築事務所）、川上比奈子（摂南大学）、松村 明（安井建築設計事務所）



JR守山駅前に建設中の地上18階建ての外観

【建築概要】

工事名：株式会社村田製作所 守山イノベーションセンターPJT

所在地：滋賀県守山市浮気町

設計施工：株式会社竹中工務店、高砂熱学工業株式会社、東邦電気産業株式会社

規模：S造（基礎免震）、地上18階・塔屋2階、延床面積約64,589㎡

工期：2024年3月～2026年12月（予定）

概要：村田製作所の新規事業開発拠点。「内知をつなぐ」「地域につなぐ」をコンセプトとした、免震構造を有する高層ビル。



現場事務所会議室で事前説明



現場屋上の臨場感に圧倒される学生

第10回となる学生向け現場見学会は、JR守山駅前で建設が進む大規模プロジェクトを舞台に開催された。本工事は、大型タワークレーンを用いた積層工法による鉄骨建方や、高層部の無足場工法など、都市型高層建築の最先端技術が集約されている現場である。当日は躯体工事から低層部の内装仕上げへと移行する最盛期にあたり、建設現場のダイナミズムを肌で感じる貴重な機会となった。

●アンケートの声（学生の反応） — 「きれいな現場」が覆した既成概念—

参加した学生の反応で特筆すべきは、現場環境に対する「ポジティブなギャップ」である。事後アンケートでは、「建設現場は散らかっていて足の踏み場もない場所だと思っていたが、想像以上に整理整頓されていた」「他の現場よりも清掃が徹底されており、非常にきれいだった」という感想が圧倒的多数を占めた。学生たちが抱いていた「3K（きつい・汚い・危険）」に近い先入観は、徹底された管理体制を目の当たりにすることで完全に払拭されたようだ。また、技術的な関心も高く、普段は見ることのできない地下の「基礎免震構造」や「クリーンルーム」の特殊な施工方法、工事用エレベーターでの移動体験などが注目を集めた。加えて、職人のひたむきな作業姿勢や、安全第一で無駄のない施工計画に触れ、「授業では学べない規模感とリアリティに圧倒された」「図面が現実に建ち上がる様子に感動した」といった声が寄せられ、満足度は100%を記録した。

◆学生の主な感想

- ・「規模感に圧倒された。図面が現実になる過程に感動した」
- ・「安全第一の無駄のない施工計画が勉強になった」
- ・「働いている方々が前向きで、職場の雰囲気が明るかった」

◆見学会で最も興味・関心を持った事柄

- ・構造・設備、地下免震構造、工所用EV、クレーン、耐震構造
- ・施工管理、BIM・CADの活用、資材の整理整頓、クリーンルームの施工方法「規模感に圧倒された」
- ・構造、施工計画に興味を持った。
- ・明るく風通しの良い作業場だと感じた。



説明を熱心に聞く学生



地下免震構造に興味津々

○委員のコメントー業界イメージを牽引するトップレベルの現場ー

今回担当の浦瀬委員は今回の成果について「学生のネガティブな先入観を良い意味で裏切ることができた」と報告した。遠藤作業所長をはじめ、現場の若手社員も積極的に説明に加わるなど、受け入れ体制は非常に手厚いものであった。見学会終了後の懇親会も含めて、学生と実務者が率直に語り合う密度の濃い交流が実現した点も特筆される。川上委員からは、現場側の対応は常々丁寧だが、今回はとりわけ学生への説明が親切で、非常に歓迎されていると感じた」との感想が寄せられた。

松村委員は「現場がうまくコントロールされていることは、整理整頓という形で象徴的に表れる。業界のイメージアップに直結する、トップレベルの現場を見せることができた」と高く評価した。その完成度の高さゆえに、「学生が今後社会に出て一般的な現場を見た際、そのギャップに驚くのではないかと懸念が出るほど、質の高い見学会となった。

開催時期が学園祭シーズンと重なったことで集客には課題を残したものの、参加した学生にとっては建設業への志望動機を強固にする「原体験」となる有意義な一日となった。

文責 菅原幸也



工所用EVで移動



クリーンルーム



朝礼場で記念撮影

YODOYABASHI Station One見学会

情報見学小委員会

日時：2025年11月27日（木） 13：30～15：30
場所：YODOYABASHI Station One（大阪市中央区北浜3丁目）
参加者：27名（個人会員8名、団体会員11名、一般8名）
参加費：会員1,500円、一般2,000円
講師：岩崎宏氏（竹中工務店）、井ノ口洪太氏（竹中工務店）
協力委員：担当・井ノ口洪太（竹中工務店）
奥村朋孝（鴻池組）、大森雅人（清水建設）、中尾勝悦（中尾総合建築設計事務所）、橋本博行（戸田建設）、樋上新治（ラシンプランニング）、森雅章（安井建築設計事務所）

情報見学小委員会 主催 淀屋橋ステーションワン見学会が2025年11月27日に行われました。

このプログラムは協会の情報見学小委員会の委員（奥村委員長、大森副委員長、中尾委員、樋上委員、橋本委員、森委員、井ノ口）が、進行と引率を行い、案内人として、設計者である竹中工務店大阪本店設計部の岩崎グループ長に協力を頂き開催されました。



ツアー参加者を前に挨拶する岩崎グループ長（右）と井ノ口チーフアーキテクト（左）

冒頭、10階の共用会議室をお借りして岩崎さんよりプロジェクトの概要と、建物の計画についてレクチャーをしていただき、総勢30余名で建物を案内いただきました。



プロジェクトの概要と、建物の計画についてレクチャーを受ける参加者

淀屋橋ステーションワンは、都市再生特区制度を活用した複合再開発として、事業主である中央日本土地建物、京阪HDの2社が持つ既存建物を共同で大街区化により建て替える事業として始まりました。

外観は、御堂筋の景観に呼応する約2000の窓で構成され、低層部・中層部・高層部それぞれに配置されたフロアが、外観上のアクセントとなっています。

一日あたり約30万人が乗降する大阪有数の結節点である京阪本線淀屋橋駅および大阪メトロ淀屋橋駅に直結した淀屋橋広場は、「御堂筋の地下玄関」として計画され、御堂筋の銀杏並木を仰ぎながら周辺の街路へと接続します。

オフィスロビーを3階に配置することで、片コアの基準階を持つ平面計画でありながら、1階の商業フロアでは四面すべての立面に店舗が顔を出し、賑わいと街角を生み出しています。

3階のオフィスロビーは、おおらかな自立壁と上質な素材で構成されたリビングのようなラウンジ空間で、銀杏並木と御堂筋の賑わいを見下ろす特等席となります。

10階には、テナント入居者が利用できる貸会議室およびコワーキングスペースを配置し、御堂筋の街並みの特徴でもある高さ約50mに広がる周辺の屋上緑化を借景として取り込んでいます。

基準階フロアは、Aクラスオフィスとして新たな標準を目指して計画され、環境ポイドを活用した自然換気システムを備えています。

オフィスの共用部には、バンクエレベータ上部を利用した、70mの高さを光と植栽で彩る環境ポイドと、そのポイドに浮かぶリフレッシュスペースが設けられ、廊下に街路のような光、視界の抜け、空気の流れ、そして憩いの場をもたらしています。

30階の展望フロアには、レストラン、カフェ、ギャラリーに加え、屋外に出られるテラスを配し、箕面や淡路島までを望むパノラマを楽しむことができます。

インテリアには敷地の土を用いた大判タイル、ウルトン織のウールカーペット、水面をモチーフにしたタイルカーペット、現地研ぎ出しの人造石など、淀屋橋、北浜エリアに残る歴史的な建物をモチーフとした特別な材料が用いられています。

終了後のアンケートでは「設計者からの丁寧な説明がよかった」「御堂筋に建物を建てることについて理解が深まった」「質問に丁寧に答えていただいた」「コンセプトから話が聞けた」「身近にある建物の新しい側面を知ることができた」「普段は入れない場所を見学できた」といった声をいただき、満足いただけたことを伺えるご意見が多数寄せられました。（文責 井ノ口洪太／株式会社竹中工務店）

外観はシンプルでありながらも緊張感のあるプロポーションでまとめられ、内部は工夫にあふれる構成で驚きのある建物でした。特に1階を吹抜けにしてしまう発想はとても大胆。見学者の皆様も見学ツアー中にも熱心に質問されており、興味や関心の高さが伝わってきました。見学会にご協力頂いた皆様に感謝申し上げます。

(奥村朋孝／株式会社鴻池組)

御堂筋の北玄関に誕生した高さ約150mのランドマーク。上から見下ろすとセットバック部に広がる屋外スペース。そこから御堂筋に目をやると、高さ50mの軒線が御堂筋のまちづくりを理解させてくれました。また、B1階にはにぎわいを作り出すための光差し込む吹抜けがあり、さらには最上階の展望スペースなど「キタ」、「ミナミ」ではなく「ナカ」のランドマークとしての色々な仕掛けを知ることができる見学会となりました。関係者の皆様ありがとうございました。

(大森雅人／清水建設株式会社)

Station One見学会に同行していて、新宿NSビルについて林昌二さんが書かれた新建築の巻頭文を思い出した。裏のない外観や環境VOID・外気に触れるリフレッシュ空間などの語彙が、それを連想させたのかもしれない。

情報見学小委員会主催のオフィスビル見学会は、2015年の新ダイビル以来ずっと参加させて頂いています。見学したビルは毎回目新しく、ソフト面・ハード面共に見所満載で設計のヒントが溢れていると感じています。今回も多くの若い人が参加され、熱心に質問もされていました。次は、西向いのゲートタワー見学会が開催されることを期待しています。

(中尾勝悦／中尾総合建築設計事務所)



大阪の街並みを一望できる展望スペース「淀屋橋スカイテラス」

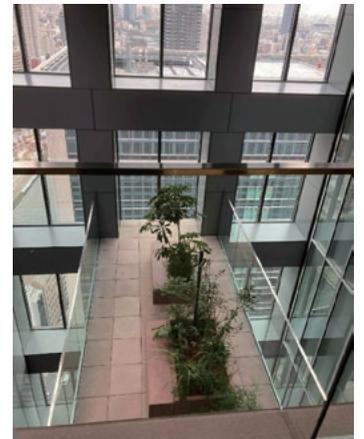
2班に分かれ、井ノ口チーフアーキテクトの説明で自然換気を取り入れたヴォイドと呼ばれる休憩スペース空間が省エネ性能と快適性を創出し、計算しつくされた容積率の緩和にもつながり、御堂筋地上50mで外壁セットバックと共に、淀屋橋で最も高い150mの絶景の高さを実現させた建築計画は素晴らしい。

建物や展望テラスからの都市部の絶景は勿論、大阪市役所や中之島図書館、大阪市中央公会堂などを眼下に見下ろせる醍醐味や3階オフィスロビーから御堂筋の眺めの良さ、地下駅通路から建物利用者の心地良い空間となっており、淀屋橋の新名所となっている。

(樋上新治／ラシンプランニング合同会社)



セットバックした屋外スペース



VOID空間内のリフレッシュスペース

施設見学をさせて頂くと、建物内からは、外から見る印象と大きく違いました。

外壁のガラス、エレベーター等の内部にもガラスが使用されており、建物内からも外の景色をたくさん感じられ、広く感じました。1階フロアから、北向きに地下1階を眺めた際に、地下、地上を同時に見ることができて、パースをみているような不思議な感覚になりました。とても興味深い建物でした。

見学会にご尽力いただきました関係者の皆様ありがとうございました。

(橋本博行／戸田建設株式会社)

設計者による建築概要レクチャー後に、見学しながら質疑応答できるところが本見学会の魅力ポイントとなります。1階を吹抜けとした地下部分やオープンスペースの床面積を増やさないアイデア、最上階の開き方など設計上の工夫をわかりやすく解説していただきました。限られた時間の中、そして運営されている中、様々な配慮により御堂筋の玄関口の新しい超高層ビルを丸ごと理解することができました。参加者の満足度も高かったようです。準備いただいた皆様、ご参加いただいた皆様ありがとうございました。

(森 雅章／株式会社安井建築設計事務所)

謹賀新年



2026（令和8）年

大松 敦

日建設計
代表取締役社長

〒541-8528 大阪市中央区瓦町3-6-5 TEL(06)6203-2361

勝山 太郎

日建設計
取締役常務執行役員
大阪オフィス代表

〒541-8528 大阪市中央区瓦町3-6-5 TEL(06)6203-2361

木村 博規

西松建設 株式会社 西日本支社
執行役員支社長

〒540-8515 大阪市中央区釣鐘町2-4-7 TEL(06)6942-1173

栗原 祥浩

栗原工業 株式会社
代表取締役社長

〒530-0054 大阪市北区南森町1-4-24 TEL(06)4709-2300

近藤 康之

不二熱学工業 株式会社
代表取締役社長

〒542-0081 大阪市中央区南船場2-1-1 TEL(06)6261-4321

指田 孝太郎

日建設計
顧問

〒541-8528 大阪市中央区瓦町3-6-5 TEL(06)6203-2361

佐野 吉彦

株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役社長 CEO

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

設楽 貞樹

株式会社 安井建築設計事務所
顧問

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

鳥居 久人

株式会社 昭和設計
代表取締役社長

〒531-0072 大阪市北区豊崎4-12-10 TEL(06)7174-8787

永嶋 元博

東リ 株式会社
代表取締役社長

〒664-8610 兵庫県伊丹市東有間5-125 TEL(06)6492-1331

原 恭平

コーナン建設株式会社
代表取締役会長兼社長

〒531-0075 大阪市北区大淀南1-9-10 TEL(06)6456-4311

菱田 一

西日本建設業保証 株式会社
取締役社長(代表取締役)

〒550-0012 大阪市西区立売堀2-1-2 TEL(06)6543-2553

山中 康宏

ダイタン株式会社
代表取締役社長

〒550-8520 大阪市西区江戸堀1-9-25 TEL(06)6447-8000

吉増 憲二

株式会社 きんでん
経営執行役員常務 技術本部長

〒531-8550 大阪市北区本庄東2-3-41 TEL(06)6375-6229

米井 寛

株式会社 東畑建築事務所
代表取締役社長

〒541-0043 大阪市中央区高麗橋2-6-10 TEL(06)6202-0391

謹賀新年



2026（令和8）年

設計事務所有志

株式会社 **伊藤建築設計事務所**

相談役 森 口 雅 文
代表取締役社長 小 田 義 彦
常務取締役 富 田 昌 志

本社・名古屋事務所・エルイー創造研究室
〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15（桜通ビル）TEL（052）222-8611
東京事務所
〒101-0021 東京都千代田区外神田3-5-12（聖公会神田ビル）TEL（03）5294-6211

東畑建築事務所

TOHATA ARCHITECTS & ENGINEERS, INC.

代表取締役社長
米 井 寛

大阪市中央区高麗橋2-6-10 TEL (06)6202-0391
東京 / 大阪 / 名古屋 / 九州
<https://www.tohata.co.jp>

NIKKEN

EXPERIENCE, INTEGRATED

日建設計

代表取締役社長 **大松 敦**

東京都千代田区飯田橋2-18-3
Tel. 03-5226-3030

大阪市中央区瓦町3-6-5
Tel. 06-6203-2361

<https://www.nikken.jp>

YASUI
ARCHITECTS

人やまちを元気にする

安井建築設計事務所

代表取締役社長 CEO **佐野吉彦**



MAKE BEYOND つくるを拓く

株式会社 大林組

代表取締役社長 兼 CEO 佐藤 俊美

本社 東京都港区港南 2-15-2 TEL 03 (5769) 1111

副社長執行役員 川上 宏伸
大阪本店長

大阪本店 大阪市中央区北浜 3-5-29 TEL 06 (7632) 8700

100年をつくる会社



KAJIMA CORPORATION

本社：東京都港区元赤坂1丁目3番1号

関西支店：大阪市中央区城見2丁目2番22号 マルイトOBPビル
電話06 (6946) 3311

<https://www.kajima.co.jp/>

子どもたちに誇れるしごとを。

清水建設株式会社

取締役社長 新村 達也 専務執行役員関西支店長 山下 浩一

本社 〒104-8370 東京都中央区京橋二丁目16番1号 Tel. 03 (3561) 1111

関西支店 〒541-8520 大阪市中央区本町三丁目5番7号 御堂筋本町ビル Tel. 06 (6263) 2800

地図に残る仕事。®



大成建設株式会社

For a Lively World

代表取締役社長 相川 善郎

常務執行役員関西支店長 足立 憲治

本社 東京都新宿区西新宿 1-25-1

電話 03-3348-1111

関西支店 大阪市中央区南船場 1-14-10

電話 06-6265-4504

<https://www.taisei.co.jp/>



TakaMatsu

高松建設

代表取締役社長 高松 孝年

本社・大阪本店 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1丁目2番3号 TEL 06-6307-8101

東京本店 〒108-0014 東京都港区芝4丁目8番2号 TEL 03-3455-8101

想いをかたちに 未来へつなぐ



竹中工務店 取締役社長 佐々木正人

〒541-0053 大阪市中央区本町 4-1-13 tel: 06-6252-1201
〒136-0075 東京都江東区新砂 1-1-1 tel: 03-6810-5000



代表取締役社長 大谷 清介 常務執行役員大阪支店長 和久田吉朗

本社 〒104-0031 東京都中央区京橋1-7-1 TEL 東京03(3535)1354
大阪本店 〒530-0004 大阪市北区堂島浜1-1-27 TEL 大阪06(6676)8232

建材・学校・団体有志



夢のレンガを積みあげよう

都 窯 業 株 式 会 社

〒530-0047 大阪市北区西天満 2-8-1 大江ビル
Tel (06)6367-0389 Fax (06)6367-5567
工房 三重県伊賀市西山 伊州窯 伊州観白樓
<http://www.miyakoyogyo.com> E-mail : info@miyakoyogyo.com



大阪工業技術専門学校

OSAKA COLLEGE OF TECHNOLOGY

Ⅱ部建築学科(夜間) ※講義科目はオンライン・登校選択制授業

〒530-0043 大阪市北区天満1丁目8番24号 ☎ 0120-0910-19 🌐 <https://www.oct.ac.jp/> Tel. 06-6352-0091



一般社団法人 日本建築材料協会

会 長 松 本 將

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-4-23 撞木橋ビル4階 TEL (06)6443-0345 FAX (06)6443-0348
<https://www.kenzai.or.jp/>



一般社団法人 日本建築協会

会 長 指 田 孝 太 郎

〒540-6591 大阪府中央区大手前1-7-31 TEL (06) 6946-6981



一般社団法人 日本建築協会京都支部

支 部 長 矢 ヶ 崎 善 太 郎

〒603-8158 京都市北区紫野宮西町18 ライトビル2F-ND (メールアドレス) nk.kyokai.kyoto@gmail.com



一般社団法人 日本建築協会中国支部

支 部 長 荒 木 秀 夫

〒732-0805 広島市中区十日市町1-1-9 (相生通り鷹匠ビル4階山陽工業(株)内) TEL (082) 232-6471



一般社団法人 日本建築協会東海支部

支 部 長 塩 田 哲 也

〒460-0008 名古屋市中区栄2-10-19 (名古屋商工会議所ビル9階) TEL (052) 990-6410



建築と社会 (第106集)

2025 (令和7年) 1月号～12月号 目次一覧

2025年1月号

2024年度 年間特集テーマ「トランスフォーメーション」

特集 「EXPO2025が拓く未来」

—2025年大阪・関西万博に向けて

- 総論 1** 2025大阪・関西万博を迎えて—未来社会をめざして—
—博覧会がめざす建築と社会のユニバーサルデザイン—
●田中直人
- 総論 2** 万博のレガシーが拓く未来 ●吉村英祐
- 各論 1** 大阪・関西万博「日本館」
～いのちの循環を体現するパビリオン～
●高橋恵多／高橋秀通／横井丈晃／江坂佳賢
- 各論 2** 自然がにじむ生命のような小催事場
～EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」～
●鴻池・安井・平田晃久グループ
- 各論 3** 大阪ヘルスケアパビリオン～多様な屋根のもと木・光・水を
再構築した次世代環境共生建築～ ●平野尉仁
- 各論 4** 大阪・関西万博 NTTパビリオン～感情を纏う建築～
●畠山文聡
- 各論 5** 「電力館 可能性のタマゴたち」
～「可能性のタマゴ」を建築で体現する～ ●高畑貴良志
- 各論 6** 住友館～さあ、森からはじまる未来へ～ ●白井尚太郎
- 各論 7** パナソニックグループ パビリオン「ノモの国」
●永山祐子、江原信一郎
- 各論 8** 2025年大阪・関西万博三菱未来館
～地上に浮かぶパビリオン～ ●荒井拓州
- 各論 9** ガスパビリオン「化けろ、未来！」
～環境配慮から生まれる非日常空間～ ●石原嘉人
- 各論 10** 大阪・関西万博に向けた夢洲駅建設について ●南都博志
- 各論 11** 万博を契機に広がる水都大阪 ●松井伊代子
- 会場内の施設設計を担う若手建築家に聞く step by step**
1. 組み替えられることの自由さと積み上げることによる祝祭性
●米澤 隆
 2. 夢洲の基礎 ●井上 岳、齋藤直紀、棗田久美子、中井由梨
 3. 建築にいのちを宿す ●小林広美、大野 宏、竹村優里佳
 4. あたらしい「かた」の実現 ●齋藤信吾、根本友樹、田代夢々
- 大阪・関西万博 全景図**
- 年頭の言葉** 2025年を迎えて ●指田孝太郎
- 本年の抱負** 常設委員会
●三宗知之、中尾勝悦、西 博康、寺岡宏治、
橋寺知子、中村文紀
- project** 医療法人朗源会 おおくま病院
- gallery** 海南の家 ●田辺弘幸
- 会告** 若き創造者たちへ「第72回青年技術者顕彰」のご案内
未来創生プロジェクト 2040委員会 第3回オープン委員会
- 構造の頁** soraかさい ～アングル鉄骨トラスによる空間構造～
●山下真輝
- 法令コーナー** 「全国最大規模」ポートアイランド住宅の取組
～神戸市におけるマンション耐震化～ ●磨家孝明
- デザインコンクール** 第70回 工高生デザインコンクール
設計課題／私のまちの私たちのすまい
- information** 阪神・淡路大震災30年 企画展1995⇄2025 30年目の
わたしたち／モネ&フレンズ・アライブ／生誕135年
愛しのマン・レイ／ル・コルビュジェ 諸芸術の総合

1930-1965

第105集総目録 2024年

月間の動き 2024年11月

表紙写真提供：2025年日本国際博覧会協会、株式会社大林組

撮影：株式会社伸和

2025年2月号

2024年度 年間特集テーマ「トランスフォーメーション」

特集 第31回 会員作品「私の空間作法」

- 国際交流を通して成長する場所 ●岸 一
見え隠れにより想起させる装置 ●松延浩人
庭と共に住まう ●河崎菜摘・玉田翔也
まちを歩いていて笑顔になる建築／窓辺に腰掛けまちを楽しむ
●塚口明洋
- 健康な建築をめざして ●吉永規夫
—Cloud Nine— ●水谷俊博 + 武蔵野大学水谷研究室
御堂筋へ新たな顔をつくる ●水野裕介
- project** 共英製鋼山口事業所 新事務所棟
住友電気工業(株) 伊丹製作所 KOYAテラス
- 会告** 若き創造者たちへ「第72回青年技術者顕彰」のご案内
出版委員会主催 第7回 建築セミナー
CCCフォーラム主催 第9回青年技術者交流会 第
71回青年技術者顕彰者によるプレゼンテーションと
座談会
第8回片岡安賞公開プレゼンテーション開催予告
- 入賞発表** 「第43回大阪都市景観建築賞(愛称 大阪まちなみ
賞)」の受賞作品が決定
- 寄稿** 台湾の公会堂 一統統余談ながら ●太田隆信
- 先達に聞く** 岡田聿之氏 ●山形政昭 ●橋寺知子
- 法令コーナー** 国土数値情報に関する最新の取組～建築基準法関連
情報のGISデータ化～
●国土交通省政策統括官付地理空間情報課
京都市の火災安全改修促進の取組 ●中島吾郎
- 設備の頁** 落雷現象を発生させない新型避雷針 (dinnteco)
●米田 稔
- Member's Forum** 情報見学小委員会主催 第37回『茶室』見学会
U-35委員会企画 talk baton 27 活動報告
- information** 特別展 蜷川実花展 with EiM: 彼岸の光、此岸の
影／大好きをつなげる生き方～遊びの中の土～／リ
ニューアルオープン記念特別展 What's New! 大阪市
立美術館 名品珍品大公開!!／リニューアルオープン
記念展 おかえり、ヨコハマ／マシン・ラブ：ビデオ
ゲーム、AIと現代アート／ブルックリン博物館所蔵
特別展 古代エジプト
- 月間の動き** 2024年12月
表紙写真提供：OGURA YUJI / OFUNE CAMOME

2025年3月号

2024年度 年間特集テーマ「トランスフォーメーション」

特集 東海支部

TOYOTA TECHNICAL CENTER SHIMOYAMA 車両開発棟・来客棟
神港園サニープラザ妙法寺
豊田自動織機 厚生棟
ほくほく札幌ビル
愛知淑徳大学 長久手キャンパス 1号棟・13号棟
博愛ナーシングヴィラ 老人ホーム
STATION Ai
ドルトンスクール名古屋
三十三銀行 尾鷲支店・海山支店
北伊勢上野信用金庫 菰野支店
にしん文化会館 茶々とホール（大規模改修工事）

■TOKAI Sketch Book

■特集Ⅰ これからのモノ・コト・ヒトづくりを考える

あいちスタートアップ・エコシステムの形成に向けて
～Aichi-Startup 戦略とSTATION Ai～●荒田洋史、篠原佳則
座談会：ソトとの「コト」から始まる「ヒト・モノ」づくり
～STATION Aiから生まれる協業・共創～
●大澤樹生、伊藤孝紀、荒田洋史、富田昌志、篠原佳則、中川達也
大学と企業・地域の共創による新しい価値創造の場●恒川和久
奇跡の共創イベントが開く未来への扉
～おかしなサマースクールに参画して～●中川達也
オフィスモノ・コト・ヒトづくりの循環現場にする
～space i!での取り組みと課題、今後の展開～●長谷川寛

■特集Ⅱ 納マリ倶楽部

南山大学見学会
●小杉嘉文、今和泉拓、松下拓真、吉田 敦、佐藤 剛、安田明将

■特集Ⅲ 建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶（第8回）

碧南市・「藤井達吉現代美術館」●中井孝幸
「再生」から「進化」へ～建物の記憶が生む愛着～
●今和泉拓、古賀 大
碧南市藤井達吉現代美術館～誕生から今日までの歩み～●木本文平
街に浸透していく成長する有機体
～「碧南市藤井達吉現代美術館」を訪れて～●中井孝幸

■特集Ⅳ 海外建築視察報告

ソウルの現代建築をめぐる旅
●篠原佳則、川本直義、中井孝幸、塩田有紀、西澤太良、細井昭男、
塩田哲也、芳山明久、富田昌志、眞弓浩二、田上竜也、河合康子

■東海の建築：包

project イノゲート大阪
gallery 破壊から守る救済●PONTAR
会告 若き創造者たちへ「第72回青年技術者顕彰」のご案内
CCCフォーラム主催 若手技術者フォーラムパネル
ディスカッション「グラングリーン大阪」
出版委員会主催 第7回 建築セミナー
出版委員会主催 第8回 建築セミナー
第8回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集
テーマ：建築X 一次審査通過者によるオンライン
（Teams）公開プレゼンテーション 経過報告と結果
発表予告
第4回 新入会員ガイダンスのご案内

構造の頁 伝統工法を用いた樹のフォリ～龍谷大学瀬田キャンパスGreen Deck / Sky Deck～●宮永友莉子
法令コーナー 広島県と鳥取県における防災情報システムの共同構築・運用について●広島県危機管理監危機管理課

「再読 関西の建築」は休載します

information ART OF THE REAL アート・オブ・ザ・リアル 時代を超える美術／パウル・クレー展 一創造をめぐる星座／モネ 睡蓮のとき Le dernier Monet : Paysages d'eau／リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s／ヒルマ・アフ・クリント展／ロバート・キャパ 戦争

月間の動き 2025年1月

表紙写真：東海支部主催「海外視察」にて(P61ソウル視察記参照)
アラリオミュージアム・イン・スペース
撮影：田上竜也

2025年4月号

2025年度 年間特集テーマ「未来」

特集 2025年に描く未来像

■特集1 総論

多様な創造性をひらく場とは～創造性の民主化へ～●中島さち子

■特集2 各分科会・小委員会の考える「これからの建築と社会」

2050年のひと・まち・建築●ひと・まち・建築小委員会
充たし縮める未来●計画分科会
いよいよ大阪・関西万博!!!●建築デザイン分科会
働く/住む/学ぶ 現在に垣間見える未来の姿●空間デザイン分科会
構造設計の歴史から未来を予測する●構造分科会
2050年の建築・設備・環境●環境分科会
温故知新～現在・未来につながる過去～●施工材料分科会
建築基準関係法令のこれまでとこれから●法令分科会

■特集3 座談会

未来の建築と社会を考える

●吉永規夫・吉田悠起・有吉智彦・河崎菜摘・大屋泰輝
（オブザーバー）中村文紀・（司会）古谷隆祥

■2024年度 特集テーマ「トランスフォーメーション」について

編集・企画に携わった委員によるあとがき

●三宗知之・飯田 匡・橋本直樹・岡田 健・古谷隆祥・松本和也・
門野 陽・吉田正友・桑原悠樹・黒柳 亮・吉田悠起・米山剛史・
澤田純一・古島正博・高木秀晃

project 彩星工科高等学校

GLP ALFALINK 茨木1

gallery

土×〇〇=Well-Being●濱田淳二

会告

2025年度 第71回工高生デザインコンクール

設計課題「まちなかのアートスペース」

出版委員会主催 第7回 建築セミナー

出版委員会主催 第8回 建築セミナー

第8回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集
テーマ：「建築X」結果発表、第4回 新入会員ガイダンスのご案内

CCCフォーラム主催 若手技術者フォーラムパネル
ディスカッション「グラングリーン大阪」

建物の省CO₂・省コストを実現する分散型エネルギー
リソースのAI最適制御ソリューション SenaSon

●丹 晴応

法令コーナー

建築士サポート体制の確保

～改正建築基準法等の円滑施行に向けて～

●杉野友香

再読 関西の建築 大和文華館●前川 歩

Member's Forum 活動報告：CCCフォーラム主催

第9回 青年技術者交流会レポート

書評

夢のつなげ方 建築から学ぶことⅢ●和田菜穂子

information

帰ってきた泉屋博古館 いにしへの至宝たち／大阪・関西万博開催記念 特別展 日本、美のつば一異文化交流の軌跡一／奈良国立博物館開館130年記念 特別展 超 国宝一祈りのかがやき一／大阪・関西万博開催記念 大阪市立美術館リニューアル記念特別展 日本国宝展／特別展「葛屋重三郎 コンテンツビジネスの風雲児」／ACN ラムセス大王展 ファラオたちの黄金

月間の動き 2025年2月

2025年5月号

2025年度 年間特集テーマ「未来」

特集 企業ミュージアムは未来を拓く窓

- 総論** 企業博物館の過去・現在・未来 ●角野幸博
- 各論1** “言葉では伝えきれないもの”を未来へつなぐ
～島津製作所 創業記念資料館～ ●川勝美早子
- 各論2** 「実物大のカタログ」からバーチャルへ
～住宅設備機器ショールームの歴史と未来～ ●野口俊明
- 各論3** 豊かな生活文化の発展に貢献し、地球の未来を守りたい
～TOTOミュージアムで伝える歴史とところざし～
●古賀淳一
- 各論4** 変化、挑戦する企業博物館
～INAXライブミュージアム～ ●尾之内明美
- 各論5** 見えない“空気”を体感するインスタレーション空間
～高砂熱学イノベーションセンター～ ●清水昭浩
- 各論6** SWITCH! みんなの好奇心がONになる
～SINKO AIR DESIGN STUDIO～ ●稲川 健
- 各論7** 居住実験から見る未来の住まい
～実験集合住宅NEXT21における居住実験の取り組み～
●志波 徹
- 各論8** 街中の企業ミュージアム
～住友の事業精神を物語る、大阪の史蹟 ●海原 亮
- 編集後記** ●橋本直樹、大橋 巧、北野勝也、齋藤悠輔、生野大輔、
寺井千佳、仲村憲一、榊井貴廣、持留崇志、山口拓也

大阪・関西万博パビリオン 日本館

- project** ノホテル奈良
IVFなんばクリニック移転内装工事
- gallery** 資源循環の結び目 ●小見山陽介
- 会告** 2025年度 定時総会、橋爪紳也氏講演会と会員交流懇親会のご案内
東海支部 2025年度定時総会 講演会 フランス文学における建築の表象 ラブレーからヴァレリーまで
情報見学小委員会主催 立命館大学大阪いばらきキャンパスH棟見学会
2025年度 第71回工高生デザインコンクール設計課題「まちなかのアートのスペース」
- 構造の頁** EXPOナショナルデーホール
～軟弱地盤に建つ不整形長大建物の設計～
●山本佳明
- 法令コーナー** 民間事業者と連携した空き家対策
～空家等管理活用支援法人の指定～ ●片山麻由
- 先達に聞く** 太田隆信氏 (1) ●福原和則、橋寺知子、安田徹也
- Member's Forum** U-35委員会企画「設計者のしごと」
～組織で働くU-35世代と建築～ 活動報告
- information** 安藤忠雄展 | 青春 TADAO ANDO | YOUTH / 山王美術館コレクションでつづるエコール・ド・パリ展 / 特別展「和食～日本の自然、人々の知恵～」 / ミロ展
- 月間の動き** 2025年3月
表紙写真: 撮影・榊井貴廣

2025年6月号

2025年度 年間特集テーマ「未来」

特集 片岡安賞 第8回 日本建築協会論考コンクール 募集テーマ: 建築 X

- 審査報告** 論考コンクール審査委員会
総評 ●高田光雄
講評 ●倉方俊輔
●岡絵理子

- 片岡安賞** 建築の「揺らぎ」 反映的透明性と自己の発見
●高橋麟太郎
- 佳作** 図面の上のおじいさんと生活
～今和次郎採集図面の文化人類学的分析～ ●寒川湧太
進化建築学 (建築) X (進化生物学) ●吉田和弘
- 大阪・関西万博パビリオン 大屋根リング
project 洛和会音羽リハビリテーション病院 テラス棟
gallery ○△□でなにつくる? ●○△□建築隊
会告 2025年度 定時総会、
橋爪紳也氏講演会と会員交流懇親会のご案内
第9回日本建築協会論考コンクール 片岡安賞 募集要項
2025年度 第71回工高生デザインコンクール
設計課題「まちなかのアートのスペース」
CCCフォーラム主催 第10回 青年技術者交流会 第71回青年技術者顕彰者によるプレゼンテーションと座談会
情報見学小委員会主催 立命館大学大阪いばらきキャンパス H棟 見学会
- 設備の頁** すぐに見つかる取説 デジトリ360 (サンロクマル)
～建物管理のデジタル取扱説明書～ ●小林あさみ
- 法令コーナー** 京都市の3D都市モデル
～オープンデータとしての価値向上と活用推進～
●井上慎也
- 先達に聞く** 太田隆信氏 (2) ●福原和則、橋寺知子、安田徹也
- Member's Forum** U-35委員会企画 10th action
「建築と協会」活動報告 2024.04-2025.03の経過
活動報告: CCCフォーラム主催
第1回若手技術者フォーラム
(第7回建築セミナー)
住宅が傾かない 地盤・基礎のつくりかた
- information** 藤本壮介展: 原初・未来・森 / オランジュリー美術館
オルセー美術館 コレクションより ルノワール×セザンヌ モダンを拓いた2人の巨匠 / 特別展「正倉院 THE SHOW 一感じる。いま、ここにある奇跡」 / ゴッホ展 家族がつかない画家の夢
- 月間の動き** 2025年4月
表紙写真: 初代理事長 片岡安肖像 (日本建築協会 所蔵)

2025年7月号

2025年度 年間特集テーマ「未来」

特集 第72回 青年技術者

- 設計・計画部門**
- 阿部 敬一** ●ザ・パック株式会社 本社/SINKO AIR DESIGN STUDIO
- 石塚 昌子** ●ミヤリサン厚生棟/ケイコン本社ビル
- 今枝 龍哉** ●東京都北区立浮間中学校/YOKOHAMA HUMMERHEAD/
どうぐばこの道/寝屋川市立望が丘小学校・中学校/
テクノ・ラボ大阪
- 上間 鉄平** ●三井化学VISION HUB™SODEGAURA/入善町役場
- 大野 晴臣** ●おんがみらいテラス/医療法人 吉誠会 吉見病院
- 角谷 卓哉** ●南国市地域交流センター-MIARE!/
健都イノベーションパークNKビル
- 北森 誠人** ●淀屋橋ステーションワン/神戸市役所本庁舎 2号館再整備事業 (計画中)
- 粉川社一郎** ●長崎駅 (新幹線・在来線・高架下商業施設) /
明石市役所新庁舎
- 坂口 文彦** ●学校法人 関西大学 第一高等学校・第一中学校校舎
建替計画 (I期工事) / 学校法人 関西大学 第一高等学校
校・第一中学校校舎 建替計画 (II期工事)

杉森 大起●中村区役所等複合庁舎/トヨタ紡織グローバル本社
丹地 勇詞●C社事務所ビル/東洋紡株式会社岩国事業所厚生棟
夏目 寛子●ONE DOJIMA PROJECT/こんごう福祉センター障害者
支援施設 かつらぎ・にじょう

成瀬 壮太●加東市立東条学園小中学校/埼玉県の社員寮/
静岡県のオフィス

花岡 光●CIRCLES音/葉博多/2025年日本国際博覧会 シグネ
チャーパビリオン「いのち動的平衡館」

馬場あさひ●神戸トヨペット岡場店

藤井 千裕●相鉄バンコクホテル/八事聖霊修道院/熊野油脂第5工場/
AGC食堂棟

町山 玉魚●宝塚市立文化芸術センター/石巻市雄勝中心部地区再整
備 道の駅 硯上の里おがつ/関東学院大学 横浜・関
内キャンパス

■インテリア設計部門

中西 美晴●サンクチュアリコート琵琶湖

■構造部門

井上 桂輔●旧大阪中央郵便局舎を内包した大規模複合ビルの構造設計

高本 幹人●多様な構造技術を取り込んだ中間層免震物流倉庫 北大
阪トラックターミナルII期棟

武内 大輝●傾斜する多角形ホールの構造デザイン 一四万十市総合
文化センター しまんとびあー

田中 陽之●長岡京市新庁舎

西田 哲朗●「知恵の蓄積」を表現する透かし積み耐震壁による構造
デザイン

弘中 敏之●デザインコンセプトに根差した開放的な免震建物の実現
ー大阪信用金庫ー

三富 遼太●建築計画と構造性能を両立させる事務所ビルの計画
ー京橋RKビルー

吉村 純哉●茨木市文化・子育て複合施設 おにクル
ー市民の多様な活動を大らかに支え・守る構造ー

■設備部門

石田 修平●横浜シンフォステージにおける地域貢献と事業継続/
ヤマハ本社22号館における照明計画

北川 大輔●大阪大学箕面キャンパスー環境配慮への取り組み
「Sustainable」「Smart」「Global」の実現ー

五明 遼平●大阪大学医学部附属病院統合診療棟ー医療施設特有の課
題（技術・手法）に対応するエンジニアリングー

杉山 裕幸●次世代につなぐBIM・デジタル技術を活用した施工管理
への取り組み

根本 泰明●ららばーと堺 日本初の大規模商業施設におけるZEB認
証の取得/本町4丁目プロジェクト 日本初のオフィス
におけるZCBの構築

福島 功二●某医薬品倉庫ー医薬品倉庫としての徹底した機能維持を
目指してー
某医薬品工場ー医薬品生産施設の利便性・安全性を求めてー

福永 貴大●長崎スタジアムシティ(商業棟)における設備計画

藤浪 大輔●国内某工場4 改修工事における設備計画

松本 若菜●パークウェルステイト西麻布における環境配慮・感染症
対策

■施工部門

足立 桜●大規模木造建築物のユニット化とオフサイト化による工
程短縮と品質管理手法の確立

岩崎 佳祐●既存躯体活用と施工上の課題解決による工期短縮・コス
ト削減の取り組み(品川女子学院B棟 解体・新築工事)

木田 哲也●万博ならではの現場管理

小西 翔太●鋼ー木のハイブリッド構造における木建方の工事計画に
ついて

桜本 佳季●2025年日本国際博覧会大屋根工事とランドスケープ工
事の計画について

武田 和真●京都駅東南部エリアにおけるアート複合施設の建設

谷川 基樹●蓄積されたノウハウの結晶をより生産性の高いものへ昇華
ー先輩たちが培ったナレッジを活用した超高層分譲住宅ー

大阪・関西万博パビリオン シグネチャーパビリオン
Better Co-Being
ガスパビリオン

gallery あわじ島のドッグヴィラ●川口裕人

EXPO column 大阪・関西万博からみえる「未来」●古谷隆祥
会場内の小施設と人の居る場所

●計画分科会×施工材料分科会

会告 「第32回 会員特集“私の空間作法”」原稿募集
第44回大阪都市景観建築賞（愛称 大阪まちなみ賞）
募集要項

2025年度 第71回工高生デザインコンクール
設計課題「まちなかのアートスペース」
第9回 日本建築協会論考コンクール 片岡安賞募集
要項

構造の頁 超高層ツインタワーがある複合施設

ーステーションビル枚方ー●片岡 大

法令コーナー 堺市初のニュータウンでの大規模団地建替え事業
ー二つの規制緩和によるマンション建替えの促進ー

●山口信一

再読 関西の建築 村野・森建築事務所
（現・友安製作所Cafe & Bar 阿倍野店）

●笠原一人

Member's Forum 〈第8回建築セミナー〉

現場写真でわかる 木造住宅工事の納まり

information トーベとムーミン展〜とおきのものを探しに〜
／奈良国立博物館開館130年・天理大学創立100周年
記念特別展 世界探検の旅ー美と驚異の遺産ー／特別
展「CELADONー東アジアの青磁のきらめき」／巨大
恐竜展2025

月間の動き 2025年5月

2025年8月号

2025年度 年間特集テーマ「未来」

特集 いのち つづく みらい

総論 いのちを知る〜いのち動的平衡館をつくる〜●福岡伸一

第1節：いのち みらい

各論1 一度きりの建築〜大阪・関西万博「いのち動的平衡館」〜
●橋本尚樹

各論2 宇宙空間の「いのち」を守る技術で「みらい」の美を表現
〜量子飛躍する美の世界（Quantum Leap for Beauty
World）〜●鶴巻 崇

座談会 いのち つづく みらい

〜2025 大阪・関西万博 いってみた／いってみたい〜

第2節：いのち つづく

各論3 LET'S EXPO ー大阪・関西万博ユニバーサルツーリズム
プロジェクトー●今井裕平

各論4 ロボティクスコンストラクション構想
〜いのちと未来を守る新しい生産プロセスー●仲安 陸

各論5 AIは「つくる」を民主化する●宮下巧大

各論6 インタビュー：フードスケープ〜いのちをつなぐ地域の風景、
自然と食、その間にある建築ー●正田智樹

各論7 TOTOミュージアム訪問記
〜豊かで快適な生活文化を創造する〜●古賀淳一

編集後記 ●松本和也／桑原悠樹／小林敬政／小林啓明／篠木大輔／
杉江順哉／田中和八／樋口展寛／平岡翔太／米山剛史

ごあいさつ ●指田孝太郎

大阪・関西万博パビリオン EARTH MART
PASONA NATUREVERSE

EXPO column 我らの視点●空間デザイン分科会×構造分科会
project PMO EX本町
大阪市立美術館大規模改修工事

gallery 私を活かす道に至る●泉寿ふゆみ
会告 「第32回 会員特集“私の空間作法”」原稿募集
第9回 日本建築協会論考コンクール 片岡安賞募集要項
2025年度 第71回工高生デザインコンクール
設計課題「まちなかのアートスペース」
日本建築協会役員会務分掌、日本建築協会評議員、
日本建築協会支部長
定時総会議決のお知らせ、通常理事会議決のお知らせ、
臨時理事会議決のお知らせ、定時評議員会議決
のお知らせ、2024年度事業報告、2024年度決算報
告、2025年度事業計画、2025年度収支予算

設備の頁 日中放射冷却素材による電気設備の温暖化対応と環
境負荷低減●末光真大

法令コーナー 都市・建築におけるドローンと空飛ぶクルマの活用
と展望●宮内博之

再読 関西の建築 重要文化財金剛峯寺金堂●目黒新悟
Member's Forum About “2040” ■2040年を創造する。
●2040委員会
活動報告：CCCフォーラム主催
第10回 青年技術者交流会レポート
立命館大学大阪いばらきキャンパスH棟 見学会
●情報見学小委員会

寄稿 万博会場の熱供給設備について
●小林陽一、榎本丈二、高橋尚哉、福本拓人

information 神戸六甲ミーツ・アート 2025 beyond／2025 イタ
リア・ポローニャ 国際絵本原画展／どこ見る？どう
見る？西洋絵画！ールネサンスから印象派まで／万
博・日本画繚乱 一北斎、大観、そして翠石一

月間の動き 2025年6月
表紙撮影：松本和也

2025年9月号

2025年度 年間特集テーマ「未来」

特集 後世へつなぐまちづくり

巻頭インタビュー 後世へつなぐまちづくり
～うめきた公園の過去・現在・未来～
●大阪都市計画局・大阪市建設局・独立行政法人
都市再生機構 (UR)・三菱地所株式会社

総論 スマート「シティ」の現在とこれから●豊田啓介

各論1 「都市の個性の確立と質や価値の向上に関する懇談会」
中間取りまとめ～「成熟社会の共感都市再生ビジョン」を提
示～●国土交通省都市局まちづくり推進課

各論2 伝統構法を未来につなぐ
～伝統的構法による新築を促進する取組●寺門宏之

各論3 高輪ゲートウェイシティ (TAKANAWA GATEWAY CITY :
TGC) にみる未来のまちづくり～未来をつなぐ都市の実験
場～●土橋健治

各論4 国産材を利用したモバイル建築の可能性
～災害対策と地方創生の視点から～●長坂俊成

各論5 北欧に学ぶ、持続可能なまちづくりとデザインの力
～大阪・関西万博 北欧パビリオンからの発信●岡村奈央

各論6 データをもちいたまちづくり●吉村有司

各論7 福島県復興祈念公園

●福島県まちづくり推進課／国土交通省東北地方整備局東北
国営公園事務所

編集後記 ●河野 学・奥山陽二・日下部美嘉・時見正人・吉田悠起

大阪・関西万博パビリオン 大阪ヘルスケアパビリオン

EXPO column それぞれが思う、万博ならではの
●法令分科会×ひと・まち・建築小委員会
project 徳島信用金庫新店・本部
パナソニックエナジー住之江 生産プロセス開発棟
企画と設計に乾杯●富田祐介

gallery CCCフォーラム主催 第2回若手技術者フォーラム
会告 パネルディスカッション「EXPO2025大阪・関西万博」
第10回学生のための現場見学会「株式会社村田製作所
守山イノベーションセンターPJT見学会」
「第32回 会員作品“私の空間作法”」原稿募集
第9回 日本建築協会論考コンクール 片岡安賞募集
要項
2025年度 第71回工高生デザインコンクール
設計課題「まちなかのアートスペース」

法令コーナー 新長田駅南地区の被災地復興～新長田駅南地区震災
復興第二種市街地再開発事業～●折原武久
ハンガリーパビリオン～建築と文化の融合～
●今川与志雄

構造の頁 小ホール空間の構造デザイン～四万十市総合文化セ
ンターしまんとびあ～●武内大輝

再読 関西の建築 世良美術館 (現・みかげ芸術堂) ●安田徹也
Member's Forum 活動報告：建築次世代委員会主催 建築を学ぶ
学生の本音。学生が求める「リアルな学び」とは？

寄稿 万博での大阪ガスのメタネーション実証について
●横山晃太

information ひろしま国際建築祭2025／特別展「世界遺産 縄文」
／山本理顕展一コミュニティと建築一／国際芸術
祭あいち2025

月間の動き 2025年7月

2025年10月号

2025年度 年間特集テーマ「未来」

特集 未来のものづくり

総論 「未来のものづくり」への新たな挑戦
～世界に通用するポテンシャルを信じて～●松井亮夫

第1部：未来の建設現場

各論1 K-DIVE®を用いた現場改善ソリューション
～誰でも働ける現場への変革を目指して～●大谷典史

各論2 世界一ひとにやさしい現場を創る
～次世代の技能人材に残すべき、高生産性省力化施工～
●眞部達也

各論3 ロボットと人間が協働する未来～鴻池組ロボットパーク～
●波多野純

第2部：未来の材料・工法

各論4 コンクリート構造物の自己治癒化によるメンテナンスフ
リーへのアプローチ～建築構造物や土木インフラの基盤で
あるコンクリートの「超」高耐久化を実現するバイオマテ
リアル～●青木 涼

各論5 ゴミから「感動」を。
～静脈産業の価値を最大化する、fabulaの挑戦～●町田紘太

各論6 酸素とエネルギーを生む「光合成建築」
～「建てる建築」から「植える建築」へ～
●川上比奈子 松尾康光 瀬溝人生

第3部：未来の建築を担う人材育成

各論7 多様性とDX化が切り拓く建設業界の未来

～多種多様な人材の活躍と現場の変革～●竹内秀和

- 各論 8** ものづくりで社会を支える
「テクノロジスト-技能の分かる技術者-」 ●大垣賀津雄
- 各論 9** 未来の建設業を担う、建設技術者・技能者のための教育訓練施設としての一考 ●米良 力

編集後記 ●門野 陽/今井信之/上原秀介/河合智寛/能瀬直樹/
藤丸啓一/南野貴洋/森田 健/吉田正友

大阪・関西万博パビリオン 2025年日本国際博覧会 いのち動的平衡館
2025年日本国際博覧会 いのちめぐる冒険
飯田グループ×大阪公立大学共同出展館
Dialogue Theater - いのちのあかし -

EXPO column これまでげんざい これから
●環境分科会× 建築デザイン分科会

project 豊平地域づくりセンター
京都女子大学 A校舎

gallery 橋の下、建築のはじまり ●齊藤智士

会告 生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2025
公式ガイドブック販売のお知らせ、生きた建築
ミュージアムフェスティバル大阪（イケフェス大阪）
2025 連携事業

情報見学小委員会 主催 YODOYABASHI Station
One見学会、第9回 日本建築協会論考コンクール片
岡安賞 募集要項

第10回学生のための現場見学会「株式会社村田製作
所守山イノベーションセンターPJT見学会」

京都支部 主催 セミナー企画 沖 種郎の建築-生誕
100年-その生涯と京都での活動、『建築と社会』2026
年2月号「第32回 会員特集“私の空間作法”」原稿
募集

設備の頁 建築現場の未来を形にするワイヤレス給電技術
～コードレス施工で実現するスマート建築の世界～

●久野和匡

法令コーナー 避難所となる学校体育館等への空調設備整備の促進
●藤木泰斗 秋元康男

再読 関西の建築 さざなみホール（中主町豊積の里総合センター）
●玉田浩之

Member's Forum 京都支部：丹後地域に沖種郎・初期木造建築を訪
ねる-コンクリートで作った木造建築-

information 磯崎新：群島としての建築/Hello Kitty展-わたしが
変わるとキティも変わる-/リビング・モダンティ
住まいの実験 1920s-1970s/阪神・淡路大震災30年
大ゴッホ展 夜のカフェテラス/新時代のヴィーナ
ス！アール・デコ100年展/違反建築防止週間

月間の動き 2025年8月
表紙写真：「レイガーデンから見た大屋根リング」 撮影：門野 陽

2025年11月号

2025年度 年間特集テーマ「未来」

特集 未来は明るい構造設計

座談会 1 レジェンドの見る未来
●北條稔郎、白沢吉衛、奥出久人、正野和司、榑原啓太、
瀧野敦夫、山下真輝、吉村純哉

座談会 2 若手技術者の拓く未来
●木下真緒、三田沙也乃、李 尚洙、蔭山誠太郎、
吉村純哉、多田全希、正野和司

構造設計、その“過去”と“未来”の狭間で

各論 1 X-Y世代の構造設計の楽しみ方
～人とデジタル技術が共に拓く未来～●田村尚土

各論 2 構造設計のいままでとこれから ●志摩好宣

構造設計を支える側で、未来を見る

各論 3 構造設計ツールの現在と未来 ●田中 実

各論 4 未来のBIM・AI主導～建築BIM推進会議の先へ～ ●志手一哉

各論 5 構造をいかに学生に教えるか
～大学でのカリキュラムと講義～ ●西山峰広

編集後記 ●正野和司/古島正博/榑原啓太/瀧野敦夫/多田全希/
水島靖典/藪田智裕/山下真輝/山本佳明/吉村純哉

project テクノ・ラボ大阪

gallery 伝え、活かし、残す

●星野良介、得能恵、足立花笑、尾谷伸也
会告 第71回工高生デザインコンクール入選者発表-設計
課題：わたしのまちの「アートスペース」-

2026
年在阪建築関係16団体合同新年交礼会

学生のための現場見学会「株式会社東畑建築事務所
大阪草煙舎建替計画工事見学会」

令和7年度 情報見学小委員会主催 第38回『茶室』見
学会

講習会委員会主催 2025年度 建築工事実務講習会一第
一線で活躍するプロに学ぶ実践スキル-

日本建築協会東海支部主催 建築工事実務講習会
情報見学小委員会 主催 YODOYABASHI Station One
見学会

京都支部 主催 セミナー企画 沖 種郎の建築-生誕100
年-その生涯と京都での活動

構造の頁 複雑な立体形状を実現する架構計画
～グラングリーン大阪 北館～ ●藤井高広

法令コーナー マンションの管理・再生の円滑化等のための改正法
●杉田雅嗣

再読 関西の建築 泉北ニュータウンの諸施設 ●橋寺知子

Member's Forum 活動報告：CCCフォーラム主催 第2回若手技術者
フォーラムレポート

京都支部：太田病院三河内分院現地調査及びイン
タビュー記録 (1)-沖種郎の足跡と地方集落に
おける文化財のこれから-

information オルセー美術館所蔵 印象派一室内をめぐる物語/
「LIGHT CYCLES KYOTO」(ライトサイクル キョウト)
/チームラボ バイオヴォルテックス 京都 常設展
/アーティストの目は何を見ていたか-ビュフェ、
エコール・ド・パリ、そして現代アートへ

月間の動き 2025年9月
表紙：横田朱音「つながる、技術」

2025年12月

2025年度 年間特集テーマ「未来」

特集 新しい足音が聞こえる

—想像した未来、創造する未来—

FILE 01 いしみらいラボ ●矢橋晋太郎

FILE 02 ウッドスピーカーが未来をデザインする ●横濱金平

FILE 03 「Re SHIMIZU-URA PROJECT」について ●いとうともひさ

FILE 04 暮らしのなかにあった手しごとを、未来につなぐ ●内田将大

FILE 05 屋台から繋がる人とまちの未来 ●今村謙人

FILE 06 森のある暮らしを日常にするための実験室
●久住一友 沖本雅章

FILE 07 里山を100年先につなぐ ●中川悠奈 吉村 理

FILE 08 五感を満たすメイドインジャパン「継承と革新」
●芝 幸太郎 椿 邦司

FILE 09 クリエイティブ領域におけるAI設計支援の進化と未来展望
●若尾正仁

project 中央日土地博多駅前ビル

gallery ROOT DOWN sdf. ●まつうら (松浦正)

大阪・関西万博の風景 1/3

会告 協会誌『建築と社会』掲載文における「著作権」についてのお知らせとお願い
「建築と社会賞」再開のお知らせ（予告）、2026年在阪建築関係16団体合同新年交礼会
学生のための現場見学会「株式会社東畑建築事務所大阪草煙舎建替計画工事見学会」
情報見学小委員会主催 第38回『茶室』見学会
講習会委員会主催 2025年度 建築工事実務講習会
日本建築協会東海支部主催 建築工事実務講習会
設備の頁 送風コストゼロでCO₂を回収
～パッシブDAC技術の研究開発～●並木光樹
法令コーナー 「ゼノベ」-既存テナントビルをバリューアップするZEB改修●小谷陽次郎
2025年の振り返り●河野 学

「再読 関西の建築」は休載します

Member's Forum イケフェス大阪2025
スペシャルツアー-日本建築協会Presents!
「大大阪100年、中之島中央部を歩く」リポート
京都支部：太田病院三河内分院現地調査及びインタビュー記録（2）-沖種郎の足跡と地方集落における文化財のこれから-
information 特別展 小磯良平展——幻の名作《日本髪娘》／拡大するシュルレアリスム 視覚芸術から広告、ファッション、インテリアへ／ゴッホ展 家族がつかない画家の夢／CREVIA マチュピチュ展
月間の動き 2025年10月
表紙：「時の痕跡をひらく」
撮影：佐々木琉偉

※これまで掲載してきた総目録は、下記のとおり検索機能強化のため本号で終了します。

『建築と社会』誌 会員専用アーカイブの検索機能が バージョンアップしました！

今まで「ワード検索」では、掲載「号」が表示されましたが、今回の改善で「該当ページ」が直接表示されるようになりました。

①日本建築協会ホームページよりログインしてください。

会員IDやパスワードがご不明な場合は、日本建築協会総務課（soumu@aaj.or.jp）までお問合せください。



②2026年1月現在、検索機能は2種類です。

下記図のAは、本誌全PDFからOCR機能によりキーワード検索が可能です。

一部の旧漢字や記号は、文字化け等により不完全な場合がありますので、お気づきの箇所は事務局までご一報ください。

下記図のCは、年代ごとの検索が可能です。

詳細な検索キーワードが分からない場合は便利です。ただし、現在は、2024年12月号まで一覧化しています。

以降はBから閲覧してください。



個人会員の皆さまへ

ご応募お待ちしております。招待券プレゼント！

応募フォームは協会ホームページの会員専用ページ内にあります。

応募期限は毎月20日、厳正に抽選して当選者を決定します。(初回申込者を優先いたします。)

① クロード・モネ 5組 | 一風景への問いかけ

モネ没後100年—国際的な記念プログラムの幕開け



クロード・モネ《戸外の人物習作—日傘を持つ右向きの女》
1886年、油彩・カンヴァス、オルセー美術館蔵
Photo © GrandPalaisRmn (musée d'Orsay)
/ Stéphane Maréchal/ distributed by AMF

クロード・モネ (1840-1926) の作品41点を含む、オルセー美術館所蔵の約90点に、国内の美術館や個人所蔵作品を加えた合計約140点を展示、風景画としてのモネの魅力に迫る。

自然環境が変動する今、モネのまなざしを通して「自然とどのように向き合うのか」という普遍的な問いを、現代を生きる私たちに投げかける。

映像作家アンジュ・レッチアによるモネへのオマージュとして制作された没入型の映像作品も展示!!

期 間 2月7日(土)～5月24日(日)
10:00～18:00
※3/20を除く金曜、5月の土曜は20:00まで
※入館は閉館の30分前まで
休 館 日 2/16(月)、3/16(月)、4/13(月)、5/11(月)
観 覧 料 日時指定予約制 (ウェブ予約チケット2,100円、窓口販売チケット2,500円)、学生無料 (要ウェブ予約)
*中学生以下 予約不要

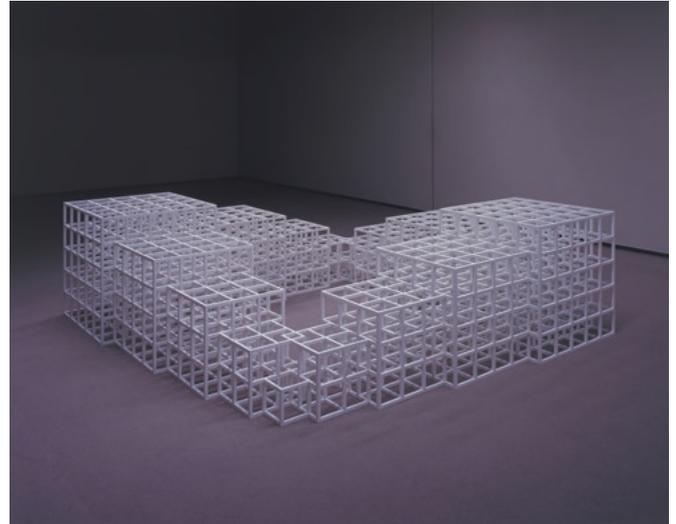
会 場 **アーティゾン美術館 6・5階展示室**
東京都中央区京橋1-7-2

TEL.050-5541-8600 (ハローダイヤル)



② ソル・ルウィット 3組 | オープン・ストラクチャー

日本の公立美術館における初の個展



ソル・ルウィット《ストラクチャー (正方形として1, 2, 3, 4, 5)》
1978-80年、滋賀県立美術館蔵
©2025 The LeWitt Estate / Artists Rights Society (ARS),
New York. Courtesy Paula Cooper Gallery.

20世紀後半を代表するアーティスト、ソル・ルウィット (1928-2007) は、1960年代後半、目に見える作品そのものよりも、作品を支えるアイデアやそれが生み出されるプロセスを重視する試みによって、芸術のあり方を大きく転換、自ら提唱した「コンセプチュアル・アート」は、その後の実践に多大な影響を与えた。

本展では、ウォール・ドローイング、立体・平面作品、アーティスト・ブックといった代表作の数々を通して、既存の枠組みや仕組みに再考を促し、別の構造への可能性を開こうとしてきたルウィットの思考の軌跡をたどる。

期 間 4月2日(木)まで
10:00～18:00
※入場は閉館の30分前まで
休 館 日 月曜日、1/13(火)、2/24(火)
※1/12(月・祝)、2/23(月・祝)は開館
観 覧 料 一般1,600円、大学生・専門学校生・65歳以上1,100円、
中高生640円
*小学生以下無料

会 場 **東京都現代美術館**
東京都江東区三好4-1-1 (木場公園内)

TEL.03-5245-4111



#クロード・モネ#没後100年#オルセー美術館#睡蓮の池

#ソル・ルウィット#コンセプチュアル・アート

会員IDやパスワードがご不明な場合は、日本建築協会総務課 (soumu@aaj.or.jp) までお問合せください。
招待券は当協会より郵送でお届けいたします。
当選発表は招待券の発送をもってかえさせていただきます。

information

③ 動き出す浮世絵展 OSAKA 5組

浮世絵の世界に没入できるデジタルアートミュージアム



葛飾北斎、歌川国芳、歌川広重、喜多川歌麿、東洲斎写楽、歌川国貞など世界的な浮世絵師の作品300点以上をもとに、3DCGアニメーションやプロジェクションマッピングを駆使して大人から子どもまで楽しめるグラフィカルなデジタルアート作品として輝き、複数の立体映像空間で浮世絵の世界に没入できるイマーシブ体感型デジタルアートミュージアム。

デジタル展示に加え、江戸時代に刷られた著名な浮世絵や復刻版の浮世絵も展示し、浮世絵の歴史や江戸の文化、浮世絵師たちについて解説する。

会場内は全て写真・動画の撮影が可能。幻想的な浮世絵の世界に飛び込んで撮影することができる。

期 間 1月17日(土)～3月14日(土)

10:00～20:00

※入場は閉場の30分前まで

休 館 日 なし

観 覧 料 一般2,300円、学生(高・大・専門)1,600円、

子ども(4歳以上中学生以下)1,000円

*3歳以下無料

*一般料金以外で入場する場合、学生証や年齢の分かるものの提示を求める場合あり

会 場 グランフロント大阪 北館
ナレッジキャピタルイベントラボ
大阪市北区大深町3-1
TEL.06-6372-6434



#一旗プロデュース#没入#イマーシブ体感#35万人以上動員

④ 特別展「大原美術館所蔵 名画への旅 一虎次郎の夢」 5組

日本の人々に本物を見せたい



エル・グレコ《受胎告知》1590頃-1603年 大原美術館所蔵

大原美術館は1930年に我が国初の西洋美術館として誕生し、まもなく創立100年を迎える。長い歳月の間に、収蔵品は多岐に拡充され、いまや国内屈指の美術館として広く親しまれている。

本展は、2025年春に児島虎次郎記念館が開館し、児島への関心がいっそう高まる中、創立100年を目前にした大原美術館の改修工事にともなう休館により、「これぞ名品!」というにふさわしい作品を館外で展示することが可能となった貴重な機会となる。

エル・グレコ《受胎告知》、ポール・ゴーギャン《かぐわしき大地》、クロード・モネ《睡蓮》など、ベルギーから始まる児島虎次郎の足取りを辿りながら、さまざまな名画を尋ね歩く旅にも似たひとときを、どうぞごゆっくりお楽しみいただきたい。

期 間 3月29日(日)まで

10:00～17:00 ※毎週金曜日10:00～19:30

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日

※祝・休日の場合は開館し翌火曜日休館

観 覧 料 一般1,600円、高大生800円、小中生400円

会 場 中之島香雪美術館

大阪市北区中之島3-2-4

中之島フェスティバルタワー・ウエスト 4F

TEL.06-6210-3766



#大原美術館#児島虎次郎#エル・グレコ#ゴーギャン#モネ

理事会

第2回通常理事会

11月13日(木) 16:00~17:00

OMM2F205室&WEB

出席者 指田会長ほか26名

- 議事 (1) 役付役員等の選任について
 (2) 常任理事の委嘱について
 (3) 2025年度上半期事業執行状況について
 (4) 理事・監事の要件について

会長・副会長・常任理事・支部長会議

第1回会長・副会長・常任理事・支部長会議

11月13日(木) 14:30~15:30

OMM2F205室 & WEB

出席者 指田会長ほか14名

- 議事 (1) 2025年度上半期事業執行状況(3支部より)
 (2) 意見交換

編集企画委員会

第8回編集企画委員会

11月6日(木) 18:00~19:30

WEB

出席者 三宗委員長ほか11名

- 議事 (1) 12月号 空間デザイン分科会・状況報告
 (2) 1月号 計画分科会・状況報告
 (3) 2月号 ひと・まち・建築小委員会・状況報告
 (4) 3月号 東海支部・状況報告
 (5) その他

第7回建築デザイン分科会

11月14日(金) 18:00~19:40

協会会議室&WEB

出席者 杉江副幹事ほか5名

- 議事 (1) 4月号特集担当ページについて
 (2) 8月号特集について
 (3) その他

第7回環境分科会

11月5日(水) 18:00~18:50

WEB

出席者 橋本幹事ほか6名

- 議事 (1) 「設備の頁」の企画
 (2) 4月号特集担当ページについて
 (3) 5月号特集号について
 (4) その他

第8回施工材料分科会

11月20日(木) 16:00~17:00

協会会議室

出席者 藤丸幹事ほか5名

- 議事 (1) 編集企画委員会の報告
 (2) 4月号ふりかえり記事について
 (3) 4月号特集担当ページについて
 (4) 10月号特集企画について
 (5) 編集企画委員会出席について
 (6) その他

第8回法令分科会

11月10日(月) 16:00~16:55

協会会議室&WEB

出席者 河野幹事ほか4名

- 議事 (1) 2026年特集テーマ「再生」について
 (2) 法令コーナー

第8回ひと・まち・建築小委員会

11月27日(木) 19:00~19:30

協会会議室&WEB

出席者 澤田小委員長ほか3名

- 議事 (1) 作品の選定

- (2) 作品の掲載状況、予定
 (3) gallery掲載報告、予定
 (4) その他

事業委員会

第5回情報見学小委員会

11月20日(木)

協会会議室&WEB

出席者 本田事業委員長、奥村小委員長ほか17名

- 議事 (1) 本年度の事業について
 (2) 茶室見学会について
 (3) イケフェス大阪2025について
 (4) その他

第8回CCCフォーラム

11月17日(月) 19:00~20:00

WEB

出席者 本田事業委員長、本田(隆)小委員長ほか4名

- 議事 (1) 第11回青年技術者交流会の企画具体化
 (2) 2026年度の企画の情報共有
 (3) その他

出版委員会

第7回出版委員会

11月25日(火) 17:00~18:05

協会会議室&WEB

出席者 中尾委員長ほか7名

- 議事 (1) 既刊書籍経過報告
 (2) 制作進行中の書籍
 (3) 出版に関する座談会について
 (4) その他

教育委員会

第4回史料研究会

11月18日(火) 18:00~19:10

協会会議室&WEB

出席者 橋寺委員長ほか7名

- 議事 (1) 連載「再読」「先達に聞く」について
 (2) 「先達に聞く」インタビュー実施について
 (3) イケフェス大阪2025報告
 (4) その他

未来創生プロジェクト

第7回建築次世代委員会

11月26日(水) 18:30~19:30

協会会議室&WEB

出席者 菅原小委員長ほか5名

- 議事 (1) リアル見学会について
 (2) 学生交流・広報企画について
 (3) その他

第8回2040委員会

11月28日(金) 19:30~21:00

PARK Lab.&WEB

出席者 吉田リーダーほか6名

- 議事 (1) 活動報告の掲載について
 (2) 今後の活動について
 (3) その他

U-35委員会 [talk baton 28]

11月14日(金) 18:00~20:00

昭和設計大阪ビル

参加者 中野委員ほか33名

ゲスト 小原英之氏、岩永葉月氏

U-35委員会「建築と集合知」

11月25日(火) 18:00~20:00

大林組カフェテリア

出席委員 大屋リーダーほか12名

一般参加者 41名

審査会

第1回論考コンクール審査委員会

11月17日(月) 18:30~19:15

協会会議室

出席者 (審査委員会) 松村委員長 ほか2名

(実行委員会) 吉村委員長

- 議事 (1) 一次審査から表彰までのスケジュールについて
 (2) 応募状況報告
 (3) 第2回審査委員会について
 (4) 公開プレゼンテーション・最終審査について

見学会

YODOYABASHI Station One見学会(情報見学小委員会)

11月27日(木) 13:30~15:30

講師 株式会社竹中工務店 岩崎 宏氏、井ノ口洪太氏

参加者 27名

出席者 奥村小委員長ほか6名

表彰式

第71回工高生デザインコンクール表彰式

11月15日(土) 13:00~16:30

協会会議室&WEB

出席者 受賞者13名

審査員 岸下審査員長ほか6名

委員 橋寺教育委員長、谷口工高生小委員会委員長

協会関係 指田会長

最優秀賞1点、優秀賞2点、入選7点

協力事業

アフター万博6社共催イベント

11月27日(木) 18:00~20:00

組織設計事務所とゼネコン設計部から語る「万博から生まれた可能性とこれからのまち・建築について」

主催 日建設計(幹事)・NTTファシリティーズ・大林組・竹中工務店・東畑建築事務所・安井建築設計事務所

協力 日本建築協会

会場 日建設計&ZOOM

登壇者 スピーカー(担当物件)

NTTファシリティーズ

島山文聡 <NTTパビリオン>

大林組 伊藤翔 <大屋根リング>

竹中工務店 山崎篤史 <森になる建築>

東畑建築事務所

平野樹仁 <大阪ヘルスケアパビリオン>

日建設計 岩田有紀

(全体ランドスケープ/静けさの森)

日建設計 高橋恵多 <日本館>

安井建築設計事務所

仁賀亮太 <フランスパビリオン>

コメントーター: 建築史家/大阪公立大教授

倉方俊輔

モデレーター: 日建設計 金子公亮

司会: 日建設計 喜多主税

参加者 指田会長他 約500名

(対面100 WEB400)

内容 万博で私たちが目指したものは何だったのか「デザイン・建築・都市」の視点から答え、主催企業中心としたステークホルダーと共に、未来へのアクションを語り、構想する企画。

編集企画委員会 (2025年11月現在)

副会長(編集担当) <環境分科会>
川合 智明 大橋 巧
理事(編集担当) 北野 勝也
木場 将雄 齋藤 悠輔
佐藤 榮一 生野 大輔
中尾 勝悦 寺井 千佳
中原 岳夫 仲村 憲一
西 博康 △橋本 直樹
橋寺 知子 梶井 貴廣
松島 茂樹 松本 健
◎三宗 知之 持留 崇志
吉村 英祐 <施工材料分科会>
副委員長 今井 信之
桑原 悠樹 上原 秀介
古谷 隆祥 △門野 陽
編集委員 河合 智寛
■特集小委員会 能瀬 直樹
<計画分科会> 藤丸 啓一
△飯田 匡 南野 貴洋
田中 直人 森田 健
松田奈緒子 吉田 正友
山崎 晋一 <法令分科会>
吉村 英祐 奥山 陽二
<建築デザイン分科会> 日下部美嘉
桑原 悠樹 △河野 学
小林 敬政 時見 正人
小林 啓明 吉田 悠起
篠木 大輔 ■ひとまち建築小委員会
杉江 順哉 浅田 翔大
田中 和八 伊藤 翔
田中 裕大 上田 寛彬
樋口 展寛 太田 栄治
平岡 翔太 加嶋 章博
△松本 和也 片岡 政規
米山 剛史 貴志 泰正
<空間デザイン分科会> 佐伯 先史
東 実千代 ▲澤田 純一
今井 充彦 鞆野 淳司
河西 孝平 豊田 充広
神田 健吾 西田 佳代
△黒柳 亮 平野 尉仁
佐々木琉偉 増田 敬彦
清水 香澄 山本 和宏
宗田 菜々
<構造分科会> (順不同)
古島 正博
榊原 啓太 ◎委員長
△正野 和司 ▲小委員会委員長
瀧野 敦夫 △幹事・小委員会
多田 全希 副委員長
萩原 学
水島 靖典
藪田 智裕
山下 真輝
山本 佳明
吉村 純哉

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail:sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応するために

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761/FAX.06-6976-8765
東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580/FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

印刷 2025年12月22日
発行 2026年1月1日
発行人 一般社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電話 06-6946-6981
印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所
定価 1390円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

革新を、止めるな。

Daigas Group

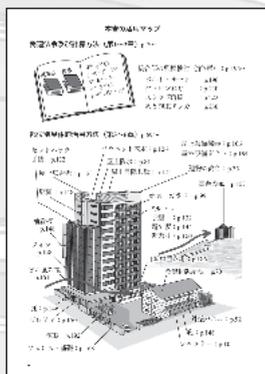
Daigasグループは創業以来120年、エネルギーを通じて社会課題の解決に取り組んできました。社会はいま、大きな転換期をむかえており、「今日の安心」が揺らぐ一方、「未来の日常」の実現が求められています。Daigasグループはこれからも、グループ社員一人ひとりが使命感と誇りを持ち、絶えざる革新(イノベーション)を追求し、新しいことに誠実にチャレンジし続けます。

イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工

日本建築協会 企画
西博康 著

A5判・256頁・本体 2700円+税

あなたは何もチェックせずに
「OK」の2文字だけを探していませんか？



屋根・外壁・笠木・手摺・
屋上目隠し壁・外構設置物…など、
多発する台風による飛散被害。
風圧力の設定からビスの使い方まで、
お客様を被害者・加害者にしないための
知識を実務者視点でやさしく解説。

設計者
施工者
外装業者
必携

学芸出版社

〒600-8216
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入

Tel 075-343-0811
Fax 075-343-0810

http://www.gakugei-pub.jp/
E-mail info@gakugei-pub.jp